

清水長一郎遺文集(4)

清水長一郎遺文集(4)

目次

一、 憶・和田喜久男氏	1	一、 潮の岬どらいぶ	47
一、 出土品から見た古代の日高平野	4	一、 古本あれこれ	50
一、 沖野岩三郎と山根寿子	12	一、 狐	51
一、 勝楽寺と広八幡神社神社巡拝	13	一、 狐のはなし	52
一、 房中謝客	24	一、 おおかみ談議	53
一、 「うしま」のてがら	26	一、 田端春三翁	55
一、 蜜柑あまいか酸っぱいか	27	一、 沖野岩三郎の短歌	57
一、 モミの木は残った	29	一、 この美しきもの	59
一、 歌集「青嵐」	31	一、 本宮・川湯温泉	60
一、 裸ダンス	33	一、 つばき	65
一、 今回発見された 原谷の板碑	34	一、 瓜溪石	67
一、 小熊河原五十年	36	一、 大和路の一日	68
一、 原谷青年学級の諸氏に 鹿ヶ瀬峠略史	38	一、 ある伝説	71

一、螢	73
一、お盆におもう	74
一、虫のよい話	76
一、馴れ鮒	78
一、石仏巡礼	80
一、亥の子石	81
一、室生寺	83
一、湯川政一郎氏のこと	85
一、維新雑話	86
一、由良へ来た徳川慶喜	87
一、明日香路	88
一、日高民話伝説集	90
一、雑木の庭	91
一、城崎温泉	93
一、日高地方史年表	96

一、女郎蜘蛛	98
一、読者の郷愁誘う 清水氏の女郎蜘蛛	100
一、片山隆三氏の追憶	101
一、余滴	103
一、和訳仏説阿弥陀経	104

噫 和田喜久男氏

「紀州新聞」昭和三十五年三月一日掲載

○ 和田喜久男氏がお悪いと聞いて、取敢えず御見舞のお葉書を差し上げたが、なお気がかりなので御訪ねした。二月十八日、午後のことであつた。

床についておられるかと思つた和田さんは、以外にも机によつておられた。然しそのお顔や手足には、既に浮腫が見られたし、何時お伺いしても必ず何か読むか書くかしておられた机上が、むなしく片付いたまゝであつたのも、胸にこたえた。

○ ここ数年来ひどい喘息を病まれていた和田さんは、冬が苦手であつた。昨年もかなりひどい大患いをされた。今度も年末に軽い下痢をおこされたのがもとであつたと聞く。私は「もう一月の辛抱ですよ。彼岸ごろには自然御元氣になりますよ」と、わずかに御なぐさめし、一二三つ世間噺をした。「下痢もなおつた。痛いところもない。が、どうも食欲がない。食べないのですつかり弱つてしまった。机によつてるのが精一杯だ」とも云われた。気性の勝つた方であつたが、それ程衰弱しておられたのだ。

奥の間の床に丹頂鶴が二羽向い合つた軸がかゝつていた。誰の作かとお訊きすると、川島草堂の筆で、正月に出して見たと答えられ、それから一しきり御坊とも縁の深かつた草堂画伯の話になつた。

私は普段から和田さんにお逢いするごとに、妙に鶴を連想した。私が知つた頃からの和田さんは、それこそ「瘦軀鶴の如し」と云う形容が、ぴったりあてはまるような、品のよい方であつた。そして和田さんの最期の床の掛け軸が、鶴の画であつたと云うことは、いかにも和田さんにふさわしい気がする。

○ 私と和田さんに初めてお目にかゝつたのは、正確には記憶していないが、私が「森彦太郎先生伝」を執筆中のことであつたから、御交際をいたゞいたのは、晩年の十余年に過ぎぬ。けれども此の間私は、しげくと和田さんをお訪ねし、数々の御指導を受けた。

また比較的御気分よかつた頃は、和田さんのお供をして、川辺町和佐の光源寺の梵鐘銘の拓本を取りに行ったこともあつた。芝口常楠先生と和田さんと私と三人で、印南町名杭の観音像を拝観に行つたこともある。三人は切目駅で下車の上、切目川沿いに名杭まで歩き、帰りは切目川の日当たりのよい堤防の下で辯当食べた

りした。海^一南^九市^五日^四方の旧家・青木家に伝わる、青木勘兵衛の古文書を、見に行ったこともある。

あれは昭和二十九年九月五日のことであったが、私が「矢田村誌」の編纂にかかり、千津川神明神社に伝わる観音像の鑑定をお願いしたところ、和田さんは不自由なお軀を、芝口常楠先生や、佐山伝右衛門氏、巽三郎氏等とともに、わざわざ千津川まで来て下さった。

また南紀郷土学会の熱心な会員として、初めころはよく御出席されたし、「棟札の研究について」と題して、日ごろの深い蘊蓄^{うんちく}を述べられたこともあり、「魚名ゴリについて」と題し、博渉^{はくしやう}ぶりを示されたことも、今は懐かしい思い出である。



然しここ三、四年来だん／＼外出されなくなった和田さんは、お訪ねするとひどくよろこんでくれた。ひきとめられるのをよいことに、私は二時も三時間も、時には半日も一日もしやべりこんだ末、御馳走になったことも珍しくない。

毎年早春のころ、山の芋を御馳走してくれたのも、この三・四年来慣例のようになっていた。芝口常楠先生や、田端憲之助氏と、ご一緒のことがおゝかった。私が少し吞める口だと何処から聞かれて、最近は私にだけお酒まで添えて下さった。無遠慮な私はこうした大先輩方の前でも、一人で御機嫌になった。

ペンが妙な方面に外れた。

「清水君、愚につかぬことを書くなよ」

どこかで和田さんが笑っておられるような気がする。



和田さんは人情のこまやかな方であった。私が昨秋来「矢田村誌」の最後の校正やら、家庭的な取り込みやらに忙殺され、久しくお伺いしないでいると、

「清水君、最近さっぱり見えぬ。どこか悪いのではないか」

と、芝口先生に問い合わされ、先生の方から私の方へ御連絡があった。二月上旬のことで、恐らくこの葉書が和田さんから先生宛の最後のお便りではなかったかと思う。私のところへは一月半ば過ぎ、年賀状のお返事をおかねて、村誌完成の御祝いの葉書を下さったのが最後となった。

和田さんはこうした人情かであった反面、学問上のことになるや厳しかった。一切妥協を許さなかった。「紀伊続風土記」や「紀伊国名所図会」の誤りも、鋭く追求してやまなかった。間違いを発見すれば、博士である

うが、大学教授の論文であろうが、遠慮はしなかった。またそれだけに、実に綿密に研究されていた。私なども、いつも手厳しく叱られた。

「君のように新聞の提灯持ちのような文章ばかり書いていては駄目だ」

と、論難された。だが、私にはまた私の考え方があるが、今はそれには触れるまい。

けれども和田さんの云われんとするところは、よくわかった。つまり、学問とか研究とか云うものは、もっと真剣なものだ、地道なものだ、孤独なものだ、と云うことであつた。お調子に乗るなど警告されたのである。そして和田さん自身はこつこつと倦む事なく古書を涉猟し、あの病軀と不自由を克服して、広く各地に照会の上、資料を求め、ねばり強く研究を続けられた。健康な私達が呑気そうに飛び回って何一つロクな仕事をしないのが、齒がゆかつたに違いない。



和田さんの趣味と研究は、広くかつ深かつた。以前は草人と号し句を嗜まれ、一時・二十日句会に属されたこともある。書画・骨董にも明るかつた。茶道も心得ておられた。興国寺の先住雲巖老師のもとで、禪に参じたこともあつた。

然し、何と云つても和田さんの本領は、郷土研究であつた。

近著の『和歌山県郷土研究者名簿・昭和三十五年版』には

和田喜久男 美浜町和田 研究分野(仏教美術)

としているが、特に金石文と石造美術に詳しかつた。中でも古鐘の造詣では、県下でも第一人者としてよい。私は機会あるごとに、これだけの研究を埋まらすのは惜しい。是非まとめておいて貰いたいとおすすめたが、そのうちやるといわれたまゝ長逝された。全く惜しみて余りある。

若い頃大阪毎日新聞の通信員をされたと云う経験を持ちながら、めつたに新聞へは書かれなかつた。その和田さんが何を思ったか、昨年の夏「日高新報」に、「緑陰漫筆」と題する随筆を、数十回に亘り連載された。やはり虫が知らせたのかも知れぬ。

少し堅いところもあつたが、実に面白かつた。当時は新聞が来るのが待たれた。もっともつと書き続けられるようおすすめたが、今どき、あんな物は誰も読んで呉れるまいと、あのまゝになつた。

私の手もとには、「和田村小字名の研究」一冊、四百字詰原稿紙四、五百枚位。「万葉集、日高の歌三、四」四・五十枚程度のものが遺っている。また昨年「有田郷土文化研究」に載せた、「下阿田木神社の五部大乘経

の研究」等も傑れた研究であつた。

そして和田さんが最も心を打ちこんでおられた「紀伊資料」十数冊が、最後にお訪ねした日に、未完のまゝ御自身で製本されて、書架に並んでいた。

またその時、一、二時間おしゃべりした末、私達の間で数年来さがして求めいた「寛文雜記」がようやくその所在がわかりそうだと報告すると、和田さんの方でも串本地方の某氏も所有していると聞いたから、そのうち借用して写本しようと云われた。そしてその翌日の二月十九日午後二時頃、眠るがごとく六十六歳の生涯を終えられた。

○

生者必滅・会者定離。人は生まれた時から、死ぬ日のあるのはわかりきっている。けれども最も尊敬する先学の一人を亡った悲しみは大きい。私は何とも云いようのない淋しさを匿すべく、一夜安酒を喰らい巷を彷徨したが、その空虚さは却つて深まるばかりであつた。

思えば昨今の私は、六年越しの「矢田村誌」が完成した疲れが出たか、少しだらけていた。その折柄和田さんの急逝であつた。全く大きな鉄槌を加えられた程の衝撃を受けた。

私は再び机へ向かうとして「清水君今度は少しましな仕事をしたナ」と、和田さんに褒められる様な仕事をしよう。

(昭和三五・二・二三夜)

出土品から見た古代の日高平野

「紀州新聞」昭和三十五年四月十六・十七・十八・二十・二十一日掲載

この一編は四月十一日御坊警察署で御喋りした小話の原稿である。

もとより私は考古学者でも歴史家でもない。自分の好みで自分流に、日高地方の歴史を調べている、一介のアマチュアに過ぎぬ。皆様が御覧になったら、とんでもない間違いや、独断を冒しているかも知れぬ。御気づきの方は御教示をお願いしたい。

また同じ縄文式文化時代、弥生式文化時代にしても、早期もあれば前期もあり、中期、晩期もあり、土器、石器の様式にもそれぐの相違がある。然しそうした細かい点は専門家でない私の手におえぬし、

聞く方にしてもあまり興味あるまい。自然極めて常識的な話に終わっている。けれども大体の大筋はこれでも或程度、御わかりいただけるかと思う。



私、清水でございます。郷土について御喋りをせよと云う事でやって参りました。然しやくざ仲間の仁義ではございせんが、ひと口に郷土と申しまして、いささか広うございます。我が国から見れば和歌山県は郷土でありますし、和歌山県から云えば、日高郡が郷土に当たります。また時代から申しまして、縄文式時代から、宇宙ロケットの飛び出す今日まで、数千年の長きに亘っております。この広漠たる広さと、悠久な歲月の中から、一体何をお話しすべきでありましょうか、特に御注文がなかったのでありますから、私の方で適当に撰択させていただいて、仮に「出土品から見た日高平野の古代」とでも題しておきましょう。

私達は毎日それ／＼の仕事に追われて忙しいが、何かの機会に、ふと私達の住んでいる日高地方には、一体いつ頃から人が生活したのだろうか、また有名な道成寺は文武天皇の勅願で、大宝元年（七〇一年）創建と伝えられるが、本当だろうか。或はさきごろから小谷緑草氏が「紀州新聞」に「湯川一族興亡史」連載しているが、湯川直春とはどんな男であったのだろうか。こんな疑問を抱くことがあります。そうしたことを順序もなく、お話ししてみたいかとも思います。



昭和二十八年八月（一九五三年）ごろの事であります。七・一八水害で根こそぎ破壊された国鉄日高川鉄橋附近を復旧工事中の一工夫が、和佐よりの日高川河原の地下約一米の力所から、古い土器を発見致しました。この保線工夫は印南町印南原の人で、多少考古学の心得がありましたので、土器片を採取の上、同地の県文化財委員であり、日本考古学会員である巽三郎氏に報告致しました。巽氏が調べてみると、この土器片はまぎれもなく、日高地方では極めて珍しい縄文式土器であることが分かりました。

そこで巽氏は同学の高野光男氏等とともに現地に参り、本格的な調査をしました処、上の方一米は土師器と縄紋後期の土器片、次いで中期／＼前期／＼早期と、縄紋式の各時代の土器片と石斧や石鏃、中には炭化した木の実にしいらしいものも出て参りました。

これらの遺物から考えますと、はっきり年代を申し上げるのは難しいですが、すでに数千年の昔、私達の遠い先祖が、日高川の清流に臨む川辺町和佐附近に生活していた事がわかるのであります。その後、この鉄橋の附近ばかりでなく、対岸の入野の平地、或はさらに上流の松瀬附近からも、多くの土器や石器が発見されまし

た。

この時代はまだわが国では稲が作られていませんでした。主として山の木の実や川や海の魚や貝類、或は鹿や猪や兔をとってくらしていた。所謂、狩猟と採取経済の時代であります。

恐らく日高地方の縄紋人は、日高川に臨む和佐、松瀬、入野の平地に、小さな集落をつくり、日高川の魚や、山々の兎や鹿をとって生活していたのでありましょう。

もっともこれまでも、昭和初年頃（一九三六年頃）であつたと記憶しますが、美浜町田井、小字津呂から縄紋晩期の土器が出土したことごさいますか、これは和佐よりも大分新しいもので、今の処日高地方では、この和佐遺跡が最も古い時代に属しております。



私は今まで縄紋土器とか、縄紋式石器とか申し上げましたが、お話しだけでは御承知できない方もおられるかと思ひます。百聞一見に如かずと云う諺もごさいます。幸い土器は盛っておりますが、ここに石器を持つておりますので御覧をいただきます。この長い方が石棒で、この幾らか扁平な方が石斧であります。先ず石棒の方から簡単に御説明申します。

昭和三十三年（一九五八年）の晩春のことでありました。或晩、私は印南町の友人小谷緑草氏と中田宇南氏に御馳走になり、かなり酔っぱらって帰ってきました。すると座敷の端にこれが転がっているのです。これはえらいものがあるナ。酔うてはいますが、そこは好きな道のことであり、石棒であることが一目でわかりました。それにしても朝家を出る時なかつたものが、誰がどうして持つて来たのかさっぱり見当が付きません。そこで家人に聞いて見ますと、

実は昭和三十三年二月頃のこと、川辺町若野の西川清一氏が、同地の小字西浦の山林を開墾中地下約五十センチ位の力所から、偶然発掘したと云うことで、太さ十三センチ、長さ二十三センチ、重量六百五十グラム、石質は緑泥片岩であります。どうも余り見たことのない代物で、西川氏も何に使つたものやら、何と云うものやら見当がつかない。そこで清水という男は古いことを調べるのが好きだから、彼奴に見せてやれ、と、まあこういう具合で私の留守中に持つて来たのであります。私も考古学専門家ではありませんから、断言は出来かねますが、この石棒は縄紋式文化時代中期のもので、磨製有頭石棒であろうことは、先ず間違ひなからうと考えます。

これまで日高地方では数多くの石器類が出土しております。しかし石棒が出た例は割合に少なく、私の知る限りでは「日高郡誌」に見る印南町山口出土のもの、巽三郎氏の著「日高古文化財図録巻一」にある、野口火

葬場出土のもの及び川辺町土生八幡神社所蔵の、旧藤井、今宮神社の石棒の三例に過ぎません。しかもこれは前の三例に比べて、割合完全であり、形も細工も優れております。

それなら、石棒とは一体何に使われたのでしょうか。実はこれには諸説紛々として、学者の間にも定説がありません。この石棒は先程も申しました通り、長さ二十三^サでありますが、此処の処を堅い鉄器でもって、打ち折った痕跡がございますから、もし完全なればこの倍以上、すなわち五十^サ以上あったかと思われまう。太さも十三^サでありますから、握るのに手ごろであります。したがってこれ等は或は武器として叩合いの道具に使用したかも知れませんか。また、ひよつとすると村の頭が、儀礼用に使ったのかも分かりません、栗のいがを割るのに用いたことも考えられます。

それに較べると、土生八幡社にある石棒はこんな風に手のこんだ頭がございません。所謂、無頭円筒形で、全長九十^サ、太さ四十五^サ、重量は計測したことはございませんが、私一人では持ち扱いかねます。したがって、土生八幡社の如き大形のもは実用に使用したものでなく、何かマジック的、（即ち冗術的）な性質をもつものと考えます。なおついでに申し上げますと、県下では石棒の出土数は、かなり沢山あります。しかし此の土生神社の石棒はその中でも横綱級だと思ひます。

それから先程から皆様は、この石棒を御覧になつて、妙なことを連想なさいませんでしたか。はつきり申し上げると、男性のあれに実によく似ているではありませんか。相当あくどい刺激に慣れている現代の私達でさえ、そう感じるのでありますから、もつと素朴な古代の人にあつては、猶さらの事であつたと思ひます。

人が生まれると云う事は、科学の進歩した今日でさえ、まだく神秘のベールに被われた点が多いのであります。況んや未開時代の古代人にあつては、男と女がよつて新しい生命が生まれると云うことは、一大驚異でありました。不思議なものを崇敬するのは世界各地の古代人の感情であり信仰であります。そこに生殖器信仰がおこつて参ります。後世における金勢信仰こんせいしんこうなどの淵限であります。この石棒がこの様に打ち折っているのは、恐らく後世に於いて、金勢信仰などによつて、一本の石棒を二つに折り、その一つを御神体として、路傍の小祠にお祀りしたものでないかと思ひます。

一体この石棒が出ました石浦という処は、川辺町大字小熊から、大字若野に至る途中で、海拔約十^{六三二}位の丘陵が日高川にせまり、その山裾を道路が通じています。然し、この道路は今から三百年程昔の寛永九年に、若野井堰の水路が開かれた際作られたもので、それ以前は今の石棒が出た丘の上を通つていた。したがって此の石棒はその路傍の、小祠に祀られていたと、斯様に判断していたのであります。ところが此の私の推論も又、一寸怪しくなつて参りました。と云うのは、その後に至つて、またく同じ処から、此んなものが出て来たの

であります。

これは考古学上、石の斧と書いて石斧せきふと云います。字の通り石の斧であります。太古に於いて私達の先祖が金属を使用することを知らず、石をこの様に打ちく（一九五九年）だき、砥石で磨き上げて、斧のかわりに使いました。

この石斧も、さきの石棒が出た処から、昭和（一九五九年）三十四年六月に、掘り出されたものであります。長さ十五セ・巾五、五セ・重量は四百八十キで、形式から見て縄紋中期のものと思われるのでございます。何しろ当時はまだ人間が金属を利用することを知らなかった時代でありますから、石が一番堅かったのであります。そこでこの石斧を、棒の尖端に、葛か何かで結えつけ、木を伐ったり獣の骨を叩き切るのに用いました。当時としては無くてはならぬ生活必需品であつた訳であります。

そんな工合で石斧は日高郡でも沢山出ております。一寸数えただけでも

国鉄御坊駅構内・上富安火葬場附近・由良町大谷・日高町荊木向山・印南町山口、赤佐古谷、同滝ノ口・印南町切目下津川

と拾カ所近くあるのでございます。

たゞ此処で考えておかねばならないのは、さきの石棒だけではただでありますと、御話申した通り何処から移ってきて、後世性神として祀っていたのが、その後何かの事情で土中に埋まったのと見られるのですが、続いて同じ時期のこの石斧が出て来たのですから、もう一度考えて見なければなりません。

そんな訳で、昨年十月巽三郎氏や高野光男氏等と、出土地を踏査致しました処、果たせるかな、石鏃、つまり石でつくった矢尻、こんな小さいもの一個と、土器片を発見致しました。これだけで簡単に決めるのは危険であります、まず縄紋式文化時代の遺跡として、ほぼ間違いないと思うのであります。

ここは海拔十ミぐらいの小丘陵で、直ぐ傍を日高川が流れており、南をうけて暖かく、洵に古代人が生活するに相応ふさわしい地であります。

以上のお話をつ約めて申しますと、今の処、日高平野の周辺ではまず川辺町和佐から、松瀬あたりの日高川に臨む台地にはじめて私達の遠い祖先が住みついたらしい。そしてその時期は大体四、五千年の大昔に当たると云えるのかと思います。それからやゝ時代が下がって三、四千年昔には、今の国鉄御坊駅附近や、美浜町田井方面にも、小規模ながら集落があつて、人間が生活していました。これはこの附近から出ている石器類や、土器片から証明できると思います。

もっとも御坊駅附近や田井方面は、今でもかなり土地が低く、少し大雨が降ると冠水致します。ましてや堤防の無かった大昔は、日高川は今のよう藤井で急カーブして、天田の方へは流れず、自然のまゝに真つすぐ流れ、また西川にしても自由奔放に流れていたに違いありません。然しその処々には流れに臨んだ小高い処や、中島があったと思います。またこの辺の地盤は絶えず沈下と隆起をくりかえしたと考えられます。現に昭和二十年の南海地震以来は、大分沈下していると云うことであります。この時代が考古学上で云う、所謂、縄紋式文化時代で、日高地方のあけぼのであります。



さてかように狩猟と採取の時代が幾千年が続いたある日、我が国へ米作りが伝わって参りました。そしてこれまでの縄紋式文化時代から、弥生式文化時代へと移り、人間生活の上に大きな革命が訪れました。

考えて見ると人間というものは勝手なもので、戦中・戦後を通じて私達は米のため随分苦しんだ。わが国全体がひどい食糧難で、わずか三升、五升の米のために、一里も二里も買い出しに出かけました。一時は銀飯と云えば目の色を変えたものであります。

敢えて戦中、戦後ばかりではございません。考えて見ると我が国に米作りが伝わってこの方、つい最近までの政治と経済の大本は、云つて見れば米をどうするかと云うことであります。天皇も貴族も大名も武士も、生活の土台は百姓の作った米で支えられていました。つまり米のやりくりを上手にやるか、下手にやるかと云う事でありました。

ところが近年になつてようやく米が裕になつて来ますと、やれ早場米はうまくないとか、配給をいらぬとか申しております。それにはそれだけの理由はありますが、何と云つても身勝手な感じが致します。

それはともかくとして私達日本人にとってこれ程大切な米が、どういう風にわが国へ伝来したかとなると、案外わかつていないのであります。最近になつて、やつと、稲の故郷は、印度の北アッサム辺りだと見当がついただけで、それが我が国では先ず九州へ伝わった事は間違いないが、南から九州へ来たというものの、或は北からであるとするもの、いや南と北と両方から伝わったとするものなどあつて、定説がありません。ただその時期は約二千年位昔の、弥生式文化時代であると云うことは、その時代の土器に粃の痕がついていること等から、ほぼ一致しております。

とにかくかようにして私達の遠い先祖は、米を作ることを覚えしました。そうすると今までと違つて生活が非常に豊になり安定してきました。その筈です。今までのように兔を捕ったり、魚をとったりする生活では、云

うて見れば向う任せの生活です。今日運よく兔を二匹も捕らえたが、明日は一匹も捕れないかもわかりません。魚にしてもそうです。ものの例えにも「柳の下にいつもドジョウはいない」と云います。甚だ生活が不安定であつた訳であります。

それが米を作るようになると、春に種を蒔いておけば、秋の収穫は先ず約束される。こうなると人手も必要になる。小さかった集落もどんく大きくなつてきます。この時代、所謂、考古学者の云う弥生式文化時代の、日高地方の遺跡として、先ずさきの国鉄御坊駅附近や、美浜町田井、或は日高町荊木向山一帯と御坊商工附近があります。このうちでも最も規模の大きいのは、御坊商工高校附近の遺跡であらうと思います。

昭和三十三年の春であつたと思います。私は湯川町小松原の大島吉松氏から、当時工事中の御坊商工のグラウンド附近から、土器片らしいものが出ているから、一度見て来いと云う報告をいただきました。

そこで巽三郎氏に連絡するとともに、私も参りましたが、成程、大島氏の云われたように、殆んど無数と云つてよい程多くの弥生式土器片が散乱していました。また別の日ここで弥生式石斧も二箇発見されております。その後この遺跡の本格的な調査は行われておりませんが、恐らく日高平野地区に於ける、最大の弥生式遺跡であらうと思われるのであります。

さて斯様に米作りがひろがつて参りますと、無論、凶作と云うこともあります。何と申ししましても、兔や鳥を追いかけていた縄紋式文化時代と違い、生活が安定し裕になつて参ります。そこに縄紋式文化時代にはなかつた、銅鐸と云うような立派な遺物も出て来る訳であります。

皆様は道成寺へ参詣して、宝物を拝観したことがございますか。そしてその時、本堂の西の方に釣鐘のような形をした、妙なものが飾られているのに御気づきではございませんでしたか。

あれが所謂、銅鐸であります。現在道成寺に納められている銅鐸は、高さ一、二尺・重量三十kgで、比較的大型のものであります。この銅鐸も、或学者は楽器であると云い、また或学者は豪族の権力の象徴であると云い、まだ定説はございませんが、最近では共同体の、農耕関係の祭儀に用いられたのであらうとする説が、最も有力であります。

現代まで日高郡で発見されて銅鐸の数は十二箇で、和歌山県下の出土数の半数以上をしめています。今その出土地を簡単に申し上げますと、南部川村西本庄から三個・同じく晩稲から二個・この附近では日高町荊木向山から二個・湯川町丸山朝日谷から三個・湯川町から一個・そしてこの道成寺のものであります。

道成寺の銅鐸は宝暦十二年（一七六二年）と申しますから今から約二百年ばかり前、藤田町藤井、現今の道成寺駅附近の田圃中から出土したと云うことであります。

大体これまでの銅鐸の出た例を見ますと、大抵は山の中腹などが多く、このように平地部の田圃中から出たのは、非常に珍しいのであります。道成寺のお話しが出たついでに、少し脱線致しますが、道成寺創建の縁起によりますと、寺が出来た頃は道成寺の表門筋が入江であつて、道成寺と八幡宮との間には長い橋が架かつていた。そして八幡山の麓には九人の海士が住んでいた。それ故あの辺りは今でも九海士というのだと申します。そして或日海士が海には入って何か光りかがやくものがあるので拾い上げて見ると、それは金で作った一寸八分の観音様で、今も道成寺に御祀りしていると申すのであります。然しこれも考えて見ると実は怪しいのであります。

何故なら、入江であつた筈の道成寺表からは、さき程申しました銅鐸が出ております。また、御坊商工高校附近には、弥生式遺跡と見られるものがあります。立派に人間が住んでいた証拠がある訳であります。人間は陸棲動物でございしますから、海であつた筈はありません。成程日高川が自由奔放に流れていましたでしょうか、デルタ地帯で処々に水溜りはあつたでしょうが、海士が住んで幾尋もある水底に潜りこむと云うのは、少し噤が大きすぎて、どう考えてもおかしいのであります。

またもう一つ、ついでに申しますと、道成寺は文武天皇の命を受けた、紀の道成が創建した。そして道成は日高川奥から大木を筏に組んで、その筏に乗って日高川を流して来る途中、川の中の岩に筏を衝突させて溺死した。その道成をお祭りしたのが、今の川辺町三百瀬にある紀道明神であると申します。紀道明神の紀道は紀の道成からとつた名前であると云うのであります。然しこれもどうもおかしい話であります。紀道は紀道成ではなく、恐らく狭処のキドであらうと思ひます。即ち狭い処と云う意味の地名であると私は考えるのであります。

こう云う例はまだ外にも沢山ございます。例えば有名な木曾義仲が育つた木曾は、狭少でつまり山の中の山の狭い地と云うことでありましようし、お隣の今の奈良県を大和と云うのは、山の多い所で、即ち山処がつまつて、山トとなつたものでありましよう。これから考え、また地形から見まして、紀道明神の紀道は狭処であらうと存じます。それをうまく紀の道成に結びつけたものと思ひるのであります。

然し、こう申しまして、何にも昔から伝えられた美しい物語を、知つたかぶりをして、わざわざぶちこわす訳ではございません。只、あれは私達のお爺さんやお婆さんが、云い継ぎ語りついできた伝説であつて、本当はこう云う事らしいと、一応呑み込んでおいて、また私達の子や孫へ、この古い美しい物語を伝えて行きたいと思ひるのであります。話は妙な方向へ脱線致しましたが、このへんで失礼致します。(昭和三五・四・一一)

沖野岩三郎と山根寿子

「紀州新聞」昭和三十五年七月三日掲載

妙な取り合わせだが今では女優山根寿子を知っている人も、沖野岩三郎先生を記憶する人は少ないかも知れぬ。先生は明治九年^(一八七六年)一月五日、美山村寒川字下長志、沖野みわの私生子として生まれた。何しろ時代が時代だから、子供の頃は二口目に父無し子といじめられ、村人からも冷たい目で見られた。小学校卒業後百姓の手伝い、村役場の書記、大工、教員と苦勞の末、牧師になって新宮に転じ、こゝで有名な大逆事件に遭遇した。そして事件の首謀者の一人と見られた医師大石誠之進と親交があった為、あらぬ疑いをうけ官憲の厳しい監視と社会の圧迫に苦しんだ。大正六年^(一九一六年)この異常な体験を書いた小説「宿命」が大阪朝日新聞社の懸賞小説の二等に当選して一躍花形作家となった。以来昭和三十一年^(一九五六年)一月八十一歳で軽井沢千カ滝の山荘で歿するまで、実に百十数冊の著書があり、恐らく日高人や紀州人として著作数のレコードホルダーといえよう。しかもこの夥しい著書には、決まると云ってよい程紀州の町や村、日高の山河、寒川の風物が顔を出す。郷人に対しては必ずしも好感を持たなかったらしい先生も、郷土の自然には生涯深い愛情を注がれたのである。

ところが最近女優山根寿子は先生の隠し子だという話を聞いた。寒川方面でもその噂は高いと云う。何でも七・十八水害後、彼女から数々の見舞い品が、村に遺る先生の縁辺へ届いた。何よりの証拠ではないかと或人は私に語った。事情を知らぬ私はヘーそんなものかなアと考え込んだ。作家としてもありそうな話だとも思った。けれども何か腑に落ちかねるものがあつた。と云うのは、私の知る限りでは我国のクリスチャンは、時には偽善的とも見える程品行方正で、特に女性関係では清潔な人が多い。クリスチャンで然も社会思想家でもあつた先生に限つてと云う信頼感が、強く私の心を支配した。そして私のこの考えは矢張り正しかった。

私の聞いた真相はこうだ。或時西村伊作氏が「沖野君いゝ人を紹介しよう」と引合わせたのが、当時浅草某劇団の女優であつた寿子の母であつた。既に寿子は生まれていたが、母はその愛人の某代議士に捨てられて苦しんでいた。見かねた先生はその後山根親子に、物心共に少なからぬ援助を与え、山根親子もまたしげしげ沖野邸へ出入りした。

冗談のうまかつた先生は作家仲間の集まつた或席で、「山根寿子は本当は僕の娘だよ」ともらした。これが世間にパツと世間にひろがつた。「僕も小さい頃父無し子といじめられた。寿子さんだつて父無し子と云われるより、僕のような者でも父親としておけば、幾らか肩身がひろかるう。それに僕はこの通りお凸だ、山根さ

んのような美しい人を娘に持つのは光栄だよ」と特徴のあるお凸の額を撫でながら語った。
名前は忘れたが禅宗の某高僧にも、これによく似た逸話がある。味の深い噺である。

勝楽寺と広八幡神社巡拝

「紀州新聞」昭和三十五年十月十五・十六・十七・二十一・

二十二・二十三・二十四日掲載

九月二十三日、久しく中絶していた史蹟巡りを行った。二十二日夜は宿直で、かなり晩く睡ったのだが、五時に目がさめた。空を仰ぐと星が美しかった。朝湯を沸かして浴し、身心を清浄にする。

八時五十分御坊駅へ駆けつける。しばらくすると湯川スタジオの湯川東介氏が、大きな三脚をかついで現われる。進んで写真班の役目を買って出してくれたのである。此処で新晃商会主小山 訓 誉・元湯川公民館長酒井耕次郎・和田小学校教諭宮本素久・日高高校教諭古川成美の諸氏の参加されるのに逢う。九時一分発の汽車が着いた。車窓から高野氏の合図しているのが目についたので、みんな高野氏の前後に席をとる。二つ、三つお喋りしているうちに列車は湯浅駅に滑り込んだ。

ホームへ降りると宮所恒楠氏が悠々と巨軀を現し、続いて前由良町長岩崎茂助・小山民造・井原武・少壮の郷土研究家谷口幸男・瀬戸勇治・南部中学教諭津村慎吾の諸氏と、今度初めて南部川から参加された西川裕氏を加え、総勢十五名となり、駅頭にはかねて今日の御案内役をお願いしておいた、湯浅町、紀州文化研究会の西尾秀・田中繁雄・阿瀬卯兵衛の三氏が見えておられた。

勝楽寺

勝楽寺は湯浅駅の東南数百歩の、見晴らしのよい台地の上にある。西尾秀氏の御説明によると、

平安時代の末頃から鎌倉時代へかけて、この地に寂楽寺とよぶ真言宗の寺院があった。有田地方の豪族、湯浅氏の保護もあって、その盛事には七堂伽藍三十六坊の景観を、この台地と其の附近に現じ、有田川上流、阿瀬川庄の所領問題をめぐり、六十年の久しきに亘り、高野山と抗争したことが、高野山文書に遺っている。鎌倉時代以後湯浅氏が勢力を失うにしたがい時運も衰退し、慶長年間（一五九六―一六一四）に至って、本堂は本尊薬師如来とともに下醍醐に移され、益々廃頽を加えた。今もこの附近に大門坂・

踊堂・塩入寺・幸の谷坊・無常堂の名が遺っている。

その後、湯浅町深専寺第十八世俊栄上人が、享保十一年（一七二六）に寺を再建し、白方山勝楽寺と改め、浄土宗に改宗した。現存の建物は昭和八年（一九三三年）に改築したもので、深専寺の管理下にあり、住職がなく、堂守が住んでいる。

本堂内に安置する

阿弥陀如来 坐像 木造七尺四寸

地藏菩薩 坐像 木造八尺八寸

釈迦如来 坐像 木造三尺三寸

薬師如来 坐像 木造三尺四寸

四天王（四躰）立像 木造二尺三寸五分

の八躰は旧国宝で、現在重要文化財に指定されている。

一行は案内されて本堂に入るや、思わずアッと讃嘆の声をあげた。私はかねがね、この早春長逝された和田喜久男氏から、当寺の仏像の勝れたものであることを聞かされていたが、これ程のものとは想像しなかった。予想以上である。殊に堂の一隅に安置されている地藏菩薩が素晴らしい。御丈け八尺八寸と云うが、実に堂々たるものである。平安時代の作と云えるが甚だ写実的で、恐らく鎌倉期に近い平安時代末期のものであろうか。昭和二十九年三月、和歌山県教育委員会発行による「文化財集」に云う。

勝楽寺の地藏菩薩は坐像であって身長が八尺八寸である。同寺本堂の向かつて右側間に安置せられてあるが、漸くにして堂内に容れることが出来たものゝ、台坐を置くことが出来ないもので、僅かに高さ五寸四分の仮台坐が置かれてあるだけで、見るからに実に雄偉なものである。その類を求むれば、奈良市福智院（地藏堂）の地藏菩薩の坐像は、これに類するが福智院のそれは夾紵像（乾漆像）であって、勝楽寺の木像とは同一ではない。勝楽寺の像は全国における木像地藏尊中、その大きさに於いて第一であるといわれている。

大正六年四月五日、旧国宝に指定せられ、同十二年六月十八日修理工事に着手し、翌十三年五月四日に竣成した。

西尾秀氏の御話では、明治時代まで早魃年には附近のお百姓達が、この地藏像を広川まで運び、淵に投じて雨乞いをしたものと云う。地藏菩薩を淵に投じ雨を祈る風習は外にもちよいと耳にするが、それにしても旧国宝を川に投げ込んだとは乱暴な話である。西尾氏の御説明を聞きながら御尊容を仰ぐと、

「あゝそんな事もあったよと」

と地藏尊は相変わらず穏やかに、忍辱柔和の笑いをたゞえておられるようであった。この地藏尊一鉢を拝しただけでも勝楽寺の前身である寂楽寺の結構の、如何に莊嚴なりしかゞ偲ばれて感慨が深い。湯川東介氏が頻りに活躍をつづける。

本尊阿弥陀如来は本堂の中央に安置され、所々に残る金色は燦然としてまばゆい。前掲「文化財集」の記事を借りると、

……勝楽寺本尊の阿弥陀如来は、蓮華台上に結跏趺坐し、左足を以て右足を押し、二手は相叉して仰いで膝下に置き、二頭指を屈し二大指を横えて親指の端に置いてある。これが妙觀察智印或いは最勝三昧印と称せられる阿弥陀如来独特の定印であつて、胎藏界曼荼羅、中台八葉院の無量寺仏及び金剛曼荼羅成身会五解脱輪中、西方中台の阿弥陀如来と同一の尊容である。藤原時代から鎌倉時代へかけて曼荼羅の造頭と共に盛んに造頭せられたもので、山城国宇治平等院や同国日野法界寺の本尊と頗る類似するものである。平等院のそれは光背の雲中に多くの化仏があり、法界寺のそれは火焰光背であるが、勝楽寺のそれは、なだらかな光雲であつて、その尊容は頗る温和であり、また衣帶の襞もまたなだらかであつて、定朝作といわれる平等院、法界寺のそれと匹^{ひつちゆう}儔するものというべきである。これを側面から拜すると、その胸のふくらみ、その背部の曲線美は直ちに呼吸しつゝあるかのように感じられ、県下では実に類例のない優秀な作品である。

身長七尺二寸、光背一丈二尺四寸四分、台坐二尺八寸三分である。^(一九一七年)大正六年四月五日、国宝に指定せられ、同十二年六月十八日より修理工事に着手し翌十三年五月五日に竣成した。

とある。また同じ頃の作と云われる薬師如来像と釈迦如来像も、内陣内に安置されている。このうち薬師如来像は刀法の浅い一種独特の作風を示しているが、古川成美氏や小山裕誉氏、高野光男氏等が、この像を囲んで何か熱心に話し合つておられた。この外四鉢の四天王もなか／＼優秀なもので、湯川東介氏が大いに感嘆して居られた。一行はこうして数多い古美術に接し、しばし俗腸を洗われる思いであつたが、広八幡宮行きの時間がせまつたので、近くの紀文茶屋まで歩いて小憩した。

紀文茶屋

紀文茶屋は勝楽寺の東方数十歩。開通した新国道に沿うて建てられている。店さきで腰をおろしていると、傍らの国道を砂塵をまいて車が頻りに走る。眼を南に移すと数町をへだてて久米崎王子趾の数株の老松が映り、

さらに十数町の地に広八幡神社の杜が望まれる。また北西の地には赤茶けた天神山の小丘がある。天神山は古墳があつて、大正年間であつたか土砂を採取中、紀南では珍しい家形埴輪や、人物埴輪の破片が発見され、その一部は今も湯浅中学校に保管されていると云う。然しこうした由緒をもつ天神山も今回国道の開通により取壊されつつあり、近くその姿を消す運命にある。

そもくこの新しい茶屋が紀文茶屋を名乗るに至つたのは、勝楽寺境内に最近建てられた紀文記念碑に由来する。碑は高さ三米余りの堂々たるもので、工費数十万円を要したと云うが、私自身の好みから云えば余り感心しない。はつきり云えば無くもないとさえ思う。それに紀文の出生地についても、加太説あり、下津説あり、湯浅説あつて、その何れにも確たる裏付けが乏しい。只最近では紀文の姓が別所であつたことから、湯浅町別所が彼の生地ではないかと云われ、また故上山勘太郎翁が、その著「紀の国屋文左衛門」で別所説を力説して俄に、力を得たようである。だが、それはそれとして権力万能、武士万能の徳川封建制度の下に、出生地さえ定かでない一町人文左衛門が、その巨富を背景に、権力何物ぞと江戸市内を闊歩した姿は、今日想像するだけでも痛快さを覚える。

久米崎王子趾

一行は此処から広八幡まで自動車で行く予定であつた。しかし秋晴れの天気は如何にも行楽に相応しい上、途中久米崎王子趾もあるのでぶらぶら歩くことになつた。だが既に車を呼んでいる事でもあり、御案内役の西尾秀氏等も御老体であり、老人組は車に乗る事に決まり、私はいろんな都合もあつて老人組へ加わつた。したがって残念ながら久米崎王子趾の表は素通りに終わつた。後、王子趾を訪ねた人々から聞くと、王子趾には既に社壇も石垣もなく、数株の老松が折柄の秋風に嘯くのみとのことであつた。

熊野九十九王子の事は今更事あたらしく説くまでもないし、書き出せばそれだけで優に一冊の本をなす訳で、回を改めるより他はないが、今回は初めて参加された方も多かつたのだから、極めて大雑把にそこかしこを記してみる。

熊野九十九王子と云うのは、中世熊野信仰が盛んであつた頃、高貴の方々が熊野に御参詣の際、その道筋の要所要所で熊野三山を御遙拝され、かつ御休憩、御宿泊された社を云うので、詳しくは王子神社と称し、王子神社には各々鎮坐地の名称が附せられている。例えば日高地方の高家の高家王子、塩屋町の塩屋王子、切目の切目王子の如きその類である。また九十九王子と云うのも王子社の数の多いことを示したもので、必ずしも九十九社あつたと云うものではないようである。

さて当久米崎王子は詳しく云えば、湯浅町大字別所字雲崎三二番地にあるが、社名久米崎は多分、地名雲崎から来たものであろうか。有名な建仁元年（二二〇一）の「熊野御幸記」には、

自夜雨降 遅明休 朝陽漸晴 昼天猶陰

弘曉凌雨赴道 無程王子御坐云々

但依遠路向路頭樹拝。云々 クメサキ云々

とある。即ち建仁元年十月九日夕、湯浅の宿所に一夜の雨を過ごされた後鳥羽上皇の一行は、曉に雨を冒して湯浅を発ち、久米崎王子の御前にさしかゝったが、此の王子社は他の王子社と異なり、道筋からやゝ離れているので、立ちよって奉幣することなく、路から遙かに王子社の杜の樹に向かつて拝し、また路を急いだと云うのである。

その後、鎌倉時代になって嘉禎二年七月（一二三六）幕府の執権北条泰時は、紀伊国地頭湯浅太郎に、此の王子社の修復を命じたことが「紀伊続風土記」の古文書によつて知られる。しかし後世にいたり熊野御幸のことも絶え、江戸時代初頭には衰退して社殿さえ毀たれていたが、南龍公が再び修復し社殿を建立した。かくて当社は明治年間まで鎮坐したが、明治四十年例の神社合祀令が出て、湯浅町顕国神社に合祀された。以上がざつとした久米崎王子社の沿革史である。

広八幡神社

西尾秀氏・宮所恒楠氏・酒井耕次郎氏・西川裕氏と私を乗せた車は、新しい国道を砂塵を卷いて走り、取入れ前の広川平野の野道を一曲りして、間もなく広八幡神社前の松並木の中に停まった。自転車で先発していた田中重雄氏が、早速神職佐々木氏に連絡してくれる。佐々木氏が見えるまで私達は、楼門の傍で西尾秀氏から、楼門の左右に飾られている天神像について、洵に興味深い裏話を聞いたが、それは今の場合公表を憚る。

そのうち佐々木氏が紫の袴を着けて現れ、徒歩の一行もぼつ／＼姿を揃えた。

広八幡社の楼門は西面して建てられ、「文化財集」によれば、

建立年代は不詳であるが、上層部材隅肘木に「文明七乙未時（一四七五）」との文字があり、通肘木には「元禄十三庚辰六月吉日（一七〇〇）」このほか社僧の名、及び梵字が記されている。社記によると「于時元禄十三庚辰年林鐘（旧暦六月）中四月上棟広浜劣氏子中・社僧・明応院本義・薬師院源泉」との記録があるから、元禄の修補は相当大掛かりで、下層正面通柱の取替、上層縁、斗拱（ときぎょう）・軒回り、以上相当の大修繕をしたように見受けられる。昭和二十二年二月二十六日旧国宝に指定せられた。

法量Ⅱ桁行二十三尺六寸五分、梁行十三尺七寸、軒高二十一尺四寸八分、棟高三十二尺、総坪数九坪。
構造Ⅱ三軒一戸の楼門で入母屋造り本瓦葺きである。

地貫・腰貫・飛貫・頭貫あり、中央両脇には大虹梁、後方両脇の間は三方板壁、正面の小脇は壁付・扉建（現在は格子戸）中央部の方立は扉装置（現在は欠失）斗拱は和様二手先で中備門斗束あり組入天井である。

上層は円柱台輪・頭貫・上部長押付・正背面共中の間の方立は扉造（現在欠失）両脇の間雷窓（現正面は板壁に改む）側面は総板壁・四方縁・高欄付・斗拱は和様二手先（組上）・中備の間斗束・上下層共小壁・塗壁・軒二重繁垂となっている。破風は懸魚があり立板張りとなっている。

とある。

私はこの文章で、己の眼で見たところを記さず、余りにも屡々「文化財集」の記事を引用して来た。私自身に建造物に対する智識が乏しいためである。記事の中には特殊な建築用語が続出して、或は退屈を覚える向きもあろうかと恐れる。けれども数多い読者の中には、又この方面に明るい方も居られるに違いないと考え（現に旧御坊市日出町の土屋友太郎氏の如きは職業柄建造物に詳しく、常に私の書くものにも興味をよせられている）今しばらく「文化財集」の引用を続けたい。

文化財に云う。

現在の本殿の創建は様式から観ると南北朝時代を下るものではない。

現存の棟札その他の記録によれば、

永祿十二年（一五六九） 安永四年（一七七五） 寛政三年（一七九一）

文化 四年（一八〇七） 明治二十一年（一八八八）等に修理せられている。

その他、若宮、高良両殿の修理とともに修理されたものである。

若宮、高良の両社殿は棟札によると、

応永二十年（一四一三）の造営になり、その後

明応 二年（一四九三） 天文十 年（一五四一） 元龜三年（一五七二） 慶長二年（一五九七）

慶長十七年（一六一二） 寛永十六年（一六三九） 慶安元年（一六四八） 明暦二年（一六五六）

延宝 六年（一六七八） 安永 四年（一七七五）等屢^る次の修理があった。

この三殿は昭和四年^{（一九二九年）}四月六日いずれも旧国宝に指定せられたもので、昭和十八年^{（一九四三年）}から十九年にかけて国庫補助を得て修理した。

法量Ⅱ本殿身舎は桁行十九尺八寸八分、梁間十二尺四寸、軒出五尺四寸一分、棟高二十六尺一寸二分、これに桁行十九尺八寸八分、梁間九尺六寸の向拝が添えてある。総坪数十二坪一二余、また若宮社、高良社の身舎は桁行四尺九寸三分、梁間四尺九寸三分、軒出二尺三寸八分、軒高九尺二寸七分、棟高十五尺六寸一分これに桁行四尺三寸三分、梁間二尺五寸の向拝が添えてある。総坪数一坪十九余である。

構造形式Ⅱ八幡社の本殿は三間社構造で西面、屋根は桧皮葺、箱棟鬼瓦板・千木・葛緒木が置かれている。また若宮社は本殿の南に、高良社は本殿の北に位置し、各一間社・春日造、屋根は桧皮葺、箱棟・鬼板・千木・葛緒木附である。

本殿の身舎は円柱で、三方椽・高欄があり、椽長押・繁長押・内法長押・頭貫があり、正面は三間共揚ほう戸で、斜面の前方の間は幣軸附の板扉二枚建で、その他は横板がはめられている。斗拱は和様三ツ斗組で妻に増斗がある。正面に蛙股の輪廊及び内の部透彫は忍冬紋を室町化したような唐草で、頗る優秀なもので、両脇は牡丹唐草でいずれも極彩色である。……………(中略)

次に若宮及び高良社の身舎は何れも円柱を用い、三方椽、高欄脇障子附、平備に藁股があり、内外陣鏡……………(以下略)

天神社は八幡神社の境内にあつて、高良神社の北に接して西面している。社伝によると当社はむかし八幡神社の境内にあつたが、応永十八年(一四一一)辛卯正月故あつて山本村薬師堂の境内へ移され、その後寛文十二年(一六七二)に同村の大字大谷に移され、乙田の天神と称せられていた。ところが明治六年四月村社となり、その後神社合祀の奨励によつて、明治四十二年五月二十七日許可を得て、同年七月二十六日原形のまま大谷の地から八幡神社の境内に移された。

建築は桃山時代のもので、昭和二十二年二月二十六日国宝に指定せられた。

法量Ⅱ身舎桁行一丈三尺八寸六分、梁間一丈二尺九寸、向拝Ⅱ桁行一丈三尺八寸六分、梁間五尺八寸六分 総坪数五坪九三余

構造Ⅱ一間社、隅木入り春日造りで屋根は桧皮葺、箱棟、鬼板、千木、葛緒木附きである。身舎は三方縁で、宝珠附、勾欄があり、脇障子附きである。また向拝は角柱……………云々。

八幡神社の拝殿は本殿の前方にあつて西面している。その創立年代は不詳で、(天文十六年六月十日、元亀四年七月五日、宝永元年七月二日に修補した棟札があり、また社記に明和二年十二月八日に修補したことが記されている。昭和二十二年二月二十六日旧国宝に指定せられた。)

法量Ⅱ桁行十四尺一寸五分、梁間十七尺七寸、軒高二十三尺七寸八分 総坪数六坪九五七。

構造Ⅱ三間に二間の入母屋、妻入り舞台造り正面石段上にある。方柱（角取）で舟肘木があり、床は板敷で正面脇の間及び側面前方の間、腰板、壁寄木付、その他無目敷居、正背、脇の間及び正面無目鴨居、内法長押付、上部板壁、四方吹流し鏡天井、軒二重疎垂である。妻飾りとして破風の懸魚あり立板張となっている。

私は今「文化財集」のこの詳しい報告を丸写ししながら、八幡神社の各建物を脳裏に思い浮かべ、成程そう云われて見れば、彼処はあゝであつた、此処はこうであつたと、一人で会得している。

さて、順序が前後したが私達が訪ねた広八幡神社は、有田郡広川町大字中野に鎮坐する。紀勢本線の列車が紀伊由良駅を發し、水越トンネルを過ぎて間もなく、向かつて左手の山際の小丘に、こんもりと生い茂る一団の杜と松の樹の間がくれに、古風な楼門の見えかくれする処がそれである。社記によれば神功皇后の行宮の趾に社殿を営み、河内国古市の誉田八幡から勧請したものと伝える。しかし一説には本社はもとく日高郡衣奈八幡宮から勧請したもので、最初は広川町山本に鎮坐したが、いつ頃か現位置に遷った。また西尾秀氏の「有田郷土誌研究のしおり」によれば、社地は土豪、梅本覚言の寄進したものという。

私達はこれらの優れた建造物の一つ一つを、神職佐々木氏の御案内で拝観し、特に許されて神殿内陣まで昇ることを得た。写真班はこの間にも神前に飾られた、木造狛犬一對を写真に収めたり、秘蔵の朱塗天狗面一面を撮影したり、なか／＼忙しい。天狗面は恐らく当社の祭礼に用いものなるべく、面の裏面に、

「八幡宮 在田郡広莊

（二五八九年）
天正十七巳丑八月吉日

浜口安太郎作」

と墨書し、これを納めている箱には、

猿田彦仮面一具天正十七年巳丑、吾先世安太夫手自調製而于産神

八幡廟前之宝庫、以祭祀之用上為、野鼠所傷因修理再納諸宝庫云

（二八二四年）
文政七年甲申八月

遠孫 浜口 喜右衛門

儀兵衛

の文字が見られた。なお前記「有田郷土研究のしおり」は続いて、

境内には、もと多宝塔、鐘楼、観音堂等の仏教関係の堂宇があつたが、明治に至って取り払われた。

とあり、さらに附言すれば、この取り扱われた鐘楼と多宝塔は、同町上中野、浄土宗西山派宝蔵寺に移され、鐘楼は室町時代の建造物として、昭和二十二年二月重要文化財としての指定を受けて現存する。また多宝塔は其の後宝蔵寺が火災に遭い本堂を全焼の砌、本堂再建の資金を得るため、確か京都方面の某寺院に売却されたという。

神職 佐々木氏邸

神職佐々木氏邸は八幡社の境内から道路を一つ隔てた閑静の地にある。一行はここに案内され、表の間でおいそい昼食を摂った。私達が食事を終え、神社に所蔵する重要文化財指定の、多くの棟札を囲み、また一部の人は半日の見聞のあとを、思い思いに歓談している時、私は一人の女巡礼に呼び出されて、

「会員の皆様にお茶菓子差し上げたい」

と少なからぬ御菓子をいただいた。「傾城阿波の鳴門」のお弓ではないが、「巡礼に御奉舎」を、逆に「巡礼から御奉舎」を受けて何とも恐縮したが、史跡巡りの一エピソードとして、その次第を述べておきたい。

話は振出しに戻るが、一行が勝楽寺の境内で西尾秀氏の話を承っている時、どこからともなく三十歳前後と覚しい一人の巡礼風の女性が現れて一行の中に加わった。私は普通の巡礼者が偶然来合わせたのならいゝが、ひょっとしてひどい狂信者でもあったなら始末が悪いと考え、なるべく無関心でいることにつとめた。私は自身が中途半端な男の故もあつて、男でも女でも、右でも左でも又宗教上でも狂信の徒は嫌いだ。

ところがこの白衣の女性は、私達が勝楽寺の本堂で仏像を拝見する段になると、矢張り黙って私達の後に従つて来た。そのうち有田文化会から贈られた「名勝パンフレット」が余分にあつたので一枚渡すと、喜んで受けとつて、会員の誰彼にぼつ／＼話しかけていたようであつた。何時、誰が聞いたともなく彼女が語った所を総合すると、彼女は遠州浜松在に住み、折にふれ各地の神社仏閣を巡拝している。今度は紀州の霊場を巡りたいと思ひやつて来てきて、この間うちは奥有田の各地を歩いて来た。有田を経て由良町興国寺に詣で、又日高地方へも行きたいと思つている。云々。そして私達が広八幡を訪ねるのだと聞くと、行動を共にして、さき程来私達と神社の建造物を拝観して来たのであつた。彼女は私達が座敷で昼食を摂り休息している間、やはり同じ佐々木邸のどこかで休んでいた様子であつた。

巡礼の癖はこれ位にして、重要文化財指定の棟札も興味はあつたが、実はこの方は数年前郷土学会の一員として当社を訪れた際拝見している。それよりも驚いたのは床の間に飾られた、一対の男山焼きの狛犬であつた。

私はこれまで隣郡有田で作られ、しかも庶民的な日常用具がおゝい関係から、南紀男山焼には一方ならぬ興

味をもち、かなり多数の男山製品を見て来たが、これ程見事な作品に接したのは初めてである。丈け凡そ八十
疋、赤色染附物でその堂々たる風格は、最初は偕楽園焼ではないかと疑った程であった。近寄ってみると一個
の方の左足が折損して継いでいたが、そうした瑕疵かきんにもかゝらず、その品位はいさゝかも損なわれていない。
聞けば近く県文化財の指定を受けることになっていると云うが、流石男山製陶場の御膝下だけのことはあると
感心した。

もう一つ此処で私達を喜ばしたのは、庭前の樹陰に立つ一基の石灯籠であった。この石灯のことは建築美術
の権威者、故工学博士天沼俊一氏が、昭和十八年十月十九日、この社務所で一泊された際の紀行文「和歌山紀
行―続成虫楼随筆」中で次のように述べておられる。

不図庭を見たら一基の石灯があった。高さ五尺、小型ではあるが遠くからでは大体室町時代らしく見え
るが、どうも少しばかり纏まりがよくないので、これ幸いとそばで見ることにしたら、果たして

① 基礎と中台と

② 火袋・笠・宝珠（請花共）と

③ 竿

という具合に分かつことができる様であった。

右の内①と②とは室町らしかった。②に於いては請花と宝珠が特に大きく、併し形はよくて格段である。
請花の下に柄もなく笠の上に柄穴もなく、ただ乗せてあるだけだが、是非柄や柄穴を作らねばならない
理由はなし、少し位大きくともはみ出す程でなければ差支えはなし、又寄せ集めと判断するだけの材料
もなし、旁此等は何れも揃っているとしたのである。但し竿だけは誰が何といっても後補で、一方に

夜灯（此下に三字位ある様で、姓を刻したものゝ如く、其中の一字は「氏」かも知れないが明らか
でない）

其反対側に

維時宝曆（一七六一）十一年巳十一月吉日

とあるから確かである。火袋以上は形が特によろしい。ともかくここに室町石灯の一新例を加え得た事
を喜ぶものである……

私達はこの石灯を中心に、石造美術に精通した有田文化会の田中重雄氏から、いろ／＼説明を聞いた。また
数名の会員は、これも重要文化財の来国光の刀剣を熱心に鑑賞していた。

佐々木氏邸を辞した一行は、再び西尾秀・田中重雄両氏の御案内で、八幡宮の横手の里道を経て男山製陶場の跡を訪ねた。その途中八幡社の西北十数歩の地に明王院がある。境内は秋草が丈を成し、荒廢の極に達した堂宇は、縁板の処々が朽ち破れている。数年前此の地を訪れた時は堂宇の屋根が破損したまゝであつたが、今回は流石にそれは修理されていた。

明王院はもともと八幡神社の別当寺、仙光寺六坊の一つで、不動院・千光院・弁財天院・花王院は早く廢頽し、薬師院・明王院の二坊のみが残っていたが、薬師院は明治に入つてすたれ、今は明王院のみになった。堂内にあつた薬師如来、阿弥陀如来の二尊は重要文化財として、国立奈良博物館におさめられ、今は十一面觀世音のみ安置されている。しかもこの觀世音像も白毫は失われ、左の眼玉が脱落し、見るからに御傷ましい御姿であつた。

秋草の茂る細径はやがて八幡神社の杜の裏手に出る。さきの女巡礼は相変わらず私達の群の中に加わっている。一昔も二昔も前、耐久中学校に学んだことのある瀬戸勇治氏や津村慎吾氏は幾度かこの辺りに遊んだと云い、頻りに懐旧の情を新にしておられる。また古く耐久中学校に教鞭を執られた岩崎茂助氏にも色々な思出がおりのことゝと思われた。

南紀男山焼窯趾は、八幡神社の境内の裏手に続く、俗称ひぐらし山の南面にあり、現在はすっかり柑橘畑になつている。私達が西尾秀氏の指さす処を見ると、何と道路や蜜柑畑の石垣や土留め等に、点々として窯壁の破片や、製陶用具が用いられ、畑中にも用具類が散乱している。一同歓声を上げて、散乱した用具の破片をさがし回る。

どこかで「あつた、あつた」と嬉しそうな声がする。「どれぐ」と近寄ると茶碗の糸尻の破片で、成程「南紀男山」の銘がある。もう一個は湯呑の破片らしく、これには「光仙亭仙馬」の銘がある。永仁の壺ではないが、これは衆人環視の中で窯趾から採取したものだから、真正正銘の本物で、偽物の心配は更にならない。そのかわり参考資料になつても、骨董的価値は三文もない。また文化財盜掘問題のやかましい折柄とは云え、茶碗の糸尻では問題にならぬ。

こんな話があると西尾氏が語り出した。以前某氏がこの附近で荒地を買いこんだ。蜜柑畑にするつもりで開墾すると、ちょうど其処が製品置場の跡でもあつたのか、完全な製品が続々と出て来た。骨董屋が聞きつけて買いしめて行つたが、おか

げで某氏はその地代が浮いて、まだ余りがあつたとか。……：

そもそも南紀男山焼というのは、ここ有田郡広川町中野、俗称「日ぐらし山麓」の製陶場で作られた陶器であつて、その製作年代は文政十年十一月頃（一八二一年）から明治十一年（一八七八年）に及ぶ約五十年間である。「紀伊国名所図会」の挿絵を見ても知られるように、窯は総て十二個あり、最初から趣味的に作製されたものではなく、藩の保護の下に一個の産業として、かなり大がかりに生産されていた。従つて作品にも、茶碗・湯呑・皿・小鉢等日用品が多いが、たまたま経営者に崎山利兵衛の如き熱心家や、職人に光仙亭仙馬のような名工がいたので、芸術的にも優秀な作品を遺している。

曾つて故和田喜久男氏からお聞きした話に、和田氏の御両親の壮年時代、有田から男山製の茶碗や皿を、一荷にしてよく売りに来たし、当時は日高地方では余り高く評価されてはいなかった。それで、「あゝ、男山の皿か、それなら猫の茶碗にでもしておけ」とまで云われたものだった。

けれども陶場が閉鎖されて百年近くも経た今日では、何しろ陶器類のことで、年々破損消耗されて、これは大切にして置かねばならぬと気づいた頃は、もう何処の家にも男山焼は殆んど失われてしまい、高雅な美術的作品はもとより、皿・小鉢の類に至るまで、かなりの骨董的価値を生じ容易に手に入り難くなった。

私達は此処で自然釉で美しい色彩を出した窯壁の破片や、製陶器具の残缺を採取して、今日一日愉しかりし史蹟巡礼を終えた。

（昭和三十五年十月九日夜稿）

房中謝客

「紀州新聞」昭和三十六年一月一日掲載

題名「房中謝客」は「忙中謝客」の誤りではない。やがて御理解いたゞけると思うが念のため。面白い話を聞いた。

七、八年前のことである。某金融機関の社員が由良町糸谷方面へ外交に出た。初夏の頃で、この漁港の空は明るく晴れ渡り、海沿いの家々は戸、障子をあけ放ち、部屋いっぱい風を入れていた。路地裏の共同井戸からは濯ぎ物をする女房達の賑やかな笑声が聞こえた。彼は自転車降りると、目的の家に向かった。そして二、三步その家の方へ進んで、ふと見上げると、表の入口の所に梅干しのような婆さんがいて、「来てはいけない」

と手を振った。何か訳があるのだろうと、そのまゝ戻った。

彼は再び細い露地を歩いて第二の家を訪ねた。然し此処でもまた彼は弓のように腰の曲がった婆さんに「来てはいけない」と追い返された。こうして彼は散々歩きまわった揚句、やつとのことで或る家の主人に逢うことが出来た。一わたり用談がすんで「さて」と、彼は先程からの奇妙なでき事を語った。主人は彼の話を聞き終わると

「それは、あなたお祭りですよ！」

と大きな声で笑った。

「お祭り」

彼はきよんとして、聞き返した。

「ええ、お祭りなんです。つまりねえ、この村は御見かけどおりの漁師村でしょう。漁師はあなた風でさえあれば、夜は沖へ出るのが商売なんです。しかしそんな日が十日も半月も続けば、自然夫婦の和合がおろそかになります。そこで白昼でも二人の意見が相投合した時は、それを洩らします。けれども昼間のことですから、何時邪魔が入るか分かりません。そこで、そう云う場合は、あゝして色気を離れた婆さんに、見張りを頼んでいるのです。」

私はこの話が事実なら民俗学上、甚だ興味のあることだと思った。そこで早速このことを同学の先輩であり、前由良町長であつた岩崎茂助氏に問い合わせたところ、

「成程、私もそんな事は聞いている。然し、調べてみると、どうも単なる想像か噂にとゞまり、事実ではないようだ」

と云う返事であつた。けれども私にこの話をした某氏は

「いや何と云つたつて、事実、私はこの眼で見、この耳で聞いた」

と自説を固執してやまぬ。

だが、それは兎も角として「房事中謝客」の習俗は、ひとり由良町糸谷方面に限ったことではない。現に、西牟婁郡串本町の漁師も、白昼、夫婦同衾の際は、家の戸口に手拭いをかけ、以て、その信号となす。また和歌山市外加太の漁師の女房は、亭主と或は亭主以外の男と一件を行う場合、家の表に權を立てて房事中の印となすこと、多くの古書に見え、世人のよく知るところである。即ち貝原益軒の「女大学」の作りかえ「女大学開宝」安永版（二七七二—一七八〇）に

紀州かだ一切百文、客あれば門口にかいを立てる也

と記し、西鶴の「好色一代男」天和二年版には（一六八二）には

浦づたいに泉州の佐野迦葉寺、加太という所はみな漁師の住居する浜辺なり。人の娘に限らず、しれた徒ら所る育ちも物紛れして紫の綿帽子普ねくきる事にぞ有ける。男は釣りに暇なく其留守にはしたい事して誰咎むる事非ず。男の内に居るには表に擢立て知るゝ也。心得て入る事せず。

とあること、郷土研究誌、「紀伊史料―第六号」昭和二年十一月十一日発行によって知った。

「うしまのてがら」

「日高新報」昭和三十六年一月一日掲載

その一

日高町志賀に友沢久助、通称「うしま」という男がいた。（一八六五年）慶應元年、長州征伐の時人夫となつて長州へでかけた。ある時紀州勢は長州兵に攻めたてられ、とうとう砲台を捨てて退却することになった。ところが「うしま」は生まれつき大寝坊であつたので、気がついた時は味方は一人もなく、「うしま」の近くには大勢の長州兵がせまっていた。

びっくりした「うしま」は逃げる拍子に火縄が足にまきついて、大砲の口火に燃えうつり、大きな音を立てて弾丸が飛んだ。そこで「うしま」も「どうせ死ぬなら暴れるだけ暴れてやれ」と度胸をすえ、あるだけの大砲をつぎつぎに打ちまくつた。長州軍はこの「うしま」の思いがけぬ反撃にひるんだ隙に、這々の体で逃げて、やっと命びろいをした。

その二

その手柄で「うしま」は戦争後兵隊になり大いに威張つた。ある時「うしま」が山奥の村へでかけると、百姓達はえらい兵隊さんが来たから読んでほしいと難しい手紙を持って来た。「うしま」は学問がないので、こんなことを云われはしまいかと内心びくびくしていたところであつたが、こうなつては仕方がない。然し字が読めんとあつては軍人の体面にかかわる。そこでとつさの氣転で、

「軍人たる者は百姓どもの字は読めぬ」

と大声で叱りつけて、誤魔化した。（「志賀村誌」から）

蜜柑あまいか酸っぱいか

「日高新報」昭和三十六年

一月七・八・九日掲載

△蜜柑もろたら皮あぐら 金柑もろたら実あぐら

△蜜柑祝うておくれんかい

も早四十数年の昔になる。私達の悪童時代、正月が来るとこんな文句をうたいはやしながら、二、三人連れ
て家々の飾り蜜柑をもらいに廻った。今の少年達はもうこんな野蛮な真似はすまい。だが、いくら詩がなくな
った現代でも、正月はやはり少年達にたのしく、そしてその正月はたぶん黄色く熟れた蜜柑でいろどられてい
るであらう。いや少年少女ばかりではない。正月に蜜柑は大人の世界でも切り離すこととはできぬ。

あの戦時中の物資の不自由な時代さえ、婆さんのようにしなびた蜜柑ではあったが、とにかく各家庭へ配給
せられたのではないか。しかし考えてみると蜜柑の種類もかわった。昔あった形の小さい種のおおい、そのか
わり飛切り甘かった、所謂有田蜜柑がすっかり姿を消し、早生温州の世界となった。ところで私は専門家では
ないから詳しくは知らぬが、早生温州の歴史は比較的新しく、明治^{八九年}二十五年大分県津久見市で発見されたのが
初めて、本県へは恐らく苗木購入の際混入したものであらうと云う。

しかし、一口に早生温州と云うものの、其の種類が多く、割合知られているものに、

大長早生：比較的古くからあるが、枝変りしやすい欠点をもつ。

亀井早生：大阪府下亀井家で発見されたもの。

井関早生：那賀郡竜門村の元助役井関氏の畑で偶発したものの。

宮川早生：昭和^{二六年}初年頃福岡県山女郡医師宮川某の栽培温州中偶発したものが付近苗木商の手で増殖され
た。

等がある。

このうち本県で最も広く栽培されているのは宮川早生温州で、宮川は殆んど早生温州の代名詞の観がある。
^(一九二九―三〇年頃)昭和四、五年頃のこと当時の苗木商兼農業であった、川辺町若野の小林源楠翁は西牟婁郡三栖村の某と宮川苗
木各五十本宛を買入れて、自家の畑に栽培した。これが宮川早生温州の本県に入る最初で、少なくとも日高郡
では初めてのことである。

したがって故小林源楠翁は本郡に於ける温州の一大恩人と云わねばならぬが、この人にして此の子ありと云おうか、美しい後日談がある。話というのはこうだ。

敗戦後間のない、まだ物資の不自由な時代である。作家であり食通で聞こえた小島政二郎氏のもとへ、ある日新進映画批評家、津村秀夫氏の母堂から蜜柑がとどいた。

余談ではあるが、津村秀夫氏は御坊市東町和佐屋の故津村秀松博士の令息である。小島氏が食べてみると、そのうまいこと今時こんな蜜柑があるかと思う程であった。

余りうまいので、一体どこで出来た蜜柑かと尋ねると、和歌山県日高郡川辺町若野、小林農園産という返事であった。以下小島氏の文章を拝借する。



——映画批評家の津村秀夫君のお母さんから頂いた蜜柑が、類を絶してうまかった。余りうまいので産地をお尋ねしたら、紀州蜜柑——詳しく云うと、和歌山県日高郡川辺町若野小林農園であることが分かった。

そのことを新聞に書いたところ、幾つかの投書が来た。最初に私の書いた文章を写しておこう——中略——たま今日津村秀夫君の母堂から紀州蜜柑のお裾分けを頂いた。形は余りよくないのだが、食べて見て驚いた。昔とソックリの味である。水ッぽくなくって、甘みにコクがあつて、思わず「うまい」と云わずにいられないくらいうまかった。これこそ本当の蜜柑の味だ。紀州だから、本場の有田蜜柑に相違ない。それにしても、今時こんなうまい蜜柑を作っている篤志家はどこの誰だろう。私はさっそく御母堂に問い合せのお礼状を書いた。

すぐ返事があつて、日高郡川辺町の小林農園の丹誠になるものであることが判った。いまだに戦争中のような役所の干渉があり、質の善悪にかかわりなく、目方で値が決められる愚が横行している中で、質のいいものを作ることを念願としている良心がいまだに残っているのかと思つたら涙がこぼれるほどうれしくなった。なんでも早いことが尊ばれる世の中に、のろいことをいとわぬ小林農園や、信州御代田の中山農園のような目さきの利害にとらわれず、心からクダモノを愛し、どうしてもいいものを作らずにいられない純粋な栽培農家のいることは心強い極みだ。

一口口に云うと、量を沢山作ろうとしている農園では、とても作り出すことのできる品ではない。何よりもいい蜜柑、うまい蜜柑を作ろうとしている、それが唯一の楽しみになつていている人の手からでないと決して作れない蜜柑だ。

(第2 食いしんぼう)と口を極めて称讃し、小林農園では富有柿も作っているそうだ。この秋、柿の熟するころを楽しみにしている。と結んでいる。この小林農園こそ日高地方へ初めて早生温州を導入した故小林源楠翁の長男の経営する農園であることは云うまでもない。翁や以って冥すべし。(完)

モミの木は残った

「紀州新聞」昭和三十六年二月三日掲載

作家・山本周五郎に伊達騒動の原田甲斐を扱った、「樅の木は残った」と題する長編がある。妙なことに私は芝口先生のことを思うごとに、きまつてこの小説の題名が心に浮んでくる。

云うまでもなく先生は伊達騒動や原田甲斐とは何の関係もない。たぶん先生が齡八拾近い今もなお、郷土研究一筋のたゆみない歩みをつづけられ、現代県下郷土研究会の権威として、おゝくの人々から仰望されている御姿が、風雪幾拾年を重ねて、野中に聳立する樅の木のそれを連想させるせいであろう。

思えば先生が、日高地方の郷土史研究に携われてから久しい。先生御自身の御述懐によれば、それは確か大正四^{二九}、五年^{五、六}ごろであつたと云われるから、最早五十年近い昔になる。この間先生は教育家としての本務の傍ら、寸暇をさいては日高郡内は勿論、広く県下の山野を跋涉して、埋もれた史蹟を訪ね植物を調べ、社寺をめぐられては、その由緒と芸術をさぐり、更に巷間に散在した古文書を渉獵しては、日高地方史の闡明^{せんめい}に尽くされた。

一口に云えば先生の御研究は極めて慎重で、その考証は甚だ緻密である。決して華やかなものではない。したがって五十年近い業績としては、量的には必ずしも多いものではない。けれどもその研究の一つ一つは、何れも日高地方史研究上、重要な位置をしめるものである。しかし万事に控え目な先生は、そうした勝れた御研究の幾つかをもたれながら、これまで一冊の著書も公けにされずに来た。このまゝではやがて散逸の運命を免れ難い。これは私も郷土研究を志す後輩にとって大きな損失であるばかりでなく、日高地方の文化の上からも、洵に遺憾なことである。

何とかしたい。何とかして先生の貴重な業績を公刊の上、郷土文化向上の一助にしたいと云う声は、早くから一部有志の間に聞かれた。現に数年前まだ高尾英吉氏が御健在であつたころにも、氏や巽三郎氏とよりく協議した事もあつたが、後、高尾英吉氏が長逝するに及んで、ついに実現に至らなかつた。

ところが誰も思うところは同じと云おうか、今度は先生の教え子の方々が起ちあがった。先生はその永い半生の大半を捧げられた旧日高高等女学校卒業の有志が、師恩の幾分に酬い、師の老後をお慰めするためにと、先生の著書の出版を思いたった。

山本好一氏や山中三郎氏と共に私が、卒業生有志の方々からご相談を受けたのは、確か昨年の二月ごろであったと記憶する。私達は感激した。そして出来るだけ御手伝いしようと思約束した。

それから間もないある日、私は先生の和歌山師範時代の同窓生で、現代東牟婁郡太地町、飛鳥神社の神職を勤めておられる鳥居大吉氏の訪問を受け、氏から県下郷土研究界の至宝で、かつ我々の誇るべき同窓生芝口氏の著述が、このまゝ埋もれるのは残念である。もし日高地方の関係者間に出版の計画がたぬなら、われわれ方で何とか考えたいとの申出をうけた。

そこで私は、実はかような次第で事は既に進行中である旨を告げて、氏の御好意を謝したと云うような事もあった。日高高等女学校同窓会有志の美学と云い、鳥居氏の御芳志と云い、いま時めったとあることではない。全く有難い話である。これと云うのも先生の高潔な御人柄と、学問に対する深い情熱、謙虚な御態度が、自らかくあしらめたと云うより外はない。

近く刊行される芝口先生の御本は、題して「葵羊園叢考」と云う。先生は明治十九年(一八八六年)葵未年九月十六日に誕生された。すなわち葵羊は先生の干支であるところから、これまでも、これをもどって自ら葵羊山人と号されて来たが、今回は著書の題名とせられた。

「葵羊園叢考」に収められた諸編は、たいいてい一度は新聞や雑誌や研究誌に発表され、或は県文化財報告集に載ったものである。また配列の順序も編者が勝手に、長短、硬軟を考慮の上、塩梅したもので、必ずしも発表年代順にしたがっていないが、郷土史に関心を持つ人は勿論、一般的な読物としても実に興味深いものである。

「葵羊園叢考」はここ数日中に組版を終りグラ刷りを送るから、校正さえ馬力をかけてくれるなら、三月初旬には刊行できるとの連絡があった。私どもは二月中は一切の精力を集中して、校正に取組む用意をととのえている。装幀 製本もショーシヤな、然も重厚な味の持った美本ができる筈である。せっかく御期待とご後援をお願いしたい。

(昭和三十六年一月二六日)

歌集『青嵐』

「紀州新聞」昭和三十六年三月八・九日掲載

森上隆翁の歌集「青嵐」をいただいた。B・6版ケース入り、四百七十頁、手にとると、濃い紫地の厚表紙に光る『青嵐』の金文字が美しい。扉をはじめ文字の組み方や、紙質、製本のはしほしにも、歌集らしい細かな心づかいが見られる。

嗣子森上文一氏からこの歌集をいただいたのは、郷土の刊行物を一読しておきたいとお願いしたためで、特に翁の御人柄や御歌をお慕いした訳ではない。いわば甚だ不届きな動機からであった。

ところが頁をくり、御歌を二、三拝見して「おや！」と驚いた。さらに数頁を拝読して「これは！」と目を見はった。こうして私は最初の不純な動機をはなれ、いつか翁のお歌の完全なとりこになった。一口に云えば森上翁の御歌は、実にその表現が平明である。気どりや癖がない。それでいてその深い愛情は広く草木禽獣の世界までおよび、日常生活を歌うては人生の奥処に達している。昭和^(一九五九年)三十四年の御作に

○ 近頃の歌はむつかしきもの多しむつかしき歌は読まずに寝むよ

と云うのがある。こんな御歌をみると何と云うこともなく、良寛和尚のことなどが思い出されたりする。この淡々たる御心境から生まれた一千四百六十四首である。「てらい」や「こけおどし」があろうはずはない。それが読む人の心を強くゆすぶらずにはおかぬ。



○ この次に砂糖の配給ありたらばぜんざい煮むと老妻の云う

昭和^(一九四八年)二十三年の御歌である。戦後の配給時代の、ほろ苦(にが)い味がよみがえって来る。曙見(あけみ)の独楽吟にも似ていてではないか。

○ 四反ばかりの田はことごとく買い上げられぬ反金わづか七百円にて

云うまでもなく戦後の農地強制買上げを歌うたもの、昭和^(一九四五―五四年)二十年代の社会資料としても面白い。昭和^(一九五〇年)二十五年

○ 藁灰を妻の作りて今朝よりはわが寄る火鉢あたたかになる

○ 往診の無き折り折りは庭を掃き風呂を焚きまた歌を作る

○ 板のごと穿きへらしたる庭下駄をたたき割りては風呂に焚くなり

○ 一灯の下に歌誌読む側に來て米の小石を撰り分くる妻

おだやかな村老医の日常生活。風呂を焚くのは妙に楽しいものだ。翁も往診のない時は風呂を燃やし歌を作った。そしてその側では老夫人が配給米の石を撰り分けられた。「随所に主となる」と云う言葉の本当の意味は知らぬが、こうした自在な御心がそれに近いのではないだろうか。昭和三十一年

○ 高田山久しく行かず雪雲のさへぎるも無く風すさむらむ

翁の作風は、こう云う云い方があるかどうかは知らぬが、私の感じから云えば「やわらか」な方に見えるが、この一種は珍しく莊重にして堂々たる調べをもつ。高田山頂、颯々として北風吹え、雪雲層々として流れるを彷彿せしめる。同年の

○ 朝日影しばらくにして天の原曇りは深く大寒にいる

も同系列に入るべき絶唱。ここでは最早、単なる写生にとどまらず、象徴の域にまで高められている。

こんな風^{一九六〇年}に書き出せばきりが無い。私はただ歌集「青嵐」の感動を整理するために書いたにすぎぬ。それにして昭和三十五年、重たい病の床から家人に口述して詠みつづけられた数十首は、編者今井規清氏も後書で述べられているように、一首一首が惻々として読む人の胸に迫る。

○ 羽根蒲団かろきを掛けて身動きの少したやすくなりて嬉しき

○ うつせみの命のたけを生きんかも四辺^{あたり}静かに今日も暮れつる

○ 生くるすべ如何にもかもせむ蟪蛄^{かまきり}のごとく手足のやせ細りたる

○ 仰向けばわが腰痛し横向けばわが肩痛しおとろへにけり

○ 春さらば幾重の山路越えて見むその楽しみも既にはかなき(額の絵を仰ぎて)

○ 君として根来の紅葉めでし日をなつかしがりて独り死ぬ身が(海野さん、青木さんへ)

○ これまでの寿命と知りぬ七十五年能無く老いを重ね来しはや

○ 分水嶺越えしと思う今日よりは生くる努力をまた払わなん

拝誦して誰か人の世の悲しさに慟哭せざる。一時は「生くる努力をまた払わなん」と努められた翁ではあったが、やがては「これまでの寿命……」と諦観して「独り死ぬ身か……」と死んで行かねばならなかった。しかしそれは森上翁一人だけではない。生きとし生けるものの、いずれは辿るべき、さだめに外ならぬ。私は「青嵐」の頁をくりながら、昭和三十三年春、井上豊太郎先生の「念仏大行者徳本上人伝」出版記念会に出席されていた翁の温容を思いうかべた。

まことに人生は短い。けれども芸術は長い。翁の七十五年の生涯は終ったが、翁の御歌は歌集「青嵐」によ

って、永く人々の心に美しく生き続けることであろう。 Ⅱ（妄言多謝） Ⅱ 昭和三十六年二月二十八日夜

裸ダンス

「紀州新聞」昭和三十六年七月三日掲載

今ならめずらしくもないが、昭和五年（一九三〇年）ごろのことだ。東京のさる料亭で紅毛芸者が、裸ダンスを踊るので有名になった。早速どこかの大学の茶目ツ気の多い教授連が相談の末、彼等のパトロン〇〇氏に話をもちかけ、一タ裸ダンスの見物に出かけた。

さて暗い照明のうちで待望の裸ダンスが終り、皆はホットした顔でもう一度飲み直そうという段になって気がつく、パトロンの〇〇氏の頬ぺたに、べったり食台の痕がついていた。つまり〇〇氏はこっそりと闇に乗り、できるだけ下の方からのぞきこもうとした為に、思わぬ烙印を頬ぺたに残したわけである。ところで、この名誉ある〇〇氏の本名を打ち明けよう。

驚いてはいけない。岩波書店主、故岩波茂雄氏なのだ。漱石の息子、夏目伸六著「猫の墓」にでている話だから、まんだら根も葉もない空事ではあるまい。

私はこゝで裸ダンスに、うつゝを抜かした岩波茂雄氏を非難するつもりは毛頭ない。それどころではない、温泉地などでは友人の先頭に立って、ヌード見物に出かけたことも一再ではない。男性が女性のヌードにあこがれる心理は複雑だ。一度、性心理学者にでもきいてみなければ分からない。岩波氏の場合にしても、普段の緊張をときほぐしたのだとも、優にやさしき好き心だとも、人間味があふれるとも、もっともらしい理屈はいくらでもつく。だが、少なくとも、お上品な趣味だと云えないことだけは間違いない。殊に昭和二年七月（一九二七年）

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む――。

と宣言の上（もつともこの文章の起草者は三木清であるが）岩波文庫を創刊して、今日の文庫ブームの先駆をなし、いくつかの名著を刊行しては、所謂岩波文化の称を専らにした、わが国知識階級の総本山ともいべき岩波書店の社長岩波茂雄氏と裸ダンス、何か否むべくもない。

今は昔、これも漱石のお弟子筋で、確か二科に属したとおもうが、津田青楓という画家があつた。この人の随筆の中に

神様と悪魔と結婚して、その間に生まれたのが人間だ。だから人間は時には神様のようにもなるし、悪

魔にもなる。

という意味のことを書いてあったのを読んで、ひどく感心した記憶がある。実際、私達は時には自分で自分を褒めてやりたいほど殊勝なことをするかと思うと、我ながら浅ましいいふるまいにふけることもある。さきの岩波氏の裸ダンスの場合などは、この悪魔の面がチラリとのぞかしたのに違いない。だからと云ってそのために、我が国文化史上に遺した功績は、微動だにするものではあるまい。要するに人間の本当の偉さは……何だか話がやゝこしくなった。私の柄ではなさそうだ。詳しくはお考え願いたい。

今回発見された

日高町原谷の板碑

「紀州新聞」昭和三十六年七月二十・二十一日掲載

正確な日時は忘れたが、何でも四月の初め頃であつたと思う。日高町原谷の日蓮宗立正会の方々から土地にある古い墓を調べてほしいとの依頼を受けた。私は立正会については何の知識もないし、墓碑の研究家でもないので自信はなかった。また古い墓と云うだけで、五輪塔か宝篋印塔か板碑かも不明であつたが、とに角お伺いする事にした。

だが常識的に考えて原谷の古い墓と云えば、多分鹿ヶ瀬の法華壇にある宝篋印塔か、峠の麓の板碑に相違あるまいと見当をつけ、これらに関する文献を調べ、猶慎重を期してこの方面に明るい巽三郎氏と高野光男氏に連絡しておいた。

四月二十五日午後、巽三郎・高野光男両氏と原谷に出かけ、立正会会員の御案内で現地を見たところ、果たして私の想像通り山麓の板碑であつた。この板碑については早く芝口常楠先生の詳しい調査があつて、今春刊行された「葵羊園叢考」にも収録されているが、私達は亦あらためて写真を写したり、拓本をとったり計測をしたりして、少しばかり新しい事実を発見したが、それはまた別の機会に述べる。

板碑の調査をすました私達は、今度は峠に登り茶屋跡の、今は無縁墓となつて春草の間に累々とならぶ、峠茶屋の人々の墓碑を拝み、法華壇の宝篋印塔をも拝んだ。立正会の方々はこうして荒廃に帰した無縁墓を、おまつりして供養すると云うことであつた。

私は此の小稿で「板碑」という、あまり世間では使わぬ言葉を使用したのが、「板碑」についてのざっとした説明を加えてみる。

「板碑」いたびと読む。はんぴと読む人もあるが、「いたび」と発音するのが普通である。さて「板碑」と云うのは深く詮議してゆくと、中々むずかしいが、簡単に云えば鎌倉時代中期頃（約七百年前）に発生し、桃山時代の頃（約三百年前）まで行われた石造の供養塔であつて、わが紀州では前期芝口常楠先生の「紀州板碑」によると、南部町芝安養寺に現存する文永十年十二月（一二七三）を最古とし、徳川時代のもまで加えると、かなりの数にのぼる。

「板碑」は外に「青石塔婆」とも「板仏」とも云うが、一般には割合に薄い板のような感じの石塔であるから、板碑と云うと考えておくとも便利である。無論自然石をそのまま使用したものや、角柱形のものも、或は一面のみに人工を加えたものもある。

× × ×

さて原谷の板碑と云うのは芝口先生の「紀州板碑」によると、

鹿ヶ瀬峠の南麓、旧沓掛王子（原谷字王子谷一七五三番地）と道を隔てて存在した法華堂境内にあつたもので、数十年前その本寺である有田郡広川町広、養源寺に法華堂が移された際とに残されて、十数基の墓碑と共に前面の山裾に立てられ、その中に三基の板碑がある訳である。その一々については、

① 和泉砂岩製 高さ〇・六一^{（一四三六）}、巾〇・一五^{（一四三六）}、上部鉢錢あり、中央に「南無妙法蓮華經」「妙□位」その左右下部に「永享八年六月□□□□」とある。墓標兼用のもの。

② 同岩質 高さ〇・六七^{（一四四六）}、巾〇・一七^{（一四四六）}、形式前同様、中央に「南無妙法蓮華經」「妙念位」、左右下部に「嘉吉六年八月二十五日」とあるもの。

③ 同岩質 高さ〇・七六^{（一四四六）}、巾〇・一八^{（一四四六）}、「南無妙法蓮華經」、下部に「寛正□□□□□□□□」とあるもの。

④ これは少し位置が異り、金崎和夫氏邸の山裾の少し上にある（註・今回前記①・②・③と同一位置に移された）。岩質・形質共に前三基と同じ。下部欠損するが、高さ凡そ〇・一七^{（一四四六）}、巾約〇・一二^{（一四四六）}、「南無妙法蓮華經」その下に永享の年号と「妙昭」の法名だけあるもの。

となつてゐる。猶参考までに記せば、永享八年は西暦一四三六年で、今から約五百三十年前。嘉吉は西暦一

四四一年から一四四三年までで、共に室町初期にあたる。この外に日高郡内にある古い板碑としては、御坊市名田町野島の一基と、印南町古井永福寺の一基、中津村高津尾観音寺、由良町興国寺及び南部町芝安養寺のもの等、十数基を算えるに過ぎぬ。そしてそのうち四基までが原谷に遺っていると云うのは何としても面白いことであるが、今回また立正会員の手によつて二基が発見されたので、これまでの分に加えて六基となった。

× × ×

今回発見された動機は、前述のように日蓮宗立正会の方々が無縁墓の供養をすべく、三基の板碑の所在地を整地していると、地下余り深からぬ所から発掘されたのである。したがつてこれも前の三基と同じく、もとは法華堂境内にあつたが、法華堂が養源寺に移された時、現位置に運ばれ土中に埋まったものと思われる。

七月十四日、この人々によつての供養会に招かれ出席した際私の実測した結果、新発見の板碑は二基あつたが、一基は殆んど風化して塔核のみとなり、碑の文字は勿論不明と云うより痕蹟すら止めず、塔身の形状も推測し得ぬ状態であつた。今一基も鉢線の一部は認められたが、頂部三角形の部分は半分ばかり欠損しており、下部の一部もセメントで据えつけていて、完全な計測は出来なかつた。然し大体の大きさは、高さ約四三^セ、巾一三^セで、石質は泉砂岩、そして中央に「南無妙法蓮華經」左右下部に「永享七年五月」の文字が見られた。とに角原谷の地は、鹿ヶ瀬峠上に「元亨釈書」に云う円善の骨人伝説の法華壇があり、山麓には郡内でも数少ない日蓮宗の御題目を記した板碑が遺り、現在では立正会会員が活動を続け、日蓮宗としては浅からぬ因縁の地であるのは、なにか意味がありそうである。

(昭和三十六年七月十六日夜稿)

小熊河原五十年

「紀州新聞」昭和三十六年八月三日掲載

昭和二十八年の水害で日高川筋もすっかり変わった。

私の村―川辺町小熊の河原も水害前は広がった。堤から水際まで数町もあつて、村の悪童どもの格好の遊び場であつた。事に春夏のころは、永い日をもて余した小坊主連が集まり、河をへだて、野口の子供達と悪態のつきあいや石合戦をした。

野口の餓鬼ら何食て生ける
はえ食て生ける

はえない時何食て生ける

……

お互いに飽きもせず、こんな悪口を浴びせあった。いま日高新報主筆の藤田草宇氏なども、この仲間の一人であつたという。新教育を受けた現代の子供達には想像もつかぬ野蛮な話である。

河原には無数の野茨や茫の茂みがあり、私達はこれをガシャンボとよんだ。ガシャンボには晩春、小さな茨の花が咲いて、どこか性的なものを思わせる芳香をたゞよわせた。私は今でも野茨の花を見ると、日高河原で遊び呆けた少年の日の記憶か、まざまざと脳裏によみがえるのを覚える。何時暮れるともない長い日が、毎日毎日つゞいたような気がする。

村老の伝えによると、昔はこの河原は、もつともつと広く、竹藪などもあつたと云うことだが、明治二十二年（一八九八年）の水害で小さくなったとか。そう云えば何時か見た町役場の小字図には、ちゃんと外河原と小字名があつた。

ところで茫と野茨ばかりの、云わば村童の遊び場に過ぎなかつた能なしの河原に、今から二十年ばかり以前、大きな異変がおこつた。外でもない、日支事変が太平洋戦争にかわり、だんだん食糧が不自由になつた時、誰が手をつけはじめたともなく河原の開墾がはじまつたのだ。えらいものだ。広い河原がすっかり麦畑や蕎麦畑になつた。しまいには河原畑を売買する者さえあらわれた。

私がしばらく離れていた村へ戻つたのは昭和二十三年（一九四八年）の一月であつたが、もうその時分には、さしもに広い日高河原も殆んど畑となり、残つた所は一雨降れば水づかりになる低い地か、石ころばかりのロクでもないやせ地だけであつた。然し食糧は相変らず月の半分にも足らず、月給は雀の涙ほどしかなかつた。闇屋をやる甲斐性のない私は、勤めの間を見て石を除き砂を運び、一畝ばかり開墾して小麦を撒いた。やがて収穫期が来た。ところがよくしたもので其の年は氣候に恵まれたのか意外な豊作であつた。私は今でもあの時收穫した、つやつやと光沢をおびたそれこそ小麦色の麦粒の肌を思い出す。よほど得意であつたと見える。

だが好事魔おゝし、私がそれ程鼻を高くした河原畑も、取り入れして数日後の出水で、物の見事に流れてしまった。

そして今は、私ども村童の夢の跡も、権利金さえついた河原畑も、昭和二十八年七月の洪水で根こそぎ流され、あるところは瀬となり、ある個所は淵となり、若鮎が水苔を食んでいる。淵瀬常ないのは飛鳥川のみでない。

原谷青年学級の諸氏に

「紀州新聞」昭和三十六年八月

鹿ヶ瀬峠略史

十三・十七・十八・十九日掲載

七月十四日原谷を訪ねた際、同地の二・三の若い人々から、青年学級の研究テーマの一つに、原谷の郷土史を調べていると聞いた。世を挙げて新奇を追うに急なあまり、昔を忘れがちの風潮の多い今日、洵にうれしいことである。郷土を知るは取りも直さず郷土を愛する始まりであろう。殊に日高町は郡内でも古い歴史の地であり、勝れた郷土史家であつた故森彦太郎先生を生んだ所でもある。せつかくの御精進をお祈りしたい。

以下は研究と云うほどのものではない。ありふれた諸書のうちから鹿ヶ瀬峠に関する分を集めてみたにすぎぬが、御参考になれば幸いである。

一、鹿ヶ瀬峠は何時頃通じたか

多分江戸時代もかなりおそく作られたと思われる俚謡に

わしら若いとき有田へ越えた 知らぬ鹿ヶ瀬夜で越えた

と云うのがある。ここで謡われている鹿ヶ瀬は、日高町原谷から有田郡広川町河ノ瀬へ越える峠のこと、古くから熊野街道中の要所として有名であつた。まだ汽船も汽車もなかった時代に、紀南方面の人々が上方へ旅をする時は、どうしてもこの峠を越えねばならなかつた。熊野参詣の法皇も公卿も、若山へ上る安藤公も水野公も、町民も百姓も男も女も、皆それぞれの思いを抱きながら、この峠路を上下したのである。

「紀伊続風土記」によると鹿ヶ瀬峠は河ノ瀬村から登り約二十一町、原谷奥からは十四町ばかり、宇小峠をもつて有田・日高の境となすとある。また「日高郡誌」には峠の西・小城山で四百二十畧と見え、西尾秀氏の「有田郷土めぐり」には峠の標高三百八十畧とあつて、峠の規模の大体がわかる。

さて、それなら鹿ヶ瀬峠は何時頃からひらかれたのであろうかとなると、何にしても古い時代のこと、誰にも確かなことは云えないが、私はどうも平安時代の初めごろ（約千二百年前）ではないかという気がしてならぬ。と云うのは我が国で最も古い文献である「古事記」や「日本書紀」・「万葉集」には、紀州関係の記事がかなり豊富に取り入れられているが、鹿ヶ瀬のことはいっこうに見られぬ。ことに「万葉集」には直ぐ近くの白崎や由良・三尾を詠んだ歌が十首近く散見するが、鹿ヶ瀬の歌はない。

無論、文献に見えぬと云うだけで、鹿ヶ瀬峠が通じてなかったとするのは早計であるが、海草郡で藤白峠を詠み、有田郡では糸我山をうとうているのに、日高郡では白崎・由良・三尾・野島と海辺の歌ばかりを遺しているのは、どう解釈してよいのであろうか。

私は当時はまだ鹿ヶ瀬が通じず、有田地方から日高へ入るには、一度海に出て由良の湊か比井浦あたりへ上ったのではないかと考えている。

二、増基法師の歌

鹿ヶ瀬が初めて文献に見えるのは、増基法師の「いほぬし」次の記事であろう。それには、

「ししのせ山にねたる夜、しかの声をききて」

と云う前詞につづいて、

うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋ねてや鹿もなく覽
の一首を載せている。ところがこの増基法師と云うのがよく分からない。

詳しい人名辞書がないので、手許にある「広辞苑」で間に合わせると、

叡山の僧。歌人。三十六歌仙の一。庵主（いほぬし）と号。天（九四七～五七年）曆またはそれ以前の人。著「いほ

ぬし」（熊野紀行）。生没年未詳

とある。

また芝口常楠先生の御教示によると

「中古歌仙伝」に増基法師。「後拾遺目録」に云わく、庵主と号す云々。「大和物語抄」に志賀（近江）に詣でけるに増基の君という法師ありけり。それはひえ（比叡）にすむ院の殿上もする法師になん有りける云々……こんなことがのつてるようです……

とあって、前記広辞苑の範囲をおく出ないが、天暦ごろの叡山の法師であることは確かである。天暦は西暦九四七年から九五六年へかけての年号であるから、大体千年前と考えてよく、この時代さみしいながらも鹿ヶ瀬峠は、すでに通じていたのである。またもう一つ想像をたくましくすれば、これよりさき醍醐天皇の延喜七年十月（九〇七）、宇多法皇が熊野御幸（熊野御幸の初例）をされ、切尾湊から御乗船されたことが諸書に見え、切尾湊は今の印南町切目港ではないかといわれているから、この時はやく鹿ヶ瀬峠を越えられたのかも知れぬ。いずれにしても鹿ヶ瀬峠の歴史は、中世さかんになった熊野信仰とは切っても切れぬ関係をもっている。増基法師の「鹿ヶ瀬山中の歌」につづく文献として、次に掲げる「為房卿日記」

も、為房卿が熊野詣りに際しての記録に外ならぬ。

三、「為房卿熊野参詣日記」

為房卿の「熊野参詣日記」に云う。

二十八日。戊の刻、鹿ヶ瀬山中に着し、草庵に宿る。(原漢文)

この二十八日と云うのは、永保元年九月(一〇八二)のことで、八百八十年ほど昔に当たり、戊の刻は今の午後八時頃である。九月と云え旧暦のことである。日はとつぷり暮れはてた中を、続松(たいまつ)を頼りに歩んだことであろう。

芝口常楠先生著「葵羊園叢考」には、

「多分鹿ヶ瀬に寺院があったと思う。…… 有田郡広の養源寺はここに草創したと伝えられるか

ら、この寺院であると考えられる。草庵とあるが相当大きな寺院であると思われることは、為房卿は観修寺家の公卿であり、一行の人数は五・六十人があると思う。」

と述べられている。はたして其のとおりとすれば、さきの増基法師が鹿ヶ瀬山に泊まってから百数十年の間に、峠も大分ひらけて来たものである。そして、その間に花山法皇をはじめ藤原好親等の熊野参詣があり、貴顕の熊野詣でがようやく盛んになって来るのである。

それにしても為房卿の熊野詣では、永保元年^(一〇八一年)九月二十一日京都を出発し

九月廿二日 天王寺参詣・住吉奉幣、和泉堺泊

廿三日 泉国斉着

廿四日 日根王子奉幣

廿五日 紀伊名草郡雄ノ山口着

廿六日 日前・国懸奉幣、藤白泊

廿七日 有田郡勸学院着

廿八日 鹿ヶ瀬泊

廿九日 塩屋着

卅日 岩代着

そして十月一日乗船して太万浦に着き西牟婁郡三栖に至り、中辺路を経て本宮に達している。

四、「中右記」

「為房卿日記」に続く鹿ヶ瀬史料は、中御門右大臣藤原宗忠卿の「熊野参詣記」、いわゆる「中右記」である。宗忠卿は有名な藤原道長の後裔で、保延七年四月（一一四一）八十歳で歿しているから、鹿ヶ瀬峠を越えた天仁二年十月（一一〇九）は彼が五十歳ちかい時期で、いまから約八百五十年前である。

「中右記」には

天仁二年十月十八日 ……前畧……次に鹿瀬山に登る。登坂の間十八町。その路甚だ嶮岨、身力己に尽く、林鹿遠く報じ、峽猿近く叫び、触物感自然情を動かす……（原漢文）

とあって、この都育ちの公卿さんは大分弱音を挙げているが、それも無理はない。

実は余り長くなるのを恐れて原文の引用を省畧したが、日記を読むと宗忠は鹿ヶ瀬峠を越えた十月十八日「鶏鳴の後残月の前」とあるから、夜の白んだ頃前宿地（どことも記していない）を出発し、有田川の仮橋を渡っている。そのころになって漸く夜が明けた。つづいて糸我山を越えて逆河王子に奉幣の後、河辺で祓（みそぎ）をすまし、保津坂を経て湯浅を過ぎ、広王子に奉幣、広河原で昼食小憩、なお道々の王子に奉幣して鹿ヶ瀬に向かっている。無論、身分のある宗忠は駕か輿によったのであろうが、仲々の強行軍である。身力すでに尽きそうになった折柄、ようやく着いた峠は、山深うして鹿が遠くで鳴くかと思えば、近くでは山猿が叫び立てゝいる。都はも早幾十里と距てゝしまった。見るもの聞くものに傷心の思いをかきたてられたのである。そのうち峠は下りになったが既に日は暮れた。七町ばかり進むとかねて連絡してあった人々が続松（たいまつ）を燃やして迎えに來た。猶二・三町下って馬留という地で宿ったが、それは大樹の木蔭につくられた仮家であった。

明くれば十月十九日。空はどんより曇っていたが、明け方に宿をたった。行く手には大木が生い繁り、その上雲が厚いため歩行は困難を覚えた。やむなく再び続松（たいまつ）を点じて十町ばかり進んだが、遂に炬は消えた。原中八十町程の林の中を進むと、横あいから大きな蝦蟇（ひきがえる）が飛び出だして來た。おまけに風が吹きつのも、雨さえ激しく降り雷が鳴り出した中を、やつと高家王子に着いた。

「中右記」に見える天仁時代の鹿ヶ瀬峠と原谷の記事は以上をもつて終わっているが、今読みかえしてみても面白い。現在も原谷の小字名に「ヒキ」とよぶ処があるが、ヒョツとすると「中右記」所載の蝦蟇（ひきがえる）の棲息地に由来するのも知れぬし、原八十町と云う言葉も、そのころ既に存在していたとも考えられなくもない。

五、建仁御幸記

宗忠卿が鹿や猿の声に驚き、蝦蟇の姿に肝を冷やししながら鹿ヶ瀬峠を越え、熊野に下つて一寸百年程たつた建仁元年十月（一一〇一）、この地を通つたのは小倉百人一首の選者として親しまれている藤原定家卿である。

定家はこの時熊野参詣の後鳥羽上皇に従つたわけであるが、文筆に秀でた人だけに詳しい道中記が遺され、世に「建仁御幸記」として有名である。「建仁御幸記」に云う。

十月十日

……前畧……次に又シノセ山を举昇す崔巍峻岨岩石昨日異ならざるなり。この山を超え沓カケ王子に参る。シシノセ椎原を過ぐ樹陰しげし。路この辺に於て甚だ狭し。書養御所あり云々——後略

これで見ると峠の峻しさは、昨日超えた蕪坂にも劣らぬと舌を巻き、椎の木が多かつたことを特に記しているのも面白い。

と云うのは私は数年前の晩春、南紀史蹟顕彰会の一行にまじつてこの峠越をしたことがあるが、峠の頂きに近い茶屋の跡には椎の大樹が、往時を語り顔に生い繁つていた。また此の六月巽三郎氏や高野光男氏と共に、日蓮宗立正会原谷支部の人々を案内して峠を訪ねた際には、峠路に横倒しになつた椎の老木の枯枝に、累々として自然生の椎茸が生えているのを見たのである。

何れにしても此の峠には昔から椎の木が多かつたのであり、その椎の樹陰の細径を、後鳥羽上皇以下、文武の貴顕が肅々として熊野へ下り行く光景は、さながら一幅の絵巻物のごとくみやびらかであつたであろう。芝口常楠先生著「葵羊園叢考」は

為房は観修寺家の公卿であり、一行の人数は五、六十人があろうと思う。宗忠卿の熊野詣の一行は七十数人、陛下の行幸になると二百人近い人があるという。

と記し、児玉洋一著「熊野三山経済史」初版本には

……元永元年（一一一八）九月の白河院の御幸の如き、人馬の総数一千を越え、一日の食糧十六石二斗八升にも達せることであり、殿上人・北面武士・御導師・先達を従えさせて行くその院庁の御盛事は、寧ろ近世の大名行列を想起して然るべきであらう。

とある。以てその盛大さを偲ぶに足る。なおこの「熊野御幸記」は、流石に一代の歌人定家卿の筆になるだけに、日高地方通過の記事も、極めて詳細で面白い。

六、舌人伝説

さて鹿ヶ瀬峠に関する文献を二、三あげて来たが、何れも紀行文ばかりに終始した。いまの言葉で言えば、ノンフィクションと言うことになるかも知れぬ。こちらで少し方向をかえてみよう。

いつのことであつたか円善という坊さんが、熊野に下る途中、鹿ヶ瀬峠まで来て亡くなった。その後やはり老英という僧が熊野へ行こうとして鹿ヶ瀬峠で野宿をしたが、夜に入つて何処かで美しい声で法華經を誦する声が聞こえた。なおも耳をこらすと法華經の一巻が終わるごとに礼拝、懺悔し、また次へと読み進んで行くのである。そしてそれが夜明けまで続いた。さて朝になって傍らを見ると、それらしい人影はなく一体の骸骨が横たわっていた。骸骨は手足、胴体、頭骨とも完全で、その上に青い苔がまつわり、恰も衣を着けたようであつた。もはや長い年月を経たようであるにもかかわらず、口の中には舌が残り舌の色は蓮の花のように紅であつた。

老英はこれを見て、これにはきつと何か深い仔細があるに違いないと思い、もう一夜山中に宿つて訳を確かめることにした。やがて夜が来たが、法華經を誦し懺悔を続けること前夜の如くであつた。そこで老英は明方になつて敬やしく、その骨人に伺い事の次第を訊ねたところ、答えて云うには、私はもと叡山の東塔院の某と云う者であつた。生前法華經六万部を誦し奉らんと堅く誓いをたてた。しかし不幸にも誓いが半ばに達したころ、此の峠で命を終えたが、願の筋によつて今もこうして經を奉誦し続けている。けれども、もう残りは少ない。やがて誓いが成就したならば、此処を去つて、兜卒（とそつ）の円院に生まれる事になると告げた。その翌年老英か此処を通つてみると、も早、骨人の姿も骸骨も見えなかつた。

有名な「元亨釈書」に見える物語である。いったい「元亨釈書」と云うのは、三十巻から成る僧侶の伝記集で、その成立は元亨二年八月十六日（一二三二）と云われるが、本書第十九巻に円善と題してこの物語を載せ、次に安珍として道成寺の安珍物語を収めている。道成寺と安珍の説話は当時すでに釈書に収録されるほど聞こえていたにしても、相前後して同じ日高地方に馴染みある、鹿ヶ瀬峠の物語が加えられているのは興味が深い。

いま、此の円善の伝説の地は峠茶屋からやや東にあたり、法華壇と称し椎の老樹の下に、古い宝篋印塔と法華壇の由来を刻んだ石塔一基がたてられている。

また有田郡広川町に現存する養源寺は、此の骨人伝説の地、法華壇附近に建てられていたが、後世いま

の地に移したものと伝えられている。はたして寺伝の通りとすれば、養源寺の開創は鎌倉時代と云うことになるが、骨人伝説と養源寺の關係はともかくとして、明治初年頃（一八六八年頃）まで鹿ヶ瀬山麓原谷王子谷にあった法華堂が、やはり養源寺を本寺としていたこと等から考えて、養源寺が鹿ヶ瀬山上にあったとするのは、強ちに否定できぬ。

七、源平盛衰記

さて、これまで辿って来た鹿ヶ瀬峠の歴史は、増基法師と云い、為房卿と云い、或は宗忠卿にしても、定家卿や円善にしても、何れも仏教的な臭いがつきまといっていたが、峠の歴史は常に平和に終始していた訳ではない。例えば有名な「源平盛衰記」Ⅱ維盛入道熊野詣附熊野大峰事の条には

権亮維盛は蕪坂をうち下り、鹿ヶ瀬山を越え過ぎて、高家王子を伏拝み日数漸く経る程に、千里の浜も近附けり。

とあって、寿永三年（一一八四）屋島の戦に敗れた平家の御曹子平維盛は、一度は高野山に上って出家してみたが、厳しい源氏の追求に居たたまれず、蕪坂を打ち下り鹿ヶ瀬峠を越えて熊野に落ちたのであった。まことに昨日までは世を時めく平氏の公達であったものを、いまは追われる身の悲しさ、風の音、草木のそよぎにも心をおのかせつつ、慌ただしくも鹿ヶ瀬峠を打ち越えたのは、まことに哀れという外はない。

八、鹿ヶ瀬城

また、もう少し勇ましいところとなると、茶屋跡の西北数町にある小城山Ⅱ標高四百二十㊦、所謂鹿ヶ瀬城趾は、何時ごろ築かれたか明らかでないが、熊野坐神社年表によると、

治承四年九月三日（一一八〇）熊野別当湛増湛覺の城及び所領を焼き、人家数于宇、鹿瀬以南掠領す。

とあり、更に

治承五年（養和元年）九月二十八日、熊野僧徒鹿瀬山を塞ぎ、源頼朝に応ず、平頼盛を遺してこれを討たしむ。

とある。別当湛増と云い、熊野僧徒と云い、鹿ヶ瀬山には時ならぬ殺気がたちこめたのである。「紀伊続風土記」は鹿ヶ瀬城趾を記して、

峠の西五、六町許にあり。東西二丁半、南北一町、三段になれり。「太平記」熊野八荘司の一に鹿瀬荘司と云うあり。その伝詳ならず。此の城は此の人の築きたるなるべし。

とあるが、前述のように熊野衆徒はこれより百数十年早く、すでに鹿ヶ瀬峠に拠っているのである。或は鎌倉初頭ごろの築城とすべきかも知れぬ。さらに「紀伊続風土記」の伝えるところによると、

永享年間（一四二九～一四四〇）南朝の余類の宇佐見新五郎・田辺六郎・田子太郎・園部太郎・新宮八郎兵衛等二千余人が鹿ヶ瀬城にたてこもったので、北朝方の畠山左衛門持国がこれを征討することになった。永享十年九月三日持国はまず河内勢を率いて出陣し、一旦有田鳥屋城に入って休息し、ここで紀州勢の湯川・野上・浅里の諸軍を道案内に、畠山定重・松倉主膳正満好を大将として、総勢三千騎を以て一時に殺倒した。双方乱戦の末、田辺・田子・新宮・園部は討死にして、城は落ちたので此の旨京都に注進し、足利將軍義教の御書を賜った。

とあって、永享の昔、峠の草木は紅い血潮に染まったのである。

九、江戸時代

鹿ヶ瀬峠の古い時代の話が大分つづいた。ここらで少し新しいところ、せめて徳川時代の峠の姿を偲んで見よう。ところが妙なことに比較的年代の新しい徳川時代の峠の史料が少ない。

この時代の紀行文を数冊取り出して見ても、峠のことは茶屋ありとか、有田・日高の境界なりとか、極めて簡単な記述しかないようである。寛政十年三月（一七九八）林信行の「熊野詣紀行」に言う。

鹿ヶ瀬峠

茶屋三、四軒あり。

として増基法師の歌をひき、次に、

峠より下り十八町にして陌^{みち}さまで悪しからず、そばつたひに下る。遠山隣峰多く見。谷水洛口の所、若木茂りたるそば陌^{みち}もありて原谷へ下り行。

とある。また当時の峠の状況を想像するものに、昭和二十六年^{（一九五一年）}有田の郷土研究家西尾秀氏が、もと峠茶屋を経営していた梅本林平氏を、広川町河ノ瀬に訪ねた時の紀行がある。

一行は王子跡（河ノ瀬王子）の近くの梅本林平さんの家を訪ねた。鹿ヶ瀬峠が旧街道であったころには、峠茶屋として旅行者に大きな慰安と便宜を寄与してきた家であったが、上津木回りの新街道ができてからは、峠を引き払って下りて来たのである。鹿ヶ瀬は熊野街道には必ず越えなければならぬ処である。殊に日高側から登ってくる者には、茶屋の真下で幾段かの石段を上がるようになっていたので、やれやれという安心感で茶店に腰を下ろしたものである。梅本さんの家では——中略

——私共の興味をもつて見たのは、銀錢の永樂通宝であつた。紀州藩主が峠茶屋で休息した際賜つたもので、特製の大形永樂錢であつた。同家では一々紙包みにして、年号を記入している。安永三年九月二十三日・安永六年五月三日・寛政五年五月二十二日・寛政五年九月二十九日・寛政六年十一月二十日等であるが、何れも大殿様と称せられた第八代重倫公からの下賜である。

十、明治から現代

これで紀行文を史料とした鹿ヶ瀬峠小史を終わることにする。なお二、三補足しておけば、明治十五年十月十七日、中島信行（後の衆議院議長）が、自由民権運動鼓吹のために県下を遊説して紀南に入った際の日記「木国日記」が、御坊出身の林茂東大教授によつて最近発表された。その一節に、

十月十八日……

……十時湯浅駅に到着し古碧楼に休憩す。該地の人池永馬太郎氏等来たり訪わる。暫く時事を語り、終りて辞して車を馳せ鹿ヶ瀬の麓に到り、更に人夫をして荷を負わしめ歩行して登る。絶頂にて一の茶店に憩い、又下りて腕車を駆り午後三時過ぎ御坊村に着し、浄国寺に投宿したり。——とあるのを附記しておく。因みに古碧楼は湯浅町中町本勝寺第十一世妻木悟溪の居を指すものと思われる。

また芝口常楠先生著「葵羊園叢考」には、

この附近明治中期までは三軒の人家があつた由なるも、鹿ヶ瀬峠の往復が全く衰微して人家も他に移転し、金崎氏の邸宅のみ「名所図会」に描かれている昔の構えのままに、鹿ヶ瀬峠の麓の家として存在しているのがなつかしい。以前は門前に多くの金魚を飼うていて旅人の心を慰めたもので、「金魚の茶屋」の名が有名である。畧して「金魚」と云い、明治時代人力車丁場で、御坊の町より金魚まで十五錢という賃金は今も耳に残っている。

とあり、別のところでは、

峠の茶屋の跡は今黒竹藪となり、昔を語り顔の椎の老木が二株あつたが、今も無事に年々の花を人知れずつけているのだろうか。

という意味の記述をして、当時をなつかしんでおられる。西尾秀氏にしたがえば峠の茶屋は、元和頃（一六一五〜一六二四）からできたと云うが、それも大正十二、三年（一九二二、三）ごろ通行人が絶えて里へ移つたと云い、今は茶店の人々の墓石が二十数基夏草に埋もれている。私が先年茶屋跡を訪れた際見たのでは、正徳（一

七一（一七一五）の記録のあるのが最も古く、明治時代のものもかなりあった。

いまや様々な思いを抱きながら峠越えをした人々も、次第に老境に近づきつつある。原谷奥から広川町井関への山越えの路は、車馬の往来が全くなく、女、子供にもやさしく楽しいハイキングコースである。やがて爽涼の秋も近い。日高地方の人士に一度、この忘れられた峠路の探勝をおすすめしたい。

（昭和三六・八・一〇稿）

潮の岬どらいぶ

「紀州新聞」昭和三十六年八月

二十五・二十六・二十七日掲載

八月一日潮岬までドライブをした。こう書けば一かどえらそうに聞こえるが、本当は新晃商会主小山豊氏が商用で串本まで行くのに、誘われるままに便乗したのである。同行は画家の中井千代松氏、ハンドルは新晃商会の長岡君がもち、助手席には佐々木君が座った。

六時五十五分御坊出発、七時二十五分印南通過、八時七分南部通過、南部町堺を堺に路面が嘘のようによくなった。西牟婁郡に入ったのである。

車中いままで走ってきた道路の悪さについて議論沸騰、郡選出議員諸氏の政治力云々という話も出た。しかし考えてみると日高郡の県議諸公の政治力が、他郡市のそれに格別劣っているとは思えぬ。問題はもつと他の処にあるのかも知れぬ。なんにしても御坊から南部までの道路はひどい。せつかくの御努力をお願いしたい。八時二十五分会津橋を渡り、やがて富田河畔を下り五十五分、郵便橋という妙な名前の橋を過ぎた。なんでも郵便制度ができた当初、この橋詰めで郵便通送の受渡しをした名残とか。九時二十分椿郵便局前通過、自動車はやつと通れるくらい細い道だ。これでも国道と云うのだから驚く。

間もなく椿温泉の上手を通る。温泉旅館の建物が見える。土地が狭いので背後の山を盛んに掘崩し建築用地を作っている。この辺りからいよく山路になる。海岸に突出した幾つかの小さな岬のつき根を、上ったり下ったりをくりかえす。人通りは全くない。自動車にも殆んど会わぬ。山は浅い雑木林で所々杉や桧を植林した所もある。自動車は快適だ。

誰かがこの辺りを運転手仲間で大菩薩峠と呼んでいると話した。それ程さみしく高い山道だ。海拔二百以近

くはあろう。これなら机龍之介がひよつこり出て来ても不思議はない。

九時五十分日置町通過。日置川河畔の海に臨んだ静かな町である。椿を出て三十分、山また山で田畑らしい所はどこにもなかった。やっとここで狭いながらも平坦な水田の間を走る。十時二十分周参見を過ぎた。三十分周参見、見老津間の海岸で昼食、ずばら者の私は小山君の弁当を御馳走になる。ここまで来ると海の色が美しい。青いというより紺碧に近い。数十^ミ下の海岸ではその紺碧の潮が、岩に砕けて波しぶきを上げている。

ふと目をやると弁当を（一行脱落）つかっている附近の岩石が、あたかも虫でも食ったように、ぶつぶつと小さな孔があいている。珍しいので採取する。野田三郎氏にしたがえば、この岩石は硬砂岩で、ぶつ／＼の孔は曾て海中にあった時代有孔虫が食ったもの、それが地盤の隆起作用で陸地にせり上がったとのこと。

十一時十分見老津の少し手前で中井千代松氏が下車する。この辺りの海岸風景を描くためだが、大きなカンバスや画家の七つ道具を持った中井氏の姿が、見る見るうちに後方に小さくなる。

江住・和深・江田・田並と小さな村々が自動車の前面に現れたかと思うと、すぐ後方へ消えてゆく。何れも狭い海岸にしがみついたような村々である。所々に猫の額ほどのやせた畑が点在している。

十二時十分串本町無量寺に着く。有名な芦雪や応挙の画を見せて貰うためであったが、寺では目下境内に鉄筋の堂々たる収蔵庫を建設中で、それまでは公開しかねると云う。直ちに潮ノ岬に向かう。

潮ノ岬へはこれまで二回来ている。今回は三度目に当たるが、何時来ても実に明るい。近刊の平井忠夫氏著「南近畿の旅」には

潮ノ岬の景観を雄大だというのは当たっていない。雄大というならむしろ四国の室戸や足摺崎の方である。常緑潤葉の灌木林を全身にまとったまま、高々と太平洋に乗り入れている、足摺の堂々たる威風はここにはない。潮ノ岬は中年の女性のように、もつと豊満で優美である。

とあるが、そう云えばなる程そんな感じもする。同書はまた

たぶんそれは岬というより台地という方がふさわしい形状と、その台地がよく耕されているところから来るのであろう。潮ノ岬は高さ六〇―八〇^ミの、四国を小さくしたような形をした厚板状の台地である。串本の町がまたがっている砂洲は約半^キの幅しかないのに、台地は広いところで東西二^キあまりの幅をもっている。どうしても岬という感じではない。………下畧

とも書いている。

私達は広い芝生を走り、自動車を松の木蔭にとめて、最近で来た観光タワーに上った。タワーは七階の鉄筋建築で、塔の上で海拔九十五^ミ（四百三十尺）。北に熊野の連山、東西南に岩を嚙む太平洋の怒濤を一望にし、

これはやはり雄大というより仕方がないが、それよりも足もとの広いところで、東西二^キという岬の景観に心を惹かれた。よく耕された耕地と、畑の周囲をいろいろの緑の林。その間に広がっている芝生や、点在する農家はいつまで眺めても飽きぬ。タワーは七階までエレベーターが直通し、各階には食堂や売店があり、五階には舞台があつて土地の娘さん達が、一時間おきに串本節を踊つてみせるが、私は外の景色に気をとられて見る機会を逸した。

タワーを降りて、此も最近工費一千万円をかけて完成したばかりの下村記念館に入る。期待した日高郡とも縁故の深い、この新聞界の巨人下村海南の遺品が何一つなかったのは淋しかったが、それに代わり地元の人々が南方諸島へ出稼ぎに出ては持ち帰った、民俗資料が陳列されていて、それはそれで又別の面白さがあつた。私は下村記念館に入つて、海南博士と仲のよかつた、これも本県と縁の深かつた新聞人、杉村楚人冠に潮ノ岬を書いた文章があり、その最後が

「沖には巡洋艦淀が通ると」

と結んであつたのを思い出した。

私はタワーの前の土産物屋で、美しい宝貝を二つ買つて、今日の記念にした。間もなく潮ノ岬を後にする。串本町で小山氏が商談をすまし、細い海岸道路を走つて、佐々木君の生家のある、岬の東麓の出雲という地を訪ね一路帰途につく。

時々驟雨がザーと通りすぎた。見老津のちかくで写生を終えた中井千代松氏が乗る。前面の海中長く突出した岬を指して、あそこで写生してきた。俄雨がきてスズぬれになり、それでも二枚半描いたなどと話しているうち「おかしいぞ」と小山氏が云い出し、自動車を点検するとファンベルトが切れていた。

ファンベルトがどういう役目をするものか私にはわからぬが、こ奴が切れたとなると矢張り具合が悪いらしい。しかし修理のベテラン長岡君・佐々木君がいるので安心してゐると、どう修理したのか又自動車が走り出した。ものの二十分も走つたと思うと又切れた。こんなことを何回もくりかえしく、自動車は進むのだ、少々心細い。本格的にベルトを取りかえるより他はないらしいのだが、そのベルト屋がどこにもない。

もともと故障さえなければ、八時半頃には御坊へ帰る予定であつた。それに朝から自動車の調子は快調であつた。串本を出たのも予定より少し早目であつたのだ。それが中井千代松氏が乗つた途端、こう云う事故が起こつてしまった。こうなると中井氏が余程よくない事をしてゐると云うことになるのは己むを得ない。岬の写生をして来たと云うものの、一人で何を描いてきたのか知れたものではない。

こうして私達は散々苦勞した末、と云つても苦勞したのは佐々木・長岡の両君と小山氏であるが、とに角七

時少し回って日置町に着き、この町にたった一軒あると云う駅近くの修繕工場を訪ねた。しかし頼みにしていたその工場は最早戸がしまっていた。いよく心細い。そこで薄情なようであるが、あとは皆さんにお願いして、私は汽車で帰ってやろうとこっそり日置駅を覗いたが、十九時七分の終列車は既に出たあとで、次は夜行しか残っていない。すごくと自動車へ戻る。小山君は私の顔を見てニヤ／＼笑っている。少々照れくさい。やっと一軒のベルト屋が見つかった。全く地獄に仏の思いである。正直なものでファンベルトを取りかえると、自動車はブルブルと身ぶるいして勢よく走り出した。日置川をへだてて向の山々の夜景が、墨絵のように美しく後方へ流れる。かくて正十一時御坊市帰着。後になってみると此の程度の事故なら、思い出があつて却って楽しい。

(昭和三六・八・二〇)

古本あれこれ

「紀州新聞」昭和三十六年十一月三日掲載

もう二昔前になるが、私は昭和^{一九四二年}十六年から二十二年まで大阪で暮らした。ちょうど戦争前から戦后への物の不自由な時代であつた。

郷里を出る時は都会で一旗挙げるつもりでまったくの手ぶらで出たのだが、好きな道は仕方のないものだ。少し腰が落ち着くにつれ、何時かまたロクでもない我楽多本が増えだしたが、古本屋漁りに夢中になったのは大阪に第一次の大空襲があつてからの事だ。昭和二十年春の大空襲で一夜のうちに市街が焼野ガ原になった時どうした風の吹き回しか私の家は無事に残った。しかし家族の者はすっかり怖氣ついて田舎へ引揚げ、私は焼け出された友人と二人で自炊生活をはじめた。

そのうち私の勤めている工場も爆撃で目茶目茶になり、私は残務整理員となつたが、もとより小工場のことで大して残務という程のもはなく、暇だけがあり余つた。こうなると私は一人身の気楽さで、会社の早い日や日曜日毎に、配給の馬鈴薯や薩摩芋のふかしたのを弁当がわりに腰につけ、焼け残つた場末やバラック建ての古本屋をまわつた。

九時ごろに難波に着くと戎橋筋を大丸あたりまで歩き、御堂筋を道草を喰いながら中之島公園まで行くと昼近くになる。公園のうすよごれたベンチで持参のふかし芋を食べているとよくルンペイがよつて来たものだ。午後は梅田界限の古本屋をうろついて地下鉄で天王寺へ出る。阿倍野筋を現大阪大学の近くまで歩いて、帝塚

山を経て住吉へ帰る。時には南田辺まで足をのばしたり、鶴見橋通りへ寄り道もしたが、この位で大体一日のよい行程になる。

いうまでもなくこの時代は明日の日本がというよりは、わが身さえどうなるか分からぬ時代であったのに、こうして買い集めた雑書を、せつせと田舎へ運んだのだから、まったくあきれた話である。

この時期に集めた叢書物に文明堂文庫、国文編百二十一冊―確か一冊五十銭位であった―があり、まとめて手に入れたものに、徳富蘇峰の「近世日本国民史」―五十冊等がある。ちょうど我が国がポツダム宣言を受諾して間もない一日、阿倍野交叉点近くの書店で、この五十冊が箱入りのまゝ七円の札がついて積まれているのを見かけた。神国日本が一ぺんに民主主義国家に回れ右をした当座で、古い歴史書など一顧もされなかった。その頃の私は歴史や郷土物に一向関心はなかったが、これは余りにひどいと思った。蘇峰先生の畢生の大著五十冊が賣価七円！、私は一首の義憤を感じて、乏しい財布をはたいた。

ある時帝塚山の古本屋で「内村鑑三全集」二十巻を見つけた。私はクリスチャンではないが内村鑑三に傾倒して久しい。彼の古武士的精神と詩人的な風格や、アポロ的な澄んだ文章は信仰の如何をこえて人の魂に強く訴える。買価はたしか十五、六円でなかったかと思う。私はこの岩波好みのヅシリとした本を一冊一冊手にとったり頁をくったり、ためつすがめつ愛撫した末、結局その十五、六円が惜しくてそのまゝ帰ったが、やっぱりあきらめ切れず、翌早朝出かけたが、最早後の祭りであった。だから私の書架にある彼の全集は、その後根気よく端本で集めたもので三冊ばかり欠けている。

狐

「紀州新聞」昭和三十六年十二月二日掲載

私たちの子供の時分は狸に化かされたり、狐に油揚げをさらわれた噺をよくきいた。

日高田圃に白馬^{おろし}風が吹き荒れて、旧正月が近づいたころ、早くから行火^{あんか}にもぐりこんで、大人達その他愛もない世間話に聞き耳を立てゝいると、木枯らしの音にまじって河原で鳴く狐の声がきこえた。

「そら狐が鳴いた。あれは師走狐というてナ、師走狐で日がない、日がないと鳴いているのじゃ」

幼い私には師走月のもつ特別の意味がわかう筈はないのだが、そう云われてみると子供心にも、何やらうら悲しい気持ちになったものだ。

宇宙ロケットや原子爆弾の現代、こんな時代遅れの連中は、とつくの昔に影をひそめそうものだが、細尾伊三郎氏の随想「早起きは三文の得」によると、彼等は今もお健在で、彼等は彼等なりに人間どもの慌ただしさをよそに結構おのれの世界を楽しんでいる模様なので、私は心から彼等の前途を祝福したことであつた。そんな私に最近こんなことがあつた。

十月二十九日、私はさる処でしたゝかに御馳走になった。御坊を出たのはかれこれ十時頃であつたろうか。ちようど連日の長雨が上がつた後で月が明るかつた。出島堤を御機嫌で自転車を走らせ村道に入った。道の右手は深い用水路で、左手は田圃がつづいている。

ふと気がつくと自転車の荷物台の新聞紙を引っぱり出すような、バシャパシャと云う音がしたようであつたがそのままペダルをふみつづけた。ものゝ半町も走つたかと思うと、またバシャ／＼と音がした。今度は気のせいではない。

今度は何の連絡もなしに狐だなど気づいた。自転車の後には女房に頼まれたカマボコがつけてある。狐め、カマボコを狙いおつたなど考えた。なる程こういう時、彼にしてやられるのだなど自転車をゆっくり降りて振り向くと、いたわいたわ何と夜目にも真白な奴がいるのではないか。

「やいこらッ」

こつちは酔つ払っているので威勢かよい。

「手前らにカマボコを盗られるぼんやりと思うか」

云い終わらぬうちに、犬程もある白い奴が、すでに稲刈りのすんだ水田の上を、点々として北の方へ逃げた。

狐のはなし

「日高タイムス」昭和三十七年一月七日掲載

ある新聞へ狐にかまぼこを狙われた話を書いたところ、多くの人々から「怖かつたろう」とか、「よく化かされなかつた」とか、御見舞とも冷やかしくとも分からぬ挨拶をうけた。私は無類の臆病者だが、不思議に狐や狸や犬は怖くない。ジャックロンドンの「ホワイトフワング」・「荒野に生まれて」、或はバイコフの「偉大なる王」などの、動物小説に親しんだせいかも知れぬ。怖ろしいどころではない、たまたま山路などで彼等の姿を見かけると、「よう元気か！」と声をかけたくなる位のものだ。

昔はよく狐や狸に化かされたという話をきいた。今の日高高校のあたりには、大正初年頃まで、島村の氏神、春日神社が祀られ、この神社の社にお菊と云う古狐がいて、しばく附近の人を化かした思ひ出話を、野田桂三氏が紀州新聞に書いていたが、これも日高々校附近のできごとだから、或はお菊狐の孫か曾孫ぐらいに当たる者の悪戯かも知れぬ。

昭和七、八年頃と思うが、日高中学校（日高々校の前身）に橘という画の先生がいて、生徒の人望をあつめていた。ある春先の宵中学生のFは橘先生の下宿を訪ね、例によつて芸術談に花を咲かせ、先生の家を出たのは十一時を少し過ぎていた。

Fはさき程からの先生を囲んでの絵の話、文学の話、新しい思潮の話に、まだうつとりと酔つたような気持ちで自転車を踏んだ。自転車が今の高等学校の運動場を通りぬけ、——そのころ運動場は通り抜けができた——裏手の小溝あたりへ進んだ時、前方がぼおっと明るくなつた。

変だなと思ううちに、何か白い霧のようなものが辺りを包んでしまった。仕方がないので自転車を降りて、白い霧を透かして見ると、驚いたことにはFの前方数間のところに、四、五匹の狐がこの獣独特の太い尾を立て、戯れていた。

こんな話はまだ外にも沢山あろう。今のうちに集めておきたい。下手な恋愛小説や推理小説よりよっぽど面白い。——完——

おおかみ談議

「日高新報」昭和三十七年一月一・四日掲載

話は少し古いが

昨年十一月九日の朝、西牟婁郡牟婁町紙秋津の一農家で、近くにあつた羊小屋がこわされ、四頭の羊が腹に三十三疋の大穴をあけられ死に、同時にこの家の愛犬の姿もみえなくなっているのを発見した。しかも調べてみると附近の田圃には直径四疋の鋭い爪をもった足痕があり、足痕は一、三疋間隔で一直線にのこつていた。古老の説によつてこれは狼の足痕の特色とわかり、騒ぎは大きくなつた。

——三六・一一・二九産経新聞記事——

また、同紙は有名な動物学者秋山連山博士も、昭和十年に日本狼の絶滅説を唱え、大阪市立自然科学博物館

筒井館長も、日本狼は明治三十七年（一九〇四年）奈良県吉野郡鷲家口で捕獲され、頭骨と毛皮は大英博物館に保存されたのを最後に絶滅した。当時は少し深山へゆくと狼の死体がごろ／＼していた。たぶん狼の集団に狂犬病、ジステンパーが流行したためと思われる、これは学界でも定説となっていると語った旨を伝えている。牟婁町の怪獣が果たして狼であったか、どうかはしばらくおくとして、日高地方でも明治末年頃までは狼の話がいくつか残っていた。

かつて御坊市八幡筋で老を養っておられた、故高尾英吉氏にお伺いした話に、高尾氏は小学校を終えて一時村役場の小使いさんをされたことがあり、――多分明治三十二、三年頃ではないかと思う――役場の用で屢々同村小原長滝へでかけた。その頃の長滝は段々さびれつつある時代で、人家もわずかに二戸であったが、その二軒の家は屋敷の周囲を高い石の塀で囲み、外からは屋根が見えるだけで入り口をさがすのに苦労した。家をめぐらした石垣塀は、ちょうど海辺の人家と同様に強風を防ぐためでもあったが、同時に人家の近くへ出没する猪やオオカミに備えるものでもあった。

昔の田舎の家は汚い話だが、小便壺と糞壺を別々に設け、小便壺は家の軒下にあることがおおく、オオカミは人間の小便を好んで飲みに来たものだ云々。狼が人間の小水を好むかどうかは明らかでないが、私の祖母なども同様なことを云うていたところから考えて、この説は当時かなり広く流布していたものであろう。狼は性猛悪陰険で深山にすみ、夜間群れをなして徘徊するが、こちらがしゃんとしていると滅多に襲うことはない云う。そのかわり一寸でも隙があると、例えば転びでもすると容赦なく飛びかかってくる。

それだから深い山路を一人歩きしている人をかぎつけると、狼はその人間の側を一定の間隔をおきながら、どこまでもつけてゆく。もし相手が木の株にでも躓いて転ぼうものなら、忽ち襲撃しようというのだ。つけている人が無事に人里へ出ると、狼はあきらめて何時か山へ戻る。送り狼と云うのがこれである。

また狼は悪食貧らんで、屍体をも好んで食う。これも明治中頃の話だが、有田郡金屋町の長谷川の樵夫が、竜神村（現美山村）の深山で伐採作業中急死した。仲間の者が屍体を戸板に載せて長谷川へ運ぶうちに夜になった。すると何時の間にかぎつけたのか樵夫たちの前後に、幾匹かの狼が牙をならしてついて来たが、樵夫たちに油断がないとみると、群中の一匹は、たちまちに一行の頭上をひらりと飛び越えて山中に去った。オオカミはこれ程俊敏な獣でもある。

今次の大戦で大陸を転戦した人々の中には、満州の荒野でオオカミの遠吠えを聞いたという人もおおいが、そんな夜は営舎の近くで、夜どおしカガリ火を燃やしたという。オオカミも火を恐れるからであるが、故国を遠く離れた荒野で一人焚き火を囲み、狼の鳴くのを聞いているのは、何とも形容のできぬ淋しいものであった

という話だ。

虎もライオンも棲息せぬわが国では、オオカミは百獣の王であった。牛や馬のような大きな図体の動物も、一たび狼の遠吠えをきくと、恐怖の余り歩くこともできないという。

したがって私達が子供の頃聞いたいろいろのオオカミ談にも、狐や狸の物語とは別に、何かこの獣に対する畏敬のようなものが混じっていた。オオカミという名称も山の大神から生じたと、民俗学者は説をなすが、まさにさもあるう。(終)

田端春三翁

「紀州新聞」昭和三十七年一月二十六・二十七日掲載

毎年いたゞいていた田端春三翁の年賀状は、今年は三カ日がすぎても配達されなかった。几帳面な御性格の翁としては珍しいことであつたが、まさか御病臥中とは気づかなかつた。八十余才の御高令とは云え、平素はそれ程御元氣であつた。

昨年の七月八日の午后、故小竹岩楠氏と田淵栄次郎氏のことを、お聞きすべくお伺いしたのが、お目にかゝつた最後となつた。

「すっかり毫碌してしまつて駄目です」

と笑われながら、小竹、田淵氏の思い出を語られたが、毫碌どころではなくその記憶は正確で、人物評は鋭かつた。なる程こういう見方もあるかと、私はあらためて感心したものであつた。

また芝口常楠先生の「葵羊園叢考」の読後感を語られ、その周到な研究を口を極めて賞讃された上、西牟婁方面の九十九王子趾について質問されたりもした。

ほんの三、四十分で失礼するつもりが、田端翁は最近、田辺市の漢学者であつた小幡楽山の蔵書を買いられたという話や、旧耐久中学へ図書館を作る相談を受けたので、何とか考慮中だと云うことなど、次から次へと話されて思わず長坐したことであつた。

日記を見るとその二カ月ほど前の五月十二日にもお伺いしている。芝口先生の「葵羊園叢考」ができたので、お昼の休み時間を利用しておとゞけしたのであつた。

当時わたしは鈴木梅仙翁の資料を集めていたので、自然話がその方面に移ると、翁は、最早この地では殆ん

ど残っていないであろう梅仙墨や藤白墨、さては有名な方程式墨まで持ち出されて、私をおどろかした。また紀州の文人墨客のことに話題が転じて、宣長、大平、諸平、仁井田好古、繁里の短冊を次々と示された。これらの短冊は私の手許にも二、三ないではないが、さすがに保存が行きとどいていて、私の所蔵のくびれたものは雲泥の相違であつた。

×

×

×

私が田端春三翁にお目にかゝつたのは昭和二十四、五年以来で、晩年の十年ほどにすぎぬ。

当時、私は「森彦太郎先生傳」を著述中で、資料を集めてはぼつ／＼ペンを進めていた。しかし書き上げてはどうして出版するかとなると、全く何のあてもなかった。そんな折柄、田端憲之助氏から私のことを聞いた、一度逢いたいとお電話があつた。私の処女出版「森彦太郎先生傳」は、こうして日の目をみたのである。翁の御援助がなかったら、恐らく原稿のまゝ埋れてしまったに相違ない。いくら、ひねくれ者の私でも、これは感謝せずにはいられぬ。

しかし人間は現金なものだ。本ができ上がると、すっかり御無沙汰勝ちになつたが、そのころはいろ／＼打合せの都合もあつて、実にしげしげとお訪ねしたものであつた。

ある時お伺いすると、ちょうど岩波書店で「福沢諭吉全集」編纂の仕事をしていた土橋俊一氏が居合わせ、内村鑑三や森鷗外が話題に上つた末、話はさらに講和論へと発展した。

当時は雑誌「世界」が平和特集号を出し、南原繁や矢内原忠雄が全面講和を叫んで、国論が沸騰していた。翁は私達の青白い書生論を面白そうに聞きながら、時々寸評を加えられたが、それは八十才近い老翁の言葉とは思えぬ程、新時代への理解もあつたし、鋭いものであつた。

田端翁は酒をたしなまなかった。「私はどんな席でも周囲にかまわず御馳走だけ食べて、さつさと帰るのです」と語られたことがあつた。田端翁が酒をたしなまなかったのは、それは生理的な理由によるものか、或は精神的なものか、あいにく聞きもらした。だが田端翁は酒ばかりでなく、どんな場合でも酔えないお方であつたと私は思う。

恐らく翁は、その長い生涯を通じて、羽目はずしたことなどは一度もなかったのではないかと想像する。徹底的なリアリストであつた。

私はずばら者で、どんな人前でも臆面もなく無駄口をきくが、正直のはなし田端翁と対談していると気疲れがした。總明な翁の前では何か腹の中が覗かれているようで、いゝ加減な与太を飛ばすわけにはゆかなかつた

からである。しかし一度こんなことがあった。何かの拍子で家蔵の古銭を見せていたゞいた時のことだ。翁の古銭愛好は先考の趣味をつがれたものと聞いているが、父子二代にわたり余り金に糸目をつけずに集められたものだけに、内容も豊富である。そのとき拝見したのは、主として中国古代の刀銭であったが、その一つ一つが黒漆塗の立派な函に納められていた。

今だから白状するが、私は古銭のことは一向にわからない上趣味も少なかった。たゞ田端翁があまりに熱心なので、つい釣り込まれたというのがその場の成行であった。

翁は立派な容器から一つ一つ古銭を取出してならべ、詳しい説明をされた。そしてその様子は平素の厳しさが失せて、如何にも和やかで楽しそうであった。失礼な形容だが目を細め口辺に笑いを浮かべ、まったく好々爺然として、これが県下でも聞こえた山林王、田端春三翁と思われる程であった。とっさに私は人間田端春三翁の片鱗にふれたと思った。そして何かほのぼのとした温か味を感じたのものであった。が、これも今は一片の思出となった。(終)

沖野岩三郎の短歌

「紀州新聞」昭和三十七年一月五日掲載

沖野岩三郎——もう覚えている人は少ないかも知れぬ、日高が生んだ唯一の作家である。彼は^(一九一七年)大正六年、朝日新聞の懸賞入選作「宿命」で作家生活に入り、昭和^(一九五六年)三十一年の死に至るまで、小説・童話・歴史研究の広い世界に大きな足痕をのこした。

そればかりではない。美山村寒川に生まれて軽井沢で長逝するまで八十余年の生涯は、それ自体がさながら一編の小説の如く、数奇な運命の連続であった。またクリスチャンとして或は社会思想家としての彼の地位も明治、大正の社会思想上、決して軽視できない。私ども郷土の後輩はもう一度彼の歩いた路をかえりみる必要がある。

私は三、四年前から「沖野岩三郎伝」を志しているが一向はかどらぬ。何しろ著書だけでも百十数冊をかぞえる。伝記を作る以上著書に目を通さねばならぬのは当然としても、第一今となつては此の百十数冊を揃えるのは容易でない。さんざん苦勞して今私の手もとに集まったのは二十数冊ぐらいのものだ。

そんな折柄旧年来、那賀郡打田町の与田左門氏から沖野先生の旧著が六冊ばかりとどいた。岩波書店の雑誌

「図書」の探書覧へ「沖野岩三郎の著書が欲しい」と出しておいたのが実を結んだのである。与田氏は古い紀州民俗の研究家で、その名前はかねてから承知していたが、先方も私のことを知っていてくれたとかで、はなしはうまく運んだ。

さて与田氏から恩借の本をみて驚いた。六冊が六冊とも著者の自署があり、その上各冊の扉に作者の短歌が書きつけてある。所謂献呈本なのだ。与田氏の先考が沖野先生と親交があり、左門氏も青年時代しばらく東京で沖野氏の校正をしたと云うから、献呈は当然としても小説家・沖野岩三郎の歌が面白い。私はずばら者で大事な史料を失ったり、忘れたりして後で大騒ぎするする事が少なくない。今度もそうした失敗をくりかえさぬために、とにかく活字にしておくことにした。

○ 宿命のことはりに生くる吾なれど 涙もするなるあふさきるさに

一九二〇・二・一（―宿命―の扉）

○ 身の上を語り尽くしてただ二人 黙していれば春雨の降る

一九二〇・二・一（渾沌―の扉に）

○ あて人の失ひにける真珠をば 拾ひて笑みしわれは貧しも

一九二一・一（失はれし真珠―扉）

○ 幾度か捨てまほしくぞ思ひける はたとせながき恋のおひ摺

一九二一・一（恋のおひ摺―扉）

○ 本来は無東西なりたてよこに 見たる世界のあはきかなしみ

一九二〇・二（基督新教縦断面―扉）

○ 東てふ言葉も知らぬ三つの歳 母は日の出る方へ嫁ぎぬ

一九二〇・二・一（煉瓦の雨―扉）

ひじり言ふ煙れる麻を消す勿れ 忍びてあらん悲し此の世を

一九二一・一（煙れる麻―扉）

○
生を賭して為すべき事の多かるに わが説くみちはたはごとに似る

一九二一・一（生を賭して―扉）

与田氏の蔵本に見える沖野氏の短歌は以上八首であるが、一昨年であったか美山村寒川村、寒川道典氏邸の床にもかけられていた軸にも

蚊頭で釣りあげにけるあめの魚 切れしテグスの口惜しかりけり
の一首があつたのを思い出す。先生の晩年、失明直前の作と聞いている。

長い人生の夕暮れを静かに軽井沢の山荘で養われたこの老作家の脳裏を去来したものは、はるかな少年の日、郷里の谷川で興じた魚釣の一こまであつたのだ。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 芭蕉

この美しきもの

「紀州新聞」昭和三十七年二月三日掲載

たしか昨年の十一月頃であつた。日高高等学校の阪本 壽二先生から「大賀ハスについて」と題する印刷物をいたゞいた。

昭和二十六年四月、大賀一郎博士は千葉県検見川遺跡の地下二十尺の青泥層から、おゝくの私費を投じて古ハスの実三個を発掘した。博士はさらにその古ハスの実を発芽させた上、そのうち一本は七月二十日見事な紅花を咲かせるまで育てあげた。二千年ハス或は大賀ハスの開花として、世界中が絶賛したのも無理はない。

「大賀ハスについて」は、こうした博士の研究を伝え、当地にも「大賀ハスの実会」をつくり、大賀ハスを育てたいと結んであつた。いま時めつたに見られぬ美しい会である。私は早速会員の末席に加えて貰うことにした。

ところが一月九日その大賀博士が当地に来られ、博士を囲んで座談会が開かれた。植物には一向に不案内な私だが、八十年の生涯をどう考えても余り金になりそうもないハスの研究一筋に生きぬいた、この稀有な老学

者の風貌に接するだけでも、大きな収穫があるうと出かけてみた。

数え年八十才の老博士は、その日東京から飛行機で大阪に着き、御坊までかけつけられたという忙しい旅の疲れもなく、三十人近い出席者を前にお元気だった。博士はハスの外に曼茶羅の研究者でもあられる所から、ハスを語り、曼茶羅を説き、出席者一同に大きな感動を与えた。ことに研究家は間口を狭く奥行きを深く掘さげるのが大成の秘訣とは平凡な言葉だが、博士のような方から直き直き聞かされると、千鈞の重みをもって胸にひびいた。

座談会の途中から博士のつくられた、ハスのスライドが上映された。原色版の目も覚める美しさであったが、それよりもスライドを説明されながら何回も繰り返された、「わかつてみれば何でもないが、これだけの事がわかるのに本当に苦労したものですよ」とか、「貧乏しましたよ、この写真を写すお金がなくてね」とか、悪しく勘ぐれば一種の自慢話ともとれる回想談が、不思議に淡々としたひびきをもって聞かれた。一道を究めた人の稚氣、或は純粹さのせいであろうか。

スライドの上映中どうしたはずみか、大きな音をたて、映写機が倒れた。映写係の阪本先生があわて、拾いあげたが、電球が切れていた。間もなく球がとりかえられて映写は続行したが、あの瞬間、先生の母堂阪本徳江女史が、心配そうに阪本先生の手許にそゝがれていた、真剣な御眼ざしが今も私の臉にうかぶ。そういえば私達が会場へついた時、阪本さんは玄関わきで出席者に、一々丁寧に挨拶をされていた。

大賀ハスを広めるだけが目的の「ハスの実会」は、現代まれにみる美しい会である。八十年の大半をハスに捧げた大賀博士の美しさはいまでもない。だが親子相克のおゝい今日、子のよき理解者である阪本さんのお姿も、私には大変美しいものと思えた。

本宮 川湯温泉

「紀州新聞」昭和三十七年二月

二十四・二十五・二十六日掲載

一月十四日午前八時二十分御坊を出た二台の自動車は、十時十分エンジンの音も軽く、富田川に沿う中辺路にかかった。

巽医伯が運転し、新晃商会の石本木四郎君が助手台についたコロナ一九六二年型の座席に、私は今日ばかり

王侯のように深々と腰をおろし、移りゆく窓外の冬景色に見とれていた。小山裕誉氏がハンドルを持った後続車には、山中不艸夫妻、中井千代松氏、寺井御坊中学教諭が乗っている。口やかましい連中のことだから、口でもない馬鹿噺がはずんでいるに違いない。

岩田王子趾を車中から拝み頭を転じると、川をへだて、市の瀬村が望まれる。一の瀬王子は村の背後の岡に鎮座されていると聞く。ここは戦国の昔、竜松城によって威を誇った山本一族の根拠地である。天正十三年（一五八五年）春、秀吉の紀州南征軍が紀南に侵攻するや、日高が落ちのびた湯川直春や、田辺の目良淡路の守、近露の横矢六郎と連合して、しばく豊臣勢を悩ましたと伝えられる。

富田川と山あいとの間の小さな村々が、次々と車窓に映っては消えて中辺路町真砂に着いた。街道に沿うて面積十数坪、高さ数米とおぼしき小丘があり、ここに一字の小堂が営まれ、境内に俗に清姫の墓と称する板碑が祀られている。芝口常楠先生の「葵羊園叢考」所載の「紀州板碑」によれば、清姫の墓というのは、とんでもないでたらめで、

□勝禅尼一周忌相当逆修奉石塔造立

と四行で書き、その行間に「孝子敬白」の字を二行に割書し、下の方には

明徳五年（一三九四年）四月十九日

と二行に記されているという。明徳は今から数えて約五百八十年前に当たり、清姫の名がはじめて現れるのは、それから三百数十年を経た江戸時代の中頃である。

丘を下った私達が傍らの小家の主人をつかまえて、真砂の庄司の話をもちかけると、

庄司の屋敷跡はここから一、二町上手にあつたが、明治二十二年（一八九九年）の水害で、すっかり流された。

と答えた。「真砂の里！」日高生まれの私達にはなじみ深い名前だが、来てみると何の奇もない。「道成寺縁起」の作者も、恐らく真砂とよぶ何かロマンチックな地名に、その詩魂を動かしたのに違いない。



十一時三十分滝尻王子に着いた。熊野九十九王子の中でも特に著名なこの王子社は、岩船川が富田川（岩田川ともいう）に合流するほとりの、清らかな樹立の中にあつた。境内の老樹が一本、第二室戸台風で倒れたままであつたが、散り残った楓の紅葉が美しかった。建仁元年十月十四日（一二〇一）夕刻、熊野御幸の後鳥羽院の一行は、この近くの宿所に入り、社頭で御歌会があつた。

そめし秋をくれぬとたれか岩田川　また浪こゆる山姫の袖

旅　宿　冬　月

滝川のひびきはいそぐ旅の庵を　静かにすぎる冬の月影

二首とも、^{こしやう}扈從していた藤原定家卿の作だが、あまり出来栄えがよくない。この社も明治^{一八八九年}二十二年の水害で流されて、旧社地とかわっている。

一行は神社に近い茶店で昼食をすまし、十一時十五分出発。十一時三十五分中辺路町栗栖川通過、街道の両側に　商店が軒を連ねた細長い町で、学校・町役場・郵便局の新しい建築物が目についた。ちよつと美山村の皆瀬、川原河を思わせるこの辺りの文化、産業の中心地である。

昔、熊野詣の盛んなころ早朝田辺を出た旅人は、ここで一泊したものと聞いたが、もはや古い宿場の面影はみられぬ。

この近くに畏友・富安太郎氏がいる。久しぶりで彼の顔も見たいが、酒豪の彼のことだ、逢うて酒になれば今夜の本宮着はむつかしい。車上遙かに敬意を表するにとどめる。

山は愈々けわしく、谷はますます深くなった。部落と部落の距離が段々遠くなった。自動車にも殆んど出あわぬ。道が次第に急になる。逢坂峠にかかったのである。車外に目をやると千尋の谷だ。切目辻をもう一まわり大きくした規模である。

運転台の巽氏は耳が痛いようだと云う。気圧が違って来たのだと説明したが、万事に鈍感な私は何とも感じぬ。峠の頂上で海拔五五〇^呎、切目辻の四七〇^呎よりも八〇^呎も高く、日高平野をめぐる白馬山脈より五〇^呎高い。まったく大変な処である。

やつと下り坂になった。時に時刻は十一時五十分、途中で本宮発田辺行ききの国鉄バスに出合った。所々に部落と云うよりも、ほんの二、三軒ずつの人家が、猫の額大の地に、しがみつくように、かたまっている。

電灯など無論あるまい、まったくの僻地である。どんな所にでも人が住んでいるのだ。人間の営みの悲しさ、宿命！ふつとそんな柄にもないことが、頭をかすめた。



自動車が急カーブを幾つかまわると、急に視界がひらけた。行く手はるかに、やや広い川が流れ、裕そうな家並の瓦が冬の日に輝いていた。家々の周囲に麦畑がっらなり、平和そのもののような村、これが近露であった。十二時五分を過ぎていた。

ここは「太平記」に見ゆる南朝方の野長瀬一族の根拠地と云い、天正十三年秀吉軍に追われた丸山城主湯川直春が、しばらく身をよせた土豪近露六郎居城の地とも伝える。如何にも戦国土豪の根拠地たるにふさわしい。四方にそばだつ深い山々、その中にひらけた小盆地、要害の地である。そのうちまたけわしい山路になった。三、四百級の峠を上ったり下ったりする。山の木々は伐採して間がないのか割合浅い。山火事で一山の木々が枯死した凄惨な山もあった。相変わらず部落らしい部落は殆んどない。零時五十分大瀬という村をすぎ、やっと人里らしい処へ出たと思うと、湯の峰温泉であった。街道に沿うた狭い山裾に四、五軒の旅館が見えたがそのまま自動車を走らせ、一時四十分待望の本宮町についた。



本宮町は熊野川のほとりにある。明治二十二年の水害で全村流失した上、昭和十四年には大火のため村の三分の二が焼けた。うち続く災難で町の面目が変わったのであろうか、町から受ける感じに古い面影が少ない。私達はまっすぐ町はずれの本宮大社の社頭に自動車をつけた。熊野三山と古くから仰がれた本宮大社、新宮速玉神社、那智大社の首位であるこの社は熊野坐神社(くまのにます神社)が本物である。

本社の創立年代については早くから各説があるが、今の社地は明治二十二年の水害後移ったもので、境内の樹木も若く、鳥居や石灯籠にも古いものはない。それだけに明るく清々しい気分がただよう。社殿は三棟にわかれ、各殿に四柱の神を分祀し奉る所から、熊野三所権現とも熊野十二所権現ともいわれる。

参拝を終えた私は、このちかくに幕末紀州が生んだ世界的な博物学者畔田翠山が、安政六年六月十八日(一八五九)六十九才の高令で、本宮山中で植物採集中急逝された墓碑があることを思い出し、その所在を社務所で尋ねたが、かなり遠い山裾の地と聞いて参詣をあきらめた。

神社を出た私達は熊野川に沿う田圃中の路を、ぶら／＼と旧社地の方へ歩いた。冬とはいえ風がなく日は温かい。近くで川瀬の音がきこえる。旧社地は現社地から数町の川下にあった。杉の樹立が古い昔を偲ばせる。思えば平安朝らしい、上下の信仰を集めた聖地だ。延喜四年(九〇四)宇多法皇にはじまる熊野御幸は、京都から山河七十里を越え、往復一カ月余をかけて、この社頭に額づくために繰り返された。

熊野へ参らんと思へども、徒歩より参れば道遠し。すぐれて山きびし、馬にて参れば苦行ならず。空より参らん羽たべ若王子

有名な「梁塵秘抄」に見ゆる歌謡である。名もなき庶民までも、これ程あこがれた聖地。そこに今わたし達は立っていた。

すでに社地は水害のため上手に移って、社壇には冬枯れの叢だけが残り、音無川は水の涸れた、ただの河原に変わっていた。有為職変は如何ともしがたい。

自動車はやがて本宮町を後にした。今宵の宿舎川湯温泉かめや旅館に小憩して、熊野川を日足に下る。道の右側は奥熊野の山々が雲を呼び、右は熊野川が千古の碧りをたたえる。大津荷、東屋敷をすぎると、川向いに、白亜の棕呂ダムが近代科学の偉容を現わす。

中辺路とちがい流石に自動車が多い。新宮へ本宮間のバスが一日三十往復もあるという。その間を縫うてトラックが走る、ハイヤーが車塵をまいて疾駆する。

午後四時日足の里山本に着いた。一行中、中井千代松氏の令息洵君が、昨年秋十一月に散華した所である。私達は事故現場で自動車を降した。香を焚き、御坊から持って来た二ツの花束を投じた。花束は大きく何時までも川面で孤を描いていた。中井氏の嗚咽の声が折柄の夕風の中に、人々の胸をうった。

弔 歌 一 首

みくまのの日足の川の水底に 逝きし君はも寒からなくに



川湯温泉は本宮町請川から大塔川に沿うて、十五分ほどの上流にある。私達が宿舎かめや旅館に着いたのは、晩冬の余光の明るい時刻であった。西瀬英一著「南紀風物誌」によると、文禄年間（一五九二—一五九五）土地の大庄屋の一族、須崎縫がセキレイの導きで、この温泉を発見したものと云うが、そうした伝承は別として、とにかく湯の峰温泉の発見よりはるかにおそい事は間違いない。

温泉は無色無臭、氣らくに湯漕の中に寝そべって一日の車塵を洗い、夕食にかかる。一、二本の酒が急に旅の疲れをほぐす。窓外は大塔川が清らかに流れ、所々に白い煙をあげている。川原からも湯が湧いているのだ。川湯の名にそむかぬ。

誰かが川湯に来て川の湯を味わねば意味がないと云いだした。若い寺井教諭がタオルを腰に外に出た。南国とは云え一月半ばの夜の外気は冷たい。しばらくすると川原の方で寺井氏の素っ裸になって笑う声が聞こえた。中井氏も仲間に入っているらしい。

こうなると私も勇気が出た。少し酒の酔いも手伝っていかも知れぬ。タオルを肩に川原に出て思い切つて裸になる。流石に寒いながらも一瞬にすぎぬ。次の瞬間にもう川原の湯の中で、よい気分になっていた。

石をつんで河流の侵入をふせいだだけで、湯加減は上々である。時々川底の砂や小石の間から、熱い湯が噴き出して来る。

中天に半月がかかつて湯の村を照らす。部屋へ戻ると土産物売りの少女が来ていた。小学校六年生と云うが、ちようど少女期から処女期にうつろうとする年頃で、表情におこっているような堅さがある。清潔な感じがして好ましい。



一月十五日、早く目が覚めた。不艸宗匠と張りつめた空気の中を、川原に降りて湯に入る。朝食後のひと時村を歩く。冷えると思ったら、大塔川に架かった吊り橋に霜が白かった。橋の袂の共同洗濯場で明るい声はずんでいた。ポンプを押すだけで七十五度の熱湯が、こんくと湧くのだ。

山裾の小堂を訪ねた。薬師堂であった。境内に宝永（一七〇四—一七〇九）の記年のある石灯籠があった。堂の下を通じる道は大塔山（二二二メートル）の山麓にいたり、ここから一日行程という。

昭和三十一年^{（一九五六年）}の晩春、俳人水原秋桜子がここに遊んでいる。一泊した旅館で出した土地の名物「眼張り寿司」のひなびた味のことが、その紀行集「旅馴れて」に詳しい。普通の米飯を漬けた高菜で巻いただけの、風雅なものと言う。不艸氏が宿で聞いたが、季節外れで高菜が得られぬため、口にできなかった。

九時十分、川湯温泉を出る。熊野川沿いに一路新宮に下る。いくつかの小さな村々をすぎると、北山川と熊野川の合流点宮井がみえた。プロペラ船が河原についていた。中辺路街道にくらべると大きな峠はないが、所々目もくらむ断崖があり、崖の下は熊野川がうねっている。

十時十分、新宮市を指呼の地で木材を積んだ三輪車の故障のため、約二十分停車の後、神倉山の麓をこえて十時四十分速玉神社につく。異医伯が懇意な上野宮司の案内で神宝館を見学。昼食を御馳走になり、十二時十分新宮出発、十二時五十分湯川温泉、一時五十分古座着小憩、二時四十分古座出発、二時五十五分串本、三時四十分和深、四時江住、四時三十五分周参見、五時五十分日置町、五時四十分椿温泉、六時二十五分田辺市、天田橋の上から御坊の灯を見たのは七時半であった。—— 完 ——

つばき

「紀州新聞」昭和三十七年三月三日掲載

薔椿の花が咲いた。十四、五年前近くの川岸から、小指大の実生を移したのだが、私の背丈より大きくなった。重なり合った厚い葉かげから、赤い花を覗かせている。

万事に旧式な私は、植物より流行の洋種ものより、雑木、雑草の類にひかれる。とりわけ椿の花、それも八重や咲き分けの凝ったものでなく、やくざな薔椿となると目も鼻もない。季節ごとにこの花を机上に絶やしたことのないのは勿論だが、今年は床へも川島草堂の椿の小品をかけた。

草堂は田辺の日本画家である。子供の頃近所の白壁や土塀へ手当たり次第楽書きをした。父が怒って土間の柱へしぱりつけておくと、泣きじやくりながら足で砂上に猫を描きつゝ寝入ったという。

昨年和歌山の古本屋でこの軸を見つけた私は、絵柄が好きな椿であった上、筆者が御坊ともなじみが深く、値段も馬鹿に安かったので、一も二もなく買いこんだものだ。

昔は椿は武家の庭木として嫌われた。花の散りざまが根首からバサリと落ちるので、首がおちると縁起をかついだわけだが、小百姓の倅の私には余計な心配にすぎぬ。

私が椿を好むのはその花の野暮ったさにある。濃艶極らないといいたいが、その美しさはどことなく田舎臭い、そこが性に合う。もう一つ厚みのある常緑の葉、これがいかにも南国にふさわしい。まだある、椿の実から上質の椿油がとれる。

子供のころ村に「しぼり屋」とよぶ家があった。表に三、四本の椿の太木があり、樹いっぱいに紅い花が咲いた。暗い土間に簡単な締め木があって、農閑期には椿の実を締め木にかけて、椿油をつくっていた。「しぼり屋」へは近在から油を買いに來たり、椿の実と油を交換に來る人が多かった。結構それで生活できた時代であった。だが、「しぼり屋」も早く代が変わった。

椿は平凡な木でどこにでもある。殊に温かい紀州では椿（西牟婁郡及び御坊市）や、椿山（美山村）の地名がある位に多いのだか、これも近年は河川の改修などで、めっきり減ってきた。惜しいことだ。

それにしても椿のような土臭い花を好く物好きは、めったにあるまいと思うていると、これが以外にも椿ブームで、毎年アメリカに出てドルを稼ぐ。元来ムードやブームといえは輕薄なロクでもないことが多いが、こういうブームは歓迎したい。

寒椿 一輪にして 大いなる 素雨

素雨 経済博士、津村秀松は御坊の人である。洛陽の紙価を高らしめた名著「国民経済学原論」上下の外に、数冊の経済学の専門書をはじめ、「社会小景」・「道成寺」・「春秋雑誌」の好随筆集がある。素雨は無類の椿党で、その居「対故山莊」には数十株の椿が妍けんを競うていたが、昭和十四年十二月長逝した。

瓜 溪 石

「紀州新聞」昭和三十七年四月三日掲載

三月十日瓜溪石の展覧会をみてきた。

昨年と一昨年は南部川村、超世寺が会場であったが、今春は南部町公民館でひられ、近在の名石、五十余点がならんで愛石家をよろこばした。

瓜溪石は南部川町西本庄字瓜谷から出る盆石で、西牟婁郡上芳養産の古谷石とほぼ同系に属し、古くから文人墨客に愛賞されてきた。伝えるところによると、天保年間（一八三〇—一八四三）土地の樵が掘り出したのが初めてというから、古谷石にくらべてその歴史はやゝ新しい。藩政時代、田辺藩は古谷、瓜溪両石を御留石として一般人の採掘を厳禁した。谷にはいまも留場という地名が残り、同村には代々石番をした山本家がある。昔はそれ程珍重したものである。

私が瓜溪石を知ったのは郷土史に関心をもつて間もなくであるが、実地に石をみたのはそれよりも少しおそく、南部駅前食堂「梅月」であった。こゝの店の間に素晴らしいものがあつた。私は南部へゆく度に、頂きに白雪を冠つた富士山そっくりの石と、中が凹んで湖をなし、周囲に高峻な山をめぐるした型の石を見たさに、空腹でもないのに、よく「梅月」のうどんを食いによつたものだ。二、三千円なら無理をしてもほしかつたが、どうやらその何倍もかゝりそうなので、ぐずぐずしているうちに見えなくなつた。

瓜溪石はたいてい土中から掘り出す。手鋏と鶴嘴に草鞋がけで、峻しい山を一日中さがしまわつても、よほど幸運でないといふ石は見つからぬ。やつと手にいれても太い木綿針のたばで、十日も二十日も一カ月も二カ月も磨いた上、水蠟樹脂を塗り、さらに台座をつけて仕上げとなる。気の短い現代人には向きそうもない、恐ろしく根気のいる話だが、こうして磨いている中に、朝に一峰が姿をみせ、夕べにそうくと滝が音をたてゝあらわれてくるところに、無常の醍醐味がある。

—山ならで山とぞ見ゆる 谷ならで 谷とぞ見ゆる 山はもよ 五百重に聳え 谷はもよ 百限なせり
神さひて高き山かも 苔むして深き谷かも 其山にしもと生ひ立 その谷にたきちなみぎり 虎もすみ
みずらも住みて あしたには雲もたつらん ゆふべには風も吹くらん 峰つたい七日往くとも 果は
しられさらまし—

いみじくも歌人、海上胤平うたうたとおり、小は掌にかくれるほどの小型のものから、大は数十貫にあまる巨石にいたるまで、一個の瓜溪石には山あり谷あり滝がかゝり、雲たち風をよんで、その大自然さながらの趣は、いつまで眺めてもあきぬ。

私は一昨年の展覧会で極く小さいのを買い、また西川裕氏と寺本幸吉氏にもいただいたが、昨夏、晴雨、鈴木謙次郎大人からも、見事な瓜溪石を恵投された。

鈴木氏は有名な梅仙翁の嗣子で、石痴と号し、古谷、瓜溪両石を愛すること深く、九十歳を越えた今も、終日石をたのしまれて倦むところがない。昭和十年代「古谷石瑣談^{さだん}」の好著をもつて知友に頒たれたが、昨夏これを再版された。また田辺の目良碧齋に明治二十七年^(一九一四年)「碧齋石譜」の出版あり。昭和三十三年^(一九五八年)九月、梅丘、西川裕氏は「瓜溪石」の一書を出した。このうち西川氏の「瓜溪石」には、私が久しく望んでいた南部川の人、大野朗著「盆石明解」の全文が収められ、写真を挿入して原著のおもかげを示されているのは有難かった。

南部川方面では近年瓜溪石熱がさかんである。石をめぐる幾つかの面白い物語もある。それにしてもこのせち辛い時代に、石ころが好きとは、あきれた話だが、元来風流とは抜けたところがいのである。

大和路の一日

「紀州新聞」 昭和三十七年四月二十八・二十九日掲載

四月十五日、御坊ドライブ会(仮称)の吉野観桜ドライブにすこし厚かましいが山妻と二人で加えてもらった。六時三十分、大浜通りいろは書店前に集合した九台の自動車は、和歌山塩業KK野村吉郎氏を先頭に、野尻齒科医院主敏樹氏、竹田初三いろは書店主、小竹友呉服店小竹氏、北野薬局栄一氏、巽三郎医伯、新晃商会主小山豊氏、新晃商会サービスカーの順で、それぐの家族を乗せて御坊を出発、内原で小谷真一三和漁業KK社長と小松屋化学小林専務の自動車が合流した。

七時二十分新国道沿いの湯浅町、紀文茶屋で小憩した。この茶屋の主人はどこへ行くにも騎馬で出かけるといふ変わり者で、隣接する勝楽寺にある紀文記念碑も、主としてこの人の奔走で建てられたものだが、今度は店の前の広場へ。古い和船を運んで来て御丁寧にも、梵天丸と書いた幡をそえてある。むきになる程のことでもないが驚いた。

九時二十分、船戸大橋を渡った頃から、車窓の右手に龍門山塊(七五七^{トイ})の雄大な容が、春霞の中に見え始

める。

——紀の川筋の交通路にも、特に風光の優れたという所は少なく、私見では背山を越えてからの龍門山塊の威圧感が一番印象的であるが、万葉歌人はもちろん現代歌人でも、この山を詠んだ者は殆んど見かけない有様で（古今集にはこの山中の滝を詠んだ例がただ一つある）、一般的な美の観念から少しかけ離れた存在であつたかも知れない——（「国語と国文学」昭和三十六年六月号）

万葉学者、山田弘道が前掲誌所載の論文「紀川筋の万葉地理の二、三について」に記しているとおり、事実、紀の川下流の風景は平凡だ。紀泉国境の山並みも低い。だがその低い山並みからつづくならかな平野と平野の中に点在する村落は、折からの春光の中に平和そのものである。

馬の背にしてかへり見る春暮れ方の紀伊の国 松原かげに旅人の
すげ笠あまたゆきかひて赤き夕日は橘の 花咲くうへに匂うかな

紀の川、河原、川添をのぼればここは粉河寺 赤き負笈白き笠

巡礼の子に打ち交じり 西国三番「ちちははのめぐみも深き粉河寺」
和讃を高く誦するかな。

……

昔読んだ有本芳水の「粉河寺」を思い出した。そこいらの畦道を負笈姿の巡礼が西国していそうな気がする。粉河寺の森も気づかぬうちにすぎた。

十時二十分、予定より早く高野口についた。小休止、私は自動車を出て川むかいの九度山町から慈尊院村あたりを眺めた。有吉佐和子の小説「紀ノ川」で馴染みの地である。

——早春の九度山は、朝靄に包まれていた。花は左手に祖母の強い力を感じながら黙って石段を上りきった。

小説「紀ノ川」は九度山の名門、木本家の一人娘花が、嫁ぎゆく日の朝祖母の豊乃と二人で、慈尊院に詣るところからはじまる。

慈尊院の石段を手を繋ぎあつたまま下りてきた二人を、待っていた人々がとり囲んだ。船出の用意は整えられている。九度山村と慈尊院村は総出で見送りに来ていた。——

花は紀の川を船で下って六十谷の真谷家に嫁いだ。明治三十年代の早春である。花はやがて娘文緒を生み、文緒はまた華子を生む。いわば豊乃・花・華子を通じての、明治、大正、昭和の女性三代史である。作中には明治生まれの私たちに郷愁ふかい岡崎邦輔らしい人物や、三浦男爵・木本主一郎と思われる地方政客も登場し

て面白いが、興味の中心はやはり題名の「紀ノ川」周辺の、四季の風光や習俗、ふんだんに取りいれられた紀州方言であろう。

十時三十分ごろ専売公社橋本工場の表をすぎる。いよく紀和国境にちかい。紀の川兩岸の山々が車窓にせまって、もはや山峡の風景である。万葉の歌で知られた妹山、背山をさがしているうちに、これまでの舗装道路がつきた。

紀和国境、国境というには余りに大げさすぎる小さな峠を越すと、もう大和路であった。山桜に交じって咲き遅れた椿の花が咲いていた。十時四十分幅のせまい五条の街路を通り抜けて、右手に折れさらにせまくなつた田舎道にかかる。

気のせいか県境を越えてからの村々のたたずまいが違ってきたような感じがする。紀州路では滅多に見られぬ藁屋根が目につく。大和、河内に多いタカ^高へ造りの家々が、文化の古さを思わせる。自動車はしばらく吉野川——もうこのあたりでは紀の川は吉野川の名でよばれる——の支流ぞいに走って、やがて吉野河畔にでた。ややこしい道を迷いもせず走るものだと感心したが、後で聞くと大和出身の巽三郎氏が、高野口から先導したのだと云う。

十一時二十分、大淀を通過した。十一時三十分、近鉄六田駅についた。待望の吉野の山はもう近い。ところが自動車は停車したまま一向動く気配はない。おびただしい自動車の群れである。連絡係がいそがしく飛びまわっている。前方に百台ちかい自動車がつかえているという。約三十分もたったであろうか方向転換の指令がでて、もとの道をひきかえす。急に目的地を変更したのである。

思えば御坊を出発して五時間、百五十軒の山河をたどり目指す吉野山を指呼の間に望みながら、遺憾やる方ないがこの情勢では外に方法はない。——これはとばかり自動車の吉野山——では下手な洒落にもならぬ。

自動車は低い山峡の道を橿原神宮目指して走りつづける。途中私たちが今あきらめて来たばかりの吉野山に行く自動車が、後から後へとすれ違ふ。まったく自動車の洪水である。そしてその殆んどが自家用車である。誰かが勘定したところ七百台位はあったろうと云う。こうなると池田首相ではないが、日本の経済力も相当なものだなど、妙なところで妙なことに感心する。おかげでスピードはさっぱり出ない。

零時三十分橿原神宮についた。昨年一月曾遊の地である。好天に恵まれて参拝客が多い。直ぐ弁当が配られて境内の樹陰で昼食をとる。

まことに勿体ないはなしだが、私はどうも神社と云うと親しみ難い気がする。あまりに森厳すぎるのかも知れぬ。だが、橿原神宮の神苑はよい。昭和^{一九三五年}十年代の初めごろ、紀元二千六百年記念として、この神宮が造営さ

れた時、全国各地から献上した樹木は、二十年近い歳月を経てすく／＼とのびた。あと二十年、三十年すれば見事な林相をなすであろう。食後、ここから近い橿原考古館と久米寺を訪ねるつもりで、巽三郎氏と同行の南部中学教諭山本賢氏とぶら／＼出かけたのだが、途中で所要が生じて行けなくなった。仕方ないので山妻と土産物屋で「はにわ」の模型を買って引きあげた。

(昭和三七・四・一九夜稿)

ある伝説

「紀州新聞」昭和三十七年五月一日掲載

近く両陛下がお揃いで晩春の紀州路をお訪ねになる。陛下は大正^(一九二三年)十二年摂政官時代と、昭和^(一九二九年)四年軍艦長門でお越しになったのと、昭和^(一九四七年)二十二年六月南^新大地震の被害状況その他を御視察においでたのと、和歌山県へは四回目の行幸である。

昭和四年の御巡幸のときは、まだ南方熊楠翁も元気で、田辺湾内の神島へ陛下を御案内し、さらに御召艦長門に伺候して、日高郡川上村(いまの美山村)産の菌、西印度の菌と地衣その他について、約三十分間にわたり御進講申し上げた上、日本産粘菌百十点を献上した。

その広い見聞と古今に通じる学識では博士以上と云われながら、生涯野人学者として終始した南方翁の人為(ひととなり)は、陛下も余程お気に入りられたとみえ、幣原内閣の蔵相でミナカタ、ソサイテイの代表者でもあった渋沢敬三が大臣をやめてのち、陛下にお目にかかった際、

「南方は惜しいことをした」

としみじみお話になり、つづいて

「南方は面白いことがあった。長門へきたとき、田辺附近の珍しい植物をもってきたが、普通献上品といえば桐の箱か何かに入れてくるのだが、南方はキャラメルのボール箱に入れてきた。あれでよいのではないか」

と微笑されたと伝える。

また昭和二十二年の紀南御視察のときも、和歌山の行在所へお伺いした元藩主家の当主、参議院議員徳川頼貞に

「植物、粘菌学の権威南方熊楠が死んだのは惜しい」

とおもらしになったと云う。陛下はたゞ南方翁の学識だけでなく、その天真爛漫にして、自然児にも似た人柄を、深くおよろこびになったのに相違ない。

これも昭和四年の行幸の折の話だ。

このとき陛下は明治二十二年九月十六日夜、トルコの軍艦エルトゥールル号が遭難した樫野崎の記念碑をお弔いのため、大島をお訪になったが、それに先立ち当時エルトゥールル号の乗組員の救助に活躍した八十三才になる漁師、堅田文左衛門を村長がつれて長門にお伺いした。唯一の生存者である文左衛門から、当年の模様をお伝えしておけば、現場を御覧になる陛下の御参考にもなろうかという県庁あたりの計らいであつたらしい。しかし文左衛門がいくら確かでも年令が年令であり、無学な漁師のことでもあり、村長が話の順序や言葉づかいまで、十分仕込んでおいたのはいうまでもない。

エルトゥールル号の沈没した日は、九月半ば過ぎとはいえ、まだ残暑がきびしかった。救助作業をしていると額に湧く汗が目にしみこんで、思うように仿けぬのでハチマキしてと申しあげると陛下は

「ハチマキとは何か？」

とお尋ねになった。無骨者の漁師の口でハチマキを説明するのはむずかしい。言葉につまった文左衛門はとっさの知恵で、ふところから手拭いを取り出しざま、陛下の御前でそれを振りまわすと、サツとばかりハチマキをしてお目にかけた。陛下も驚かれたに違いない。

それだけならまだよい。しかし文左衛門はあとの話に力が入り、身ぶり手ぶりでお話を申しあげている間に、すっかり頭のハチマキを忘れて、いつまでも取ろうとしない。村長は冷汗びつしよりだが何としてよいやら思案も及ばぬうちに、どうやら話も一段落してやれやれと思っていると、陛下は

「それは一体いつのことか」

と御下問になった。八十三才の文左衛門にとっては、たゞ、おのれのまだ若く元気だった時とのみ覚えるだけで、年代の点は漠然としている。

「なあに、お前らのまだ生まれん前のことじゃわい」

と至極あっさり言つてのけたのには、村長も青くなつた。時代が時代である。村長は恐懼きょうくおくところ知らず、恐る恐る伺うと、陛下はにこにことしておられた。

これらの話は雑賀貞次郎編「田辺市誌」と、佐藤春夫著「近代神仙譚」から抜いた。もつとも佐藤春夫は文左衛門が陛下にトルコ艦遭難者救助の御説明を申しあげたのは事実だが、いくら世間知らずの漁師とはいえ、陛下の前でハチマキをしたの、陛下をお前呼ばわりしたのというのは、尾おひれ鰭も甚だしい伝説だと断っている。

最近やゝもすると陛下を雲の上にへだて奉り、再び神格化せんとする動きがあるやに感じられる。これらの徒輩にたいし、南方翁の話や文左衛門の伝説は、一服の清涼剤になろうか。

螢

「紀州新聞」昭和三十七年七月三日掲載

いつの間にか螢の季節がすぎた。

梅雨晴れの一晩、二、三匹の螢が弱い光を放ちながら飛んでいるのを見たのが、今年の螢を見た最初のまた最後でもあった。

私の家は日高川から三、四町のところにある。日高川と茅屋の間を、かなり大きな灌漑用の水路が二筋流れている上、周囲は一帯の水田である。螢がおゝかつたのも道理である。

昔というほどではない。つい十年ばかり前までは螢が沢山あったものだ。毎年苗代の小苗が五、六寸にのびたころから、田植え前後にかけて、この可憐な虫は夜毎に水田の上や、二筋の川の流れにそうて、それこそ足もとが明るむほど飛び交わした。ことに雨もよいの宵などは、乱れ飛ぶ螢がさなが絵のようであった。

農村の夕餉は今も昔もおそい。村中の子供たちは夕飯のすむのを待ちかねて、団扇や箒をもって螢を追いまわした。螢は敏感に人の気配を感じると、子供たちの手のとどかぬ川の中ほどへ逃げた。子供たちは躍起となつて、

ホーホー螢こい そっちの水は苦いぞ

こっちの水は甘いぞ ホーホー螢こい

とうたうのだが、螢はますます遠く逃げてゆく。やゝ大きくなってからは、手ごろな竹竿のさきに笹をゆわえ、それで捕らえた。

私の家はそのころから貧しかった。一個十銭か十五銭の螢籠も買ってもらえなかった。捕らえた螢は有り合わせの紙に、大事に包んで持ち帰った。螢は紙の中で青白く光ったり消えたりした。子供の私たちはそれを螢が呼吸するというものだ。どうかすると螢は紙のすき間からぬけだして、肩や背中をはいまわった。

螢には一種独特の臭気がある。それが苗代の土の匂いととけあって、いかにも初夏の宵らしいムードをかもしだした。今でも苗代の傍らを通して土の香を嗅ぐと、何の連絡もなく、ふと螢狩りに夢中になった少年の日

を思い出す。

現代の子供たちは螢狩りをしようにも相手の螢がないのだから致し方はない。夕飯がすめばテレビに囁りついているのが、おゝいのではないかと思う。それがよいことか悪いことか私にはわかりかねる。たゞあまり幸福なことではあるまいと思うのである。

日高地方で螢の多かったのは私の村だけではない。土生川や西川、江川、その他の谷々のほとり、流れのあるところは何処にも沢山あった。

ことに千匹山の麓の金屋の淵が螢の名所であった。季節には藤井や近村の旦那集が、川船に美形と酒肴をつみこんで、螢狩りを楽しんだものだと聞いている。のんびりした結構な御時世であった。今ならいくら金があつても、たちまち新聞種になつて、勝手な真似をするなど世間から叱られるであらう。思えば日本人もケチ臭くなつたものだ。

この間、何の気なく紀藩の国学者で歌人として有名な加納諸平の歌集「柿園詠草」を開いてみると

井溪とから名(唐名)つきたるは、善水が弟なり。それがもとより螢をあまた籠かごにいれて、おこせつ。さるは、かの山里の江川にいと多ければ、わが学の窓をおどろかさむとてなるべし。又のとしの春善水の
とひきし時弟のもとへ

青柳の枝川のそひに斉種(ゆだね)まき 苗とりいそげほたるはや見む
とあるのが眼についた。

善水は江川組大庄屋をつとめ地方切つての名門であり、諸平門下の錚々そうそうであつたことは断るまでもない。その善水の弟、井溪が師、諸平大人のもとへ螢をおくつた。翌春たずねてきた善水に、前年おくられた螢のことを思い出して詠んだのがこの一首である。

初夏の風物詩ともいふべき螢が、目にみえて少なくなりだしたのは、こゝ十年ほどの間である。無論、農薬の散布が原因であるが、それが昭和二十八年一九五三年の水害で決定的な打撃を受けた。それまではまだチラホラしていたのがすっかり姿を消した。水害の泥水が幼虫を殺し、用水路のコンクリート化は、この愛すべき幼虫の住処を奪つたのである。

まったく惜しいことである。と云つたところで、今更農薬を使わぬ訳にもゆかぬ。そうすると、やはり私たちはよい時期に育つたものだといふ外はない。

お盆におもう

「紀州新聞」昭和三十七年八月三日掲載

今年もお盆が近づいてきた。

お盆の十三日には遠い御先祖様から新仏まで、久しぶりで懐かしい子や孫たちの住む我が家に帰って、十六日の早朝には再び西方十萬億土のお浄土に旅立って行くのだという。

仏家や民俗学者はお盆の起源をいろいろと説いているが、田舎育ちの私には、そうしたむずかしい詮索よりも、まず思い出すのは子供のころにすごした、十三日宵の精霊迎えや十六日早朝の精霊おくりのことである。

先月のこの欄にも書いたことが、茅屋のすぐ側を美しい小川が流れている。お盆の十三日の夕刻になると、川沿いの家々では家内中が流れの傍で続松（たいまつ）を燃やし、鉦をたゞき称名念仏して今は亡き人々を迎える。普段は汗と垢でよれよれの筒袖を着ていた子供達も、この日ばかりは糊のきいた浴衣を着せてもらい、迎え火の仲間に加わった。

かざり火が夜空と澄んだ水に一しきり映えすると、やがて燃え尽きて夕闇に燃えつきて夕闇につまられる。大人達は家々へ引きあげてゆくが、子供達は今度は小さな盆提灯をともして、一斉に村の街道まで仏を迎えにく。

お提灯で迎えましょ。おそけりやお駕籠で迎えましょ。

子供たちのうたう声が静かな闇の中で聞こえ、村道のあちこちで「ほおずき提灯」の赤い灯火がゆれた。無論そのころは自動三輪車もオートバイもなかった。道端の草木は土煙りで汚れることなく、夜露にしつとりとぬれていた。子供達の中には小ざかしく団扇を用意して、他人の提灯の灯を消してまわる悪戯者や、ぼんやりして大事な提灯を焼いて泣き出すもので賑わった。思えばのどかな時代であった。

今の時代の子供に、うっかり死んだ人が帰ってくるなどと云えば、そんな馬鹿なことを——と、その非科学性を笑われるのが、おちかも知れぬ。けれども私たちの子供の頃は、亡くなった祖父や祖母が、本当に川の流れてそうて遠いあの世から、ひよつくり帰ってくるものだと思えたものた。

私の家は代々の浄土真宗徒である。俗にいう「門徒もの知らず」で一心一向に念仏するほか、一切の形式的な念仏信仰行事にかゝらずらわれないのが立て前であった。従ってお盆がきても精霊迎えの続松（たいまつ）も焚かねば、精霊棚の設けもせず、精霊流しもしないのだが、これは子供としては何か物足りなかった。煎じ詰めるとそれはそれで立派な見識に違いないが、そんなことが子供にわかう筈がない。幼稚な話であるが下凡の私たちにとつ

ては、やはり或程度の形式的な行事のある方が、仏心に導かれる機縁になりやすいような気がする。

お盆月のせいで急に抹香臭い話を持ち出すわけではないが、考えてみれば人の世ほどはかなきはない。朝の紅顔はたちまち夕べの白骨となる。まったく老幼不定の感がふかい。現に毎年のお盆ごとに親しかった幾人か、きまって新仏となっている。南紀郷土学会の長老であった高尾英吉氏、瘦軀鶴を思わせた和田喜久男氏、壯者をしのぐ程お元気だった神田耕一郎翁。みんなこの二、三年に他界された人々であるが、今年は思いがけないことに谷口秀一氏が急逝されている。

谷口氏は紀州犬と刀剣にすぐれた眼識をもっていたが、その一種独特の風貌は「谷やん」の愛称で、おゝくの人々に親しまれていた。十年ばかり前、県文化財委員の会合が和歌山市の紀の国荘であったとき以来の交友であった。私の勤めている専売公社へも終始見えて、刀の話、「つば」の話、画の話をして帰るのが常であった。

「谷やん」はいろんな骨董品を、引きまわして来るのが上手であった。新しく品物が入ると、決まって見んに来いと誘いに来た。私は谷口氏のおかげで、紀州物の書画に対する眼を大分開かれた。すゝめられて南紀男山などを二、三手に入れたこともある。無論適当に儲けてはいたが、とにかくこういう方面に重宝な存在であった。

亡くなる二日ばかり前の朝、町でひょっくり出逢った。「お茶を飲もう」とさそわれて、喫茶店でしばらく喋った。高血圧で悩まされていた谷口氏は、このときもミルクをすゝって我慢していたのが今も瞼の裏にある。

谷口氏は肥満体であったので夏はつらかったらしい。絶えず口を少し開けて喘いでいた。遺族の方は既に他所へ移られたと聞くが、谷口氏にとつては御坊は馴染みふかい町である。盆の十三日には例によつて、口を少しあけて喘ぎ喘ぎ新仏として帰って来るに違いない。私は谷口氏がヒイキにしていた喫茶店へでも出かけて、一人でコーヒーを飲みながら故人を偲ぼうと思う。

虫のよゝ話

「紀州新聞」昭和三十七年九月三日掲載

「日高郡誌」を見ると「大正二年三月、日高郡会議事堂を利用して、御坊町にはじめての郡立図書館ができた。南部町に分館があつて、別に巡回文庫の設けもある。毎年郡費で新刊書を買入れ、大正十年三月現在で

は蔵書数六千二百四十一冊、価格にして六千六百十一円に達し、閲覧人員は大正八年に一日平均三十二人、大正九年は同じく三十九人であった」との記事がある。

私が郡立図書館の蔵書を借覧するようになったのは、何時ごろのことかはつきり覚えぬが、たぶん二十才前後、昭和^{一九二八年}三、四年^{一九二九年}ごろではなかったかと記憶する。今、日高地方事務所の大會議室になっている。当時の郡會議事堂の壁間に、十数個の大きな書棚がはめ込まれていた。どんな本があつて、どんな本を借りだしたかも、あらかた忘れてしまったが、「紀伊続風土記」や吉田東悟博士の「大日本地名辞書」の豪華な背皮の金文字が、書棚の硝子戸ごしに光っていたのを思い出す。

総じて内容の堅い本がおおく、文学書などは数えるほどしかなかったような気がする。私はその数少ない文学書のうちから、元版の漱石全集を借り出しては「彼岸過まで」や「行人」を読みふけた。また田中花袋の「再び草の野に」と題した小説に深い感銘を受けた。さみしい田舎へ鉄道がついて、駅前を中心に小料理屋や商店が建ちならんで村が栄える。やがてその鉄道が廃線になって、村は再び草深い原野にかえるという単純なできごとを、この作者独特の無器用な筆で書いたものだが、誰もが一度は遭遇する「人生とは？」という途方もない問題に、年令相応の蒼白いなやみをつづけていた折柄だけに、妙に心をうったものである。

そのころ今御坊市の土木課長をしている田淵佐一郎氏が、司書のような仕事をしていた。本を借り出しに行くと、若かりし田淵課長は、一束ほどもある書籍の鍵をならしながら本を出し入れした。

さて斯様にして大正二年に設立された日高郡立図書館も、大正十一年郡制廃止によってその蔵書を御坊町に譲渡、幾変転を重ねて現代に及んでいるのであるが、この間には台風や戦争や水害があつて、郡立図書館時代の蔵書は殆んどあるまい。今の御坊図書館では災害には一たまりもない状態である。日高々校の図書館にしても危ない。

こうなると御坊市とはいわぬ。日高郡として耐震、耐火、水害の心配のない図書館か収蔵庫の一つ位はほしい。私などの蔵書はもとより物の数ではないが、それでも日高地方としては遺しておきたい物がないではない。しかし今の御坊図書館の建造物では寄贈するに二の足をふむ。勢い私が死ねば古本屋にでも売り払って、他郷の愛書家の手にゆだねるのが、まだしも一番安全な保存法かと考える。さみしい限りである。

こゝで私は極めて虫のよい空想をする。それは目下建築中の天理教湯川分教会別館の一部を、郷土室として解放して貰えないかということである。鉄筋建築の別館のことである。地震と火事の心配はまずない。七・一八水害でさえ、水は床上に達しなかったのだからこの点も安心できる。交通も至便の位置にある。この一室が開放されるなら、私どもの手もとにある貧しい郷土資料は、一切あげて提供してもよい。一人がかくすれば恐

らくこれに続く人が現れるに違いない。

こうなれば天理教湯川分教会は県下における郷土資料の一宝庫となり、地方文化に寄与する恩恵は、蓋し測りがたいものがあるろう。のみならず宗教拡張の一助ともなるろう。周知のとおり奈良県天理市布留にある天理参考館や天理図書館は、その規模の大きさと収蔵品の豊富さ、ことに民俗資料のコレクションとしては、わが国第一の称がある。無論、地方と中央、本部と分教会の相違はあるが、やり方によっては分教会は分教会なりの効果を挙げ得るに違いない。他人の懐をあてにするような虫のよい話だが、一考を煩わしたい。

馴れ鮓

「紀州新聞」昭和三十七年十月二日掲載

二、三日前のことである。少しおそい夕食の後、机に向かってぼんやりしていると、静かな秋の夜の空気を渡って、祭囃しの笛と太鼓の音が聞こえてきた。近くの村で獅子舞の稽古がはじまったのである。

ツイストにうつゝを抜かし、即席ラーメンに舌鼓をうつ当節の若い人々が、古臭い祭囃しや馴れ鮓に魅力を感じないのは無理もないが、明治生まれの私たちは、例え時代おくれと云われても、やはりそれらのものに、そこはかとなない郷愁を覚えるのである。

一体お祭りの催物が今のように整ったのは、長い国内戦がやんで貧しいながらも庶民生活に、いくらかゆとりのできた江戸時代のことではないかと思われる。

それにしてもお目出度い筈の祭礼の歌曲なのに、一抹の哀れさが流れているのは如何したことであろうか。笛や太鼓の音にしても洋楽のような、底ぬけの明るさや荘重さが乏しい。無論それには日本人の骨身にしみこんだ仏教的無常観の影響もあるうが、それよりも表面は土農工商とおだてあげ、「胡麻と百姓は何とやら」といい、「生かさぬよう、殺さぬよう」にと、久しく痛めつけられてきた私たち父祖の、やるせない溜息が自ら歌の調べとなり、笛や太鼓の音に滲みこんでいるのではないかと思うのである。

お祭り馴れ鮓が妙なところへ外れた。「あ奴少し赤い」など云われぬうちに本筋にもどらう。いつであったか大阪朝日新聞の和歌山版が紀州風物詩を連載した時、「馴れ鮓」がとりあげられた。

有名な紀州の南画家桑山玉州が京都の池大雅を訪ねた際、手土産に馴れ鮓を贈った。大雅堂は初め一寸顔をしかめながら口にしたが、やがて咽喉を鳴らしてこのいみじき風味をよろこんだ。

と云うのである。

元来「馴れ鮓」は海草、有田、日高と紀州中部に限られ、紀北や熊野地方では行われぬと聞いていたが、最近読みかえした佐藤春夫の随想集「散人偶記」には、氏は少年時代から馴れ鮓党で、東京へ出てからも季節には毎年、桶のまま郷里から送らして、ほのかな故郷の味を懐かしむとあり、その製法まで詳説しているのが目についた。尤も氏の郷里熊野地方では厳冬にこれを作るとあるから、そこに違いのあるほかは、製法は日高地方と全く同じである。

私はこれまでも馴れ鮓が祭礼の食膳に取り入れられた時期や由来について、屢々質問をうけたのみならず、私自身もこの特異な食品には少なからぬ関心を持っているのだが、これはどの国でも同じことで、歴史というものは將軍や英雄の事蹟には馬鹿に詳しいくせに、肝心の庶民生活には甚だ冷淡である。況んや紀州日高の何某家で、いつから祭礼に馴れ鮓を作ったかなどは、どんな史書にも記されてはいない。

そんな訳で私は紀州風物詩の馴れ鮓を読むや、早速、筆者雑賀紀光氏にその出典を問うた。もしやそんな処から何らかの手掛かりが得られるのではないかと考えたからである。折返し雑賀氏から

あの記事は「和歌山文化」第一集の松本朱像氏筆「和歌山名物」を孫引きした。出典は同氏に照会の上お知らせする。

旨の返事があつた。つづいて松本氏から

馴れ鮓と池大雅の漸、三十数年前の青年時代、誰かに聞いたか何かで読んだとは覚えているが、それが誰であつたか、又どの本であつたか思い出せぬ。

という意味の葉書がとどいた。この上は自分で大雅や玉州の詳伝を調べる外はないが、今の私には一寸その暇は得られそうもなく、この問題はそれきりになっている。しかしこれも祭礼の諸芸と同じことで、庶民生活が少しずつ豊かになった江戸時代を、あまり遠く出ずるまいと考えている。

ところで馴れ鮓を作るのは紀州だけではない。滋賀県の鮒鮓、金沢の蕪鮓、大和の鮎鮓、北海道の鮭鮓など皆このたぐいという。馴れ鮓の歴史は意外に古く、角川新書、篠田統著「米と日本人」によると、その発祥地は東南アジアで、それが西南支那―中支那―北九州と渡ってきたらしい。そして我が国の信頼すべき文献に初めて鮓が登場するのは、養老令(七一八)ついで正倉院文書のうち但馬国正税帳(天平九年(七三七))、新撰字鏡(八九九―九〇〇)、延喜式(九三〇)の順になるというのである。

無論、その時代の馴れ鮓は今のように白米で作られていないから、風味が今のものとは大分相違があつたことは断るもない。それにしてもこの延喜式の鮓の材料に、紀伊として鮎が記されているのは当然として、猪、

鹿があるというのは一寸おもしろい。

石仏巡礼

「紀州新聞」昭和三十七年十一月三日掲載

にわかに誘いをうけて、由良町網代の石仏を拝んできた。勤め先を小一時間早引きして御坊を出たのは十月十八日の午後四時を少し回っていた。巽三郎医伯と小山豊氏それに私の三人であった。

自動車の日高町池田にかゝると、村はずれに奴太鼓がかつぎ出されていた。このあたりの裏祭であった。いずこも同じで若い人が少ないとみえ、奴仲間には中年の男子がまじっていた。由良峠の九合目あたりの路傍に、秋萩におゝわれて徳本上人の名号碑があった。六十糶ばかりの長い自然石に、見覚えのある南無阿弥陀仏の文字が刻まれていた。

網代の集落は東西に四筋の道路が走っている。山手の道路が尤も古く、土地が拓けるに従い、海岸べりへ次々に新しい道が作られたのである。私たちが訪ねる石仏はその一番山際の古道に沿うた民家の裏庭に、ひっそりと祀られていた。

高さ約四十糶、久しく風雨にさらされ、最早その尊容さえさだかではないが、おびたゞしく奉納されているよだれかけは、里人の信仰の篤いことを物語っていた。この石仏は一時近くの山に遷されていたが、里に出たいとお告げがあつて、再びこゝへお迎えした。夜毎に村をお巡りになり火の用心をされるので、網代は昔から火事を出したことはない。昭和二十一年暮れの南海道の地震の直前、信心ふかいある娘の夢枕に立って、金の御手をさしのべてその娘をおこされた。人のよさそうなこの家の主夫妻が、こんな伝説めいた話をした。

この石仏は多分江戸時代中期につくられた地藏菩薩像と思われるが、私には確かなことはわからぬ。外に数基の五輪塔や宝篋印塔の塔身もあったが、私はさき程からその中の一つに強くひかれた。一見宝篋印塔の相輪の残欠に似ているが、それにしておかしい点がある。とつつ、おいつ考えた末とりあげると、巽医伯が「清水さん、あれだナ」と、にやりと笑った。

巽医伯が特に私を名ざして笑ったのは、かねがね私が日高地方の性神に、なみなみならぬ関心を抱いているのを知っているためである。縄文時代の奇怪な男女、土偶や性器を露わにした埴輪をもち出すまでもなく、性器を御神体として祀ったところは各地にある。しかしどうしたことか和歌山県、ことに日高地方ではほとんど

見かけないのである。もっとも余り大きな声ではいえぬが、私は数年前郡内でも歴とした某社で、自然石の陰陽物を祀っているのを拝んではいるが、他の地方に見られるようなもつと人工的なそれが、ありそうなものと望むこと久しかったのである。それがはからずも今日こゝでめぐりあつたのである。

こゝで見た性神は長さ十四糎、直径八糎から六糎、円筒形の砂岩で上部に鉢線を刻んでいる。明らかに男根とまとめられるが、形はあまり写実的ではない。いつごろ作られ、どうして此処にまぎれこんだのか等は一切不明ながら、とにかく待望の性神を発見したよろこびは大きかった。

私たちは再び自動車を走らせて、由良町江の駒の専福寺を訪ねた。古い宝篋印塔があると聞いていたからであつた。宝篋印塔は木立の多い寺の墓地にあつた。すでに相輪が失われ、代わりに五輪塔の空輪をのせていた。こじんまりした型が美しかった。苔むした台座には応永三十年二月二十七日の文字がみられたほか、願文も願主の名も風化のために消えていた。

今日知られる専福寺は、寛永元年十二月八日僧明道の開基と伝えられるから、宝篋印塔の応永三十年とは二百年の隔たりがある。専福寺の創設以前他宗の寺院があつたか、他処から移したとより見るほかはないが、いずれにしても日高地方の古碑として珍重すべきものである。

寺を辞した私たちは夕闇せまる江の駒を出て帰路についた。港は小波一つなかった。横浜、阿戸と海岸沿いに柏に向かった。新しい道である。自動車の右手に港町の灯火と、蟻島の無人灯台の灯がかゞやいていた。

蟻島の向かいに黒く重ね山が見えた。麓に糸谷港の灯火が、ちょうど満潮であろうか、ふくれ上がった海面に瞬いていた。糸谷港にはかつて平佐楼、その他があつて、脂粉の香たゞよう華やかな時代があつた。おゝくは紀州沖を上下する船頭仲間が相手であつたが、若かりし私は由良港を船で渡り、小半日をここで遊んだ無軌道な日のあつたのを、ほろ苦く思い出した。

親子船かへ金なし船か 糸谷港をみて通る

当時船乗仲間にこんな唄がうたわれたと、松本芳夫編「熊野民謡集」——昭和二年刊にある。私の石仏巡礼は性神の発見にはじまって、遊郭の思い出に終わった。人柄のせいであろう。

蜘蛛の糸はろうておがむ石仏 筆者

亥の子石

「紀州新聞」昭和三十七年十二月三日掲載

めつきり寒さが加わった。この冬の厳しさが思いやられる。意気地のない話だが、人一倍寒がりの私はもう火燵こたつを使っている。

文久生二八六まれ六三年の私の祖母が在世のころ、わが家では亥の子の日、火燵をとり出すのが定りであった。この夜、火燵の初開きをすれば火難がないと、また真面目に信じられていたのである。「広辞苑」を見ると

「江戸時代にはこの日から火燵を開いた」

とあって、この習俗が広く行われていたことが知られる。しかし今はそんな俗信どころでなく、亥の子さえ忘れられつゝある。

亥の子は旧暦十月亥の日の農村行事である。室町時代以降に出てくるが、由来が明らかでない。恐らく十月満月の日を中心とする田の神への感謝祭が、その起源らしいというのが民俗学者の説である。

私の少年時代であった大正五一九一六、六年一九一七ごろ、亥の子の日は小豆入りの握り飯をつくり、平年は十二個、閏年には十三個を一升桝に入れて鼠不入に供えた。丁寧な家では餅もついた。昭和七一九三二年にできた「野口村誌」、昭和九年の「志賀村誌」、昭和十二年の「城西郷土誌」にも、それぞれ同様行事の記載がある。また昭和十三一九三八、十四一九三九、十九一九四四、二十年の「旧矢田村の民俗を調べた節も、亥の子の古習はかなり根強く遺っていたが、それでも明治、大正の頃にくらべると、よほど省略化されていた。当時の亥の子の風景を「日高郡誌」にもとめると

十月初亥の日が一番亥の子で百姓の亥の子であった。家ごとに握飯をこしらえ、一升桝に入れて亥の神を祭った。また餅をつく家もあった。子供達は握飯や餅をもらうために、藁包みを作って家々を回り、「今年の亥の子はおめでたい亥の子で……」など地をうちながら歌うたが、この風は近年俄におとろえた。南部川辺では「祝いましやう。祝いめでたの若松様は枝も栄ゆる、えつとえ、祝うとくれ」と歌い、日高川地方では「亥の子、亥の子、めでたい亥の子、祝うとくれぬ家は箸で家たてゝ」と歌い歩いた。名田や松原辺では少年達が小さい紙袋をもつて「亥の子祝つておくれ」と菓子をもらい歩くところあり芝口常楠先生の御記憶では、そのため各戸では「亥の子菓子」と称して、特に安い駄菓子を用意したという。何れにしてもこうした野趣ゆたかな亥の子風景は、私の子供時代には、もはや姿を消していた。

もつとも先日聞いたことだが中津芳太郎氏は小学生時代、亥の子の蜜柑や菓子をもらいに回り、先生に禁止されたといふ、林松二氏や高野光男氏は子供のころ、年上の少年達が歌い囃しながら藁包みで地を叩きつゝ、家を回るのを見たという。林、高野の両氏は私より数年の年長であり、中津氏の郷里は私の村より一里ばかり奥地である。

このほかに中山太郎や柳田国男の民俗学辞典には「藁包とは別に亥の子石というのがあって、地堅めの石のような物に幾筋も縄を結びつけ、それで地をつきながら家々を回る」とあり、越後の村土町や丹後の中部、広島県橋島村、同じく英田郡、四国の伊予郡を例にあげている。ところが灯台下暗しの諺のとおり気づかなかつたが、この面白い風習が曾ては、わが日高地方にもあったのである。

実は私もこの間、天性寺で催された「郷土資料と愛蔵品展」における芝口先生の出品「亥の子石」でこのことを初めて知り、甚だ愉快に感じたものである。

先生は御愛蔵の亥の子石は昭和^{九二六年}初年ごろ、当時御坊町で発行されていた「紀南新聞」の主筆、堅田三千穂氏が先生に贈られたもので、もと南部町埴田で使われていたという。この亥の子石は一尺五、六寸で畧々球形をなし、重量は約二貫にちかい。中央部に溝状のかなり深い線を刻み、殆んど自然のまゝの丸い石だが、これはあの地方に多い「おうけつ^願石」の雄形であらうと、野田氏が話していたと思うが、直接に同氏から聞いていないから確かでない。いずれにしてもこの一個の「亥の子石」には、貧しかったであろう江戸時代の埴田の童たちの、哀歎がこめられているかと思うと、これは単に貴重な郷土の民俗資料というばかりでなく、なにかほのぼのとした詩情さえ感じられるのである。

室生寺

「紀州新聞」昭和三十七年十二月十日掲載

川辺町が毎月発行している「広報川辺」関係の人々と、近鉄室生口大野駅へ降りたのは十一月二十八日の、もう昼ちかい時刻であつた。山峡のさびしい駅であつた。駅のホームから石仏で知られた大野寺の一部が見えていた。

駅前を出たバスは直ぐ室生川の溪流にそうて走りだした。車窓から有名な線刻弥勒大磨崖仏の刻まれた屏風浦の大岩壁を眺めただけで、目のあたりに拝むことのできなかったのは心残りであつたが、切りつめた日程ではやむを得ない。

この弥勒大石仏は、室生川に望む三十呎の岩壁を利用して、壺形光背を彫り凹め、内部を平らにみがいて線刻した、十二・七呎(四十尺)にも及ぶ雄大なものであるというが、今は風化のためその尊容さえさだかでないと聞いている。承元元年十月二十二日(一一〇七)後鳥羽上皇の御願により、三輪別所の慶円上人が地鎮を行な

い、笠置にある奈良時代の弥勒石仏に範をとり、翌二年十月二日完成したと伝える。

以前なにかで見たこの石仏の由緒をぼんやり回想しているうちに、バスは杉木立の中を通り櫟林をぬけ、山裾の径を橋を渡ったり、またもとの山際へ戻りながら、次第に室生の溪谷をわけのぼった。伊勢湾台風でうけた傷痕がまだ所々に残り、その復旧工事であろうか、河原で働いている人の姿もみられた。

やがてバスは室生の村はずれに私たちをおろすと、再び山峡の径を奥地の方へ消えた。大野駅から二十分余りの道であった。街道に沿った数軒の土産物屋は、季節のせいかわひっそりとしていた。

室生川にかかった太鼓橋を渡ると、室生寺の小やかな門の前にでた。黒い杉の木立と、その間を点綴する季節には少し遅い境内の紅葉が、室生川に影を映していた。時雨でしつとりとぬれた山内は森閑としていた。寺僧に導かれて行く諸堂への径には深山石楠花がおおかった。花期のあでやかさか偲ばれる。苔むした長い石段にかかる手前で、仁王堂再建工事がはじまっていた。総樺造り重層のこの仁王門は、昭和（一九六三年）三十八年竣工、総工費千四百万円の予定であるという。

私たちはまず弥勒堂に詣でた。本尊弥勒菩薩像は、御丈け三尺余の白檀一木造りで、唇にはうすく朱を入れていると聞いたが、電灯も蛍光灯もない堂内では確かめる術もない。しかしそのしなやかな胴や女性的な線は、まったく愛撫したい程の衝動をおぼえると云えば罰が当たろうか。堂の入口にちかい等身大の釈迦結跏趺坐像は、翻波式衣紋の代表作といい、その貞観彫刻独特の味わいは、古美術にうとい私たちにも、深い感動をおぼえさせる。

つづいて金堂・灌頂堂と歩を運ぶ。境内には先刻のバスに同乗していた天王寺附近からきたという中年の二婦人の外、殆んど観光客らしい姿はなかった。室生の山は鬱蒼という形容そのままに、深い樹木が層々と重なっている。その山腹を僅かに切りひらいて営まれた諸堂は、すべて物古ものふるりてやさしく、つつましかで、いかにも女人高野の名にふさわしい。ここは古くから真言密教の道場としてかくれもないが、仏教道場とはもともとこの様な姿であるべきではないか等、柄にもないことを思ったりした。時々空が暗くなつて時雨雲が通りすぎた。

有名な五重塔は金堂からも弥勒堂からもはなれて、ひっそりと立っていた。黒々とした杉の老樹の間から赤い朱塗りの塔がみえた時、思わず息をのんだ。何という美しさ。何というやさしさ。まるで手の平に乗せられる程の感じであった。

この塔は高さ十六・二（五丈二尺四寸）、二・四五平方（二・四五平方）。わが国の木造五重塔ではもっとも小さい。私たちが昨夕眺めた興福寺の五重塔の総高四十九（五丈二尺四寸）にくらべると、約三分の一にあたり、相輪の十五（五丈二尺四寸）にほぼ等し

いのである。弘法大師が一夜にしてこれを建てたとの伝説が生まれたのも無理ない。

私は遠くから塔を仰ぎ、歩を移しては塔の周囲を幾度かめぐった。長い年月をあこがれた塔であった。冷たい時雨が二すじ三すじ塔をぬらし私の頬をうった。それでも私は飽くこともなく塔を見つづけた。天平か平安初期か塔の建築年代は、建築史家や美術史家の間に異説があるが、塔はそんなことにかかわりなく、千年の歴史を秘めて冬空に立っていた。

(昭和三七・一二・三夜)

湯川政一郎氏のこと

「紀州新聞」昭和三十八年一月二十九日掲載

一月二十七日、勤め先で日直勤務をしていると、川辺町収入役藪忠造氏から湯川政一郎氏が長逝されたと電話があった。

私の青年時代、湯川氏は既に矢田小学校長をしておられた。一夜小学校へ遊びにゆくと、宿直の湯川氏は夕食に帰って不在であつた。「大事な学校を空にして帰るとは怪しからん」。なまいき盛りの私は湯川氏に絡んで、温厚な氏を怒らせた。若気のせいとはいえ汗顔の外はない。

湯川氏は若い時分から文学を愛好された。随分おおくの文学書を蔵しておられたようだ。豪華本の「島田赤彦全集」や「幸田露伴全集」を揃えて、若い私を羨ましがらせたこともある。文学を愛されただけでなく、湯川氏は行々氏の俳号で句作もされたし、晩年のことだが矢田野呆太郎の号で、茂吉ばりの歌も作られた。

早くから児童の綴方教育に力を注ぎ、鈴木三重吉の「赤い鳥」誌上に、日高地方の小学生の作品をおくり出したことは、かつて堀内喜一郎氏が本誌上に書かれたとおりである。

湯川氏は文学を好んだが、一面酒も好きであつた。踊りもうまかつた。一口に云うと長く教育畑にいたが、所謂教師臭が少なかつた。青年教員時代はひそかに紅灯の巷に耽溺した風流もあつた。酔うところの中岡楼にいた雛奴、桃太郎とのロマンスを語ったりした。いつかこの話を小説風に書いて本紙に連載していたが、七十ちかい人の筆とは思えぬ甘いものであつた。湯川氏には確かに何時までたっても、よい意味で大人になれぬ一面があつた。分別臭い人で充滿している、いまだきまつた希有の人柄であつた。

私はこゝ十年程前から湯川氏に急に親しくしていただいた。それは湯川氏も私も「矢田村誌」の編集委員として、しばしば会合する機会があつたためであつた。数年前の初冬、湯川氏と宮所恒楠氏と私の三人で京都に

行ったことがある。所用が終わって宿で酒になった。湯川氏も宮所氏も名うての酒豪である。私は適当に盃を交えたが、そのうち湯川氏は寝てしまった。

私と宮所氏はまた京の町へ出て酒を飲んだ。三人が同じ部屋へ寝た。夜中、急に大きな物音がして眼がさめた。用便にたった湯川氏が廊下から庭へ墜ちた音であった。怪我はなかった。三人は大笑いしてまた眠りについた。

翌日、奈良へ回るといふ宮所氏と別れて、私は湯川氏のお伴をして苔寺と竜安寺に遊んだ。観光会社に勤めておられた湯川氏は乗車優待券をもっていた。湯川氏に食つついてゆくと、汽車も電車も無料で通してくれた。だから「俺の元気なうちに二人で大和巡りをしよう」と盛んに誘ってくれたのだが、私の方で愚図く／＼しているうちに、湯川氏はどうとう御伴のできぬ遠いところへ行ってしまった。嗚呼。

（昭和三十八年一月二十七日湯川氏の通夜から帰りて誌す）

維新雑話

「紀州新聞」昭和三十八年一月一日掲載

慶応四年旧正月三日、会津・桑名その他の兵は、薩長軍と戦って大敗した。鳥羽・伏見の戦いがこれである。

越えて十二日敗走する会津・桑名兵は由良港に上陸して日高平野へ落ちた。その数五百名。藤井村で扱った会津兵のみでも約百六十名に達したという。

上陸地由良港では一先ず阿戸・網代・横浜の民家へ分宿したが、宇佐八幡社の御旅所へ野宿した組もあった。敗残の会津兵は大体三隊にわかれていた。第一隊は上級武士、第二隊は下級武士がおゝく、中には刃こぼれした刀剣を投げ売りして、酒をあふる者もあった。第三隊は傷病兵が主で、繃帯姿で戦友の肩にすがった者もまじっていた。

会津兵の由良浦滞在の日数は明らかでないが、屯所の阿戸御旅所で武士達が刀剣の手入れをしているのが、網代海岸から望見された。

大正末年に他界した網代の一老婆は、この時兵士達の鬚剃りをしたが、老兵も若侍も汗にまみれた木綿鉢巻の裏に、南無阿弥陀仏の名号がそれぞれ記されており、戦争に臨む侍達の心魂がしのばれて涙をさそったと、後々まで語った。

また或る農家では落武者達の食料に乞われて、大事な牛を手放したところ、兵士たちは太い牛の首を一刀でうちおとし、村人達を驚嘆させた。

網代念興寺の一番高い所に、あまり大きくはないが二基の墓がある。誰が供えるのか四季おりおりの花が手向けられ、村人は「会津さんの墓」とよんでいる。墓碑の苔をはらうと「公儀見廻役二百石、阿部四郎」、「土井忠蔵」の文字があり、寺の過去帳には若くしてこの地で自刃した会津藩士と記されているという。このほか横浜の光専寺の墓地には、甲冑のまま葬られた士もあると伝えられる。いつの世でも戦いは悲惨である。

新年早々くらい嘶になった。話題をかえよう。やはり会津落武者の話である。

この時、財部村好浄寺へは会津兵五十三名が宿泊した。同村往生寺に宿泊した中に丸山鎮之丞があつた。丸山は鳥羽伏見に転戦して勇名を轟かした丸山隊の隊長で、武人にして文人、三千二百石の本身であつた。また抱石と号し漢字、書画をよくした。一日御坊村浄国寺の画僧快処上人に招かれ、浄国寺で終日詩作をたのしんだ。夕刻往生寺へ帰ろうとして日高平野から西の空をながめると、くろぐとつづく煙樹ヶ浜の大松原に、夕陽がまさにくれんとしていた

詩成出寺夕陽催（しなりてらをいずればゆうようもおす）

野径逍遙猶未回（やけいししょうようしてなおいまだかえらず）

一抹余紅万松外（いちまつのようぼうんしょうのそと）

近山紫処遠山白（きんざんむらさきのところえんざんしろし）

戊辰春日碧雲道蘭浦晚帰

これは丸山が詠んだその時の詩である。

（本稿は由良町、中井亀吉氏に負うところが多い。感謝の意を表する。）

由良へ来た徳川慶喜

「日高新報」昭和三十八年一月一日掲載

（維新秘話）

この話は日高郡公民館連絡協議会が昨春来編集中の「日高民話伝説集」の資料に、編集委員、中井亀吉氏が寄せられたものであるが、内容が殆んど史実にちかく、民話伝説とよぶには、少し違うように見える。しかしこのままでは惜しい郷土資料と思われるので、中井氏の承諾を得て本紙に載せた。

〇〇〇
慶応四年(一八六八年)

九月八日は明治と改元された日である。その年の一月七日か八日のことと云うから、まだ慶応とよばれていた時である。由良湾に突然数隻の黒船があらわれて、正月気分の人々を驚かした。

それより数日前、鳥羽伏見の戦いに敗れた征夷大將軍徳川慶喜は、敗残の身を一先ず大阪城にかくした。大阪港には幕府の軍艦数隻が待機していた。六日夜慶喜將軍は会津藩主、松平容保以下をしたがえ、密かに大阪城を出た。幕艦開陽丸に投じて江戸へ逃れるためであったが、あいにくの暗夜で艦が見つからず、ようやくアメリカ船で一夜を明かしたところへ、七日朝開陽丸から迎えがきてそれに乗った。

軍艦開陽丸は慶喜公とおおくの幕兵を乗せて、僚艦四隻と前後して大阪港を出ると、まっすぐ紀州海岸を下して江戸へ向かう途中、どうした理由であったか由良港に碇をおろしたのであった。俄なできごとで村人達が仰天したのも無理はない。

いうまでもなく紀州藩は三百年来、徳川親藩の随一である。幕府の威望昔の如くでないとはいえ、村人らは心から將軍の一行を迎えた。船がついたのは網代の沖合で、同地の楠山某は恐縮して將軍を小船に移して阿戸浦へ渡した。楠山家には今も慶喜公が署名した感謝状が伝えられているという。

慶喜將軍の一行は由良の地で数日間滞在した。阿戸浦の専教寺が宿舎であった。後年同地の大江某は当時を回想して語ったところによると、海岸から寺へつづく百米ほどの道の両側には、白い幕がめぐらされ、要所所には警護の士が立っていたということである。

そのころ七、八歳であった大江も、大人達にまじって將軍を迎えたが、恐いものみたさと物珍しさで、子供の身をさいわい、ちょこちょこと人垣をぬけて、幕合から將軍の寺入りを覗き見した。路の上にも白布が敷きつめられて、白無垢の装の大將が三人、間を置いて悠々と歩を運んでいた。子供の大江にはどれが本当の將軍か判断がつかなかった。恐らく徳川將軍の身邊の万一に備えて、同じ装の者を仕立て偽装していたのであろう。

明日香路

「紀州新聞」昭和三十八年一月三十日掲載

今年は正月から厳しい寒さがつづいた。前日の夕方おそく、雪と氷に埋もれた多武峰観光ホテルにいた私たちは、翌十四日午前、談山神社に詣でた、宿から一町足らずの道であった。深い雪であった。

関西日光といわれるこの神社の華麗な建築物は、享禄五年（一五三二）に再建された総高四十三尺、総桧皮葺の十三重塔を中心に、雪をかむっていた。朱塗の建造物が雪に映えて目にしみた。私たちの外に観光客はなかった。

冷たい拝殿で宝物を見た。外へ出ると回廊の軒端から多くの金灯籠がさがっていた。永正、天文ごろ（一五〇四―一五五七）の銘文のものもみられるという。その金灯籠の中に小鳥の巢があった。案内人は「雀が雛をかせしました。雀のあとへセキレイがまた卵を生みました」と説明した。道成寺の宮子姫物語の雀は紫宸殿の軒に巢をかけたが、ここの雀やセキレイも、とんだ洒落者だと思わずおかしさがこみあげてきた。

私たちは山を下って聖林寺の十一面観音を拝んだ。随筆家岡部伊都子はその著「埋もれた古寺」でこの像を「観音の威烈」と形容している。たしかに厳しい美しさである。凜然たる美といってもよい。収蔵庫の表に句碑があつて水原秋桜子の

木の实降り 鴨鳴き天平観音像

の句があつた。

正午ちかく私たちの自動車は明日香路を走っていた。肅条と冬枯れていたが雪はなかった。山中不艸氏が車窓から神山備山や雷の丘をもとめているうちに、飛鳥坐（あすかにます）神社についた。境内の老樹は鬱蒼と神さびていたが荒廃の色が濃い。私はふとわが村の土生八幡神社が、もとは飛鳥神社であつたことを思い出した。石段の右手に小さな碑が建っていた。

ほすゝきに夕ぐもひくき明日香のや わがふるさとは灯をともしけり

の一首が刻まれていた。歌も文字も釈迦空のものであつた。逍空、折口信夫の祖父造酒介は、ここの神官飛鳥氏から出て、大阪木津の生薬屋折口家を嗣いだ。飛鳥の地を逍空がわが故郷と詠んだのはこの故である。

すぐれた国文学者でまた特異な民俗学者でもあつた折口信夫は、万葉学者として有名な武田祐吉らとともに、わが郷土の先学田端憲之助氏と、神官皇學館で机をならべて学んだ間柄である。

「折口信夫全集」書簡編には田端氏との交遊を物語るいくつかの書簡があるのみならず、若き日の逍空は田端氏を訪ねて日高の地に遊んでもいる。

石段を昇ると神殿の前へ出た。古式を誇るこの式内社も、今は柱は朽ち、屋根は破れまっとく見る影もない。小山豊氏が私をよんだ。おびたぐしい陽根であつた。大小十数個はあつたろうか。殆んどが自然石にちかく余り人工の痕はない。墓石のように並べて祀つてある。性神もこう集まると面白くない。

自動車はまた走って通称石舞台で停まった。蘇我馬子の墓と伝えるこの古墳は、周囲に壕をめぐらし、三十

数個の巨石をたゝんで、怪物の如く冬空に露呈していた。まったく石舞台の名に相応しい。評論家小林秀雄は「蘇我馬子の墓」で、この古墳をみた感動を

岩の隙間から、青い空が見え、野菊めいた白い花が、しきりに揺れている。と書いたが、今はその野菊らしい花さえもなく、野面をわたる風が冷たかった。

日高民話伝説集

「紀州新聞」昭和三十八年四月三日掲載

郡公民館連絡協議会から頼まれていた「日高民話伝説集」の仕事が、ようやく終わりに近づいた。はじめて話のあった昨年春から、ちょうど一年になる。

この間、十数名の編集委員は根気よく、それぞれの町や村から、もはや忘れられようとしている、土地土地の古い話を集められた外、委員以外の熱心な数名の御協力や、日高、下山路両中学生の参加があった。また既刊、未刊の諸著や報告書類、新聞雑誌に出ていたものも、目にふれる限りは取入れた。中には難しくいえば民話伝説の埒外に出そうな話も混じっているが、民俗上おもしろいものは拾っておいた。

こうして集まった民話伝説は総計四百四十五篇にのぼった。四百字詰原稿用紙五百枚にちかい。単に数量だけをいえば、これまで出ていた森彦太郎先生の「南紀土俗資料」伝説の部百四篇や、那須晴次氏著「伝説の熊野―日高地方の部」四十五篇より、はるかに多い。

いさゝか手前味噌になるが、私はこれまで二、三の書物の編者にしたがったが、今度ほど楽しく仕事をしたことはない。委員諸氏からとゞけられた原稿を整理しながら、一人でよろこんだり吹き出したりしたことであった。お話のどれもこれもが悉く朝夕見なれた村々の、山や川や野や畦道が舞台になっているのだ。

例によって愛嬌者の河童や狸や狐が出てくる、恐ろしい池や川の主が登場する、変わり者の爺さんや婆さんが顔を出すかと思うと、五十五万石の紀州さんがのんびりと姿をみせる。強欲な悪代官をこらしめる鉄砲の名人があるかと思うと、悲恋に死んだ美しい男女の物語も幾つかある。また切目本村の元旦の初詣や、中津村坂本の「さいい食い祭」という興味ふかい行事もおさめられている。

肝心の本もできぬうちから前口上が長すぎたが、要するにここには古い時代の民衆の知恵、ペース・ユーモア・抵抗と云ったものがあって、私たちの共感を呼ぶ。本ができたらしきと歓迎されると信じている。

南部川村に荒林さんとよぶ人がいた。本当の姓は荒川というのだが、荒川さんのすることが何でも大仰のため荒林が「しこな」になったのである。

ある年荒林さんは南瓜をつくった。何でも肥料（こやし）をウンとやらねばならぬと、豆玉という七貫目もある大豆粕の円盤のまん中に穴をあけ、そこへ南瓜を植えた。

秋になって畑に行ってみると、実はどこにも見当たらず、蔓が一本延びているだけであった。荒林さんは「これは、おかしい」と蔓を伝ってゆくと、大きな谷を二つ越えてその先に、たった一ツ南瓜がなっていた。荒林さんは二人の人夫を雇うて家へ運んだという。

四百四十五篇の中から短いのを一ツ抜いた。南部川村に伝わる話で、西川裕委員の報告のものである。何ともあきれたことであるが、「民話伝説集」には、こんなとぼけた話が山ほどある。御期待を乞う。

雑木の庭

「紀州新聞」昭和三十八年四月二十八日掲載

庭の緑が日毎にふかい。

三十年ほど前ちいさい離れをつくった際、植えこんだ雑木が、人間なら今が血氣ざかりに成長した。勝手気ままに枝をのびし根を張って、部屋の中はひる間でもうす暗い。

いつであつたか物好きな植木屋が、庭木の手入れをさしてくれとやってきた。冗談じやない、お前さんの手を借りるような代物かい。と笑うと、いくら何でもこれじゃ雑木林同然ですよと理屈をこねる。面倒くさいので、あゝその雑木林にしたいと骨を折っているのだと、やりかえずと庭師はあきれて退散した。私が猫の額大の空地を雑木林にしたいというのは、あながち小うるさい庭師を追払うための方便ではなかった。実際私は名も知らぬ野草がすきなように、やくざな雑木、そして雑木林がすきなのだ。ことに晩春から初夏にかけての、精力的な雑木林につよくひかれる。庭師の手入れがゆきとゞいて型どおり石灯籠と池があつてというよう

な、整った庭園は貧乏人の私には向かぬ。
大正^{一九三三年}十二年の夏であつたか、軽井沢の山荘で人妻と情死した有島武郎は、もう一度秋空をみて死にたいとい

いのこしたのは有名な話だが、私はやっぱり晩春初夏がよい。死ぬなら青葉の中で死にたい。
数日前、印南の小谷緑草氏に招かれた。私がきたというので物堅い中田宇南氏も、夫人とお二人で顔を出さ

れた。病後で禁酒中の宇南氏には悪かったが、緑草氏と二人で酒をのんだ。例によって私が馬鹿のひとつおぼえの「芸者ワルツ」をうたうと、緑草氏は夫人の三味線で「串本節」をきかせるし、宇南氏まで夫人の手拍子で、ひょうひょうと「枯れすゝき」を披露して、両夫人の仲のよいところをみせた。

いまいまいしいので唄がと切れたとき、有島武郎のはなしを持ち出し、だが僕はやっぱり死ぬのなら晩春がよい。ひよっとすると僕も山の緑が美しい六月ごろ、清水町あたりの雑木林で、青葉に埋もれて心中するかも知れぬというと、人のよい宇南氏は「お前、ほんまか」とひと膝のり出すし、緑草夫人は「あんたはよろしいけど、家族はどうなるの」と、真剣な目で私をにらんだ。

印南から御坊どまりの終列車で帰った。車内はがらんとして乗客はなかった。私は乗り越しを用心して窓に顔をよせ、移りゆく暗い窓外に目をやった。稲原駅のホームに咲いた「つゞち」の花が、火のような鮮やかさで酔眼に映った。駅に勤める人々の心根がうれしかったが、正直にいわしてもらえば同じホームに並んでいる、あれは「犬つげ」であろうか、何か動物の型に刈り込んだ、あれは戴けない。丹精な作であろうが、すべて自然なるがよろしい。

どうやら乗り越しもせず家についた。いつぞや気まぐれな植木屋に「雑木林」とわらわれた庭の木々が、四月末の闇の中でむせるような若葉の香りを漂わせていた。ふと、もう「こでまり」の花が咲いたろうかと思いつ出した。一昨春嫁いでいった長女が植えたものであった。

また昨年の秋、近くの山から移したはぜの小苗も少しはのびたろうかと思うた。そうだ明日の日曜日は第一番に「こでまり」と「はぜ」をみて、ついにかねてから見つけてある五輪塔を置く位置をきめようかと考えた。だがいいよ古くさい五輪塔を持ちこむとなると、また老母や女房と一悶着せずばなるまいと一寸気になったが、機が熱さぬようなら急ぐことはない。それよりも久しぶり「葛西善蔵全集」でも読み返そうかと思案した。

葛西は大酒飲みで無頼な生活をつづけたが、珠玉のような短編をいくつかのこした。中でも「椎の若葉」など朗々誦すべき佳作といえよう。胸を病んで咯血をしながらも酒杯をはなさず、食いつめたあげくの或る日、五月の日光にかゞやく椎の若葉に感動して「椎の若葉に栄光あれ……」と、しみじみ詠嘆するのだが……。

私の庭にはあいにく椎の木はない。私は雑木林にたわが家の小庭の檜の木に対し、葛西をまねて「檜の若葉よ栄光あれ……」とよびかけてやろうときめた。

城崎温泉

「紀州新聞」昭和三十八年五月五日掲載

勤め先の運動会で城崎温泉へ行ってきた。まだ余寒の去らぬ三月中旬のことであった。三月十六日正午過ぎ私たちは一先ず姫路駅で下車した。後から来る一組を待合わせるためであった。次の列車まで一時間足らずの時間しかなく、市内を見物するには少し窮屈であった。

私は今から二十年ばかり前にも、一度この町へ来たことがある。姫路から近い西国二十七番の札所、書写山、円教寺を志しての、大阪から日帰りの旅であった。私には夙くから西国三十三番札所巡拝の悲願がある。今は第二十九番と三十三番の岐阜の谷汲山をのこすのみであるが、この時も観音巡礼の途中であったのだ。

私は駅前の大衆食堂で簡単な昼食をすませ、朝から待ち望んでいたコーヒーをのんだ。行く所がないので駅の地下街の書店をのぞいた。構えの割に充実した店であった。川端康成の「古都」や岡潔の「春宵十話」をとってみた。「春宵十話」の巻頭に著者の写真があった。文化勲章を受けたこの高名な数学者の顔は、何か麒麟を連想させた。私は買おうか買うまいかと一寸迷ったが、そのまま書棚に戻してホームに出た。

×

×

×

午後二時二十三分姫路駅をたった。城崎行きの列車「あゆみ号」であった。汽車はまだ冬枯れの播州平野を市川ぞいに走った。播磨から中国山脈の東部を横断して、山陰路へ出るのは初めてだったので、時々手にした文庫本の藤村の「山陰土産」をみては、移りゆく窓外の風景を眺めた。

仁豊野と書いて「にぶの」と読む、難しい名の駅もあった。午後二時五十分福崎駅をすぎた「あゆみ号」は絶えず市川の流れに、近づいたり遠のいたりしなから走った。このあたりから平野が次第に小さくなった、所々に藁葺の農家が点在していた。三時五分鶴居駅を通過した。遠くの山の頂に雪が見えだした。

三時二十五分、長谷駅でしばらく停車した。駅は山裾の小高い所にあつて、車窓から長谷の町が一目できた。全く山間の田舎町であつたが、製材工場などが目についた。

あゆみ号は相変わらず市川の流れにそうて走つたが、雪解けであろう水量はかなり多い。山が深くなつたのか家々の周囲に残雪があつた。谷が両側から迫つてきた。

長谷から小さなトンネルを二つ越すと、線路にも雪が残っていた。山々はすっかり雪であつたが、外は霧のような雨だった。まったく山国へきた感が深い。

生野駅を過ぎた。あゆみ号は、もはや播磨から丹後路に入ったのである。私はふと小倉百人一首で馴染みふかい小式部内侍の

大江山いく野の道の遠ければ　まだふみもみず天の橋立

の一首を思い出した。小式部内侍は同じ歌加留多に出ている「あらざむこの世のほかの思い出に　いまひとたの逢ふこともがな」の作者、和泉式部の娘であって、若くして死んだという。この歌も歌としては別段どうということはないが、作者にまつわるエピソードや、いかにも平安王朝らしいのんびりした調べが好ましい。よけいな思いにふけている間も、汽車は休みなく走る。気がつくとき今まで南流していた川が北流していた。すでに中国山脈を越えたのである。川は豊岡川ともいうが、上流では円山川という。末は城崎附近で日本海にそそぐ。

午後四時、和田山駅に着いた。播但線はここで京都から来た山陰線となる。昭和二年の初夏、二男島崎鶏二と二人で山陰旅行した藤村も、大阪から福知山線にのったが、和田山から私達と同じコースをとっている。私が今度の小旅行に、わざわざ文庫本の「山陰土産」を持ってきたのはこのためであった。

和田山をすぎて八鹿(やおか・昭和三十一年頃まで、現在はどうか)・日高町あたりになると、少しずつ平野がひろくなる。豊岡かまもなく玄武洞を説明する車掌の声が聞かれるころ、豊岡川の流れも次第にゆるやかに

なつて、一体がひろびろとした沼田になる。水郷という感じが深い。
はじめてみる山陰路の風光に氣をとられているうちに、列車は静かに城崎温泉にとまった。先刻来の雨はいつか本降りとなつて、早春とは云え、まだ肅条たるこの北国の温泉町をぬらしていた。

雨の中を私達は今宵の宿舎である「こじまや」に入った。温泉街の中央を流れる何という川であろうか、水の美しい溪流に臨んだ旅館であった。玄関までの路地の植込みに雪よけを施してあるのも、如何にも北国らしい感じであつた。

夕食までのひとときを町の共同浴場へ行った。かねてこの地に遊んだ友人から平凡な温泉地と聞いていたが、清冽な溪流をはさんで温泉旅館がならなり、家並みの後方はよく茂った雑木林で、落ち着いたたたずまいが、すっきり気に入った。

島崎藤村の「山陰土産」によると、城崎温泉の歴史は千年前までさかのぼるが、温泉街として発展したのは

山陰線開通以来のことと云う。また大正十五年（一九二六年）ごろであつたか丹後の大震災で、一時は全滅とまで伝えられ、地震と同時に発生した業火は全町を包み、私達が今見る谷川へとびこんだ者は助かったが、山へ逃れた者は殆んど焼死したともいう。

橋を渡ったところに大きな共同浴場があつた。湧出量の関係であらう旅館の内湯は貧弱で、客の多くはこの共同浴場へ来る。湯は美しく澄んでいた。味は少し塩からく無臭のアルカリ性塩類泉である。

浴場からの帰り、裏町の方へ出てみた。道路の道路の片わきに除雪した雪塊が、数尺の高さに残つて雨にぬれていたが、一向に溶ける気配がなく、また余り冷え込まぬのも不思議であつた。

おきまりの宴会があつて、私は例のごとく酔っ払い、ヌードを見に出かけたが、実はそんなものはどうでもよかった。席についた途端ねむつてしまい、起こされた時はもう裸ダンスは終わつていた。

×

×

×

翌十七日ちかくの日和山遊園地へ行つた。昨日と同じように豊岡川を右に眺めながら走るのだが、途中の水郷めいた景色は美しい。遊覧案内には山陰の離宮などあるが、荒々しい海岸に安っぽい建物が並んでいる。本当はあんな物をすっかり取り払つたらよいのだが、それでは客がよつて来まい。

私達は此処で竜宮の舞というのを見て、海女の実演を見物した。風の烈しい日で波が荒かつた。薄い海女着をつけた三人の娘が、凍るような海水に潜つた。ひとところ残酷物語という言葉が流行したが、まったく残酷物語である。海の色は暗かつた。一とおり歩きまわつて一人でコーヒーを飲んだ。インスタントの、ひどいコーヒーであつた。

×

×

×

午後一時二十一分橋立駅について直ぐ遊覧船に乗る。小さい頃から版画や写真で見あきる程見てきた、天の橋立は目の前に横たわつていた。船は橋立の岬端、文殊の切戸を抜けて内海を一の宮の方に進む。海と云うよりも、むしろ湖の静けさである。

長い砂浜にどこまでも続く松が美しい。いつか朝日新聞の日曜版「旅」に、天の橋立が出ていた。少しあらつぱいが新聞記者らしい、きびきびした要領のよい文章であつた。私はこの小旅行の前、このスクラップブックをさがしたが、見つからなかつた。

船が岬の根元にあたる一の宮につくと、大急ぎでケーブルに乗った。実はケーブルの終点から数町のところに、西国二十八番の札所、成相寺がある。私の今度の城崎旅行の一つの目的は、まったく成相寺の参詣であつ

を忘れてしまった。

その後昨年の初冬であつたと思うが、当時御坊中学校教諭であつた尾浦浩巳氏が、「年表の原稿が出来た、お前も一度読んでみる」と、ザラ紙に謄写版刷りした、かなり部厚い原稿をとどけてきた。私は一見してその精細さに驚き、かつ私のさきの心配が一片の把憂にすぎなかつたことをよろこんだ。折から私は、「民話伝説集」の整理に忙殺され、あまり深く拝見する暇もなく、二、三心づいた点を申し上げたのみで原稿をお返しした。今さら云うまでもなく、およそ一冊の著述をなすには、大きな努力と根気がいる。ことに歴史年表ともなれば、既刊、未刊の郷土関係の文献に目を通すのはもちろん、文献以外の百般の事象も一応知悉しなければならぬ。さらにそれらの諸々の資料の中から、何を捨て何を採るかにも、並々ならぬ苦心があつたに違いない。日高地方社会科研究会のメンバーは、そうして苦難を見事に克服した。

昨年暮れから今年春へかけての寒さは、ことのほか厳しかった。私どもが酒を食らい、ぬくぬくと炬燵の中で惰眠を貪っている間も、メンバーの努力は絶ゆることなく、黙々と続けられた。そして遂に当地方としては初めての、詳細、正確な「日高地方郷土史年表」、第一編が刊行された。けだし単に郷土史に関心をもつ者のみでなく、教育界、文化界、一般文士に与える恩恵は量りがたい。

今回公刊された「日高地方郷土史年表」は半紙一枚判、表紙に当地方のシンボルとも云うべき道成寺全景を色刷りにしているのは、先ず本表を手にする者の心を和らげる。頁をくると西暦、区分、時代、郷土のあゆみ、日本のあゆみに大別して、それぞれの事がわかり易く記入している。文字も謄写版ながら美しい。

こうして縄文文化時代にはじまり、大正^(一九二三年)十二年の日吉座落成に及ぶ、約四千年ちかい我が郷土の重要なできごとが、拾枚、普通の書籍にすれば二十頁にわたり、一目でわかるように配列されている。大変な労力であつたと想像する。一年にも足りぬ短時日に、よくこれだけの成果をあげたと驚嘆の外はない。やはり多くのメンバーの協力が物を云うたのである。

従来、学問とか研究とか云えば孤独なもの、一人でこつこつ続けるより外はないと考えられ勝ちであつた。たしかにそう云う面がある。ことに私どものように古い型の間人は、かたくなまでにそうした傾向に支配されてきたが、一人の力には自ら限界がある。やはり協同研究あるいはグループによる協力が、より効果的であることを、本表の成功でおそ時きながら気がついた。

さて、拾枚、約百九拾に近い項目を、一々ここで紹介するゆとりはないが、ひと口に云えば実に細かく調査がゆきとどいている。かなり久しく郷土史に関心をもってきた私にも、初見のものが散見して教えられる点がおおい。また最近の研究の成果や発見も、例えば昭和^(一九五三年)二十八年の巽三郎氏による松瀬、和佐遺蹟の研究、昭和

三十六年平城京出土の木簡が、もれなく採りあげられているのは有難い。

最後に本年表を読んで、二、三の心づいた点を云わして貰えば、各項目に出典の記載がほしいと云うことである。一例をあげると齋明天皇（六五八年）の四年十一月、有馬皇子の岩代の歌には「万葉集」と出典を明示しているが、大宝三年（七〇三年）五月、飯高ら三郡献銀の条には、原典「続日本紀」の記載がない。面倒ではあるが出典を明らかにしておけば、利用者にとって一層便利である。またこれは単なる間違いかと思うが、古墳時代の条で、「平安時代以降の後期の古墳云々」は、「奈良時代以降の云々」とすべきではないかと思われる。また由良、西方寺の創建や禅宗の改宗のことがあつて、興元元年（二四〇年）興国寺号勅賜がないのは首尾を缺く憾みがある。

その他新しいところでは、宝暦七年（七五七年）、比井王子神社境内から、保元三年（五八三年）在銘の経筒出土のこと、弘化四年（二八四年）、「紀伊名所図会」撰修のため、加納諸平ら巡遊のこと、さらに下つては、明治四十一年（一九〇八年）、湯川浄暢師の「常磐義塾」創立のこと、また大正十二年（一九二三年）一月の森彦太郎先生による「日高郡誌」刊行のことなども、採録すべきではなかったかと思われる。

「そのために原稿を見せたじゃないか。今ごろ何を云うか」と、ねじかえされたら全くその通りで私は一言もない。しかし私はもともとそんな男なのである。気づいた点を正直に申述べたまでで他意はない。御諒承を願いたい。

近來ややもすれば小、中学校や高等学校の教師を、痛罵して快いとする傾向があるやに見うける。成程大勢の中にはひどい先生もある。また時には先生と雖も判断の誤りもあるう。しかしその大部分は真面目で熱心な人々である。大事な子供を託した先生を、その親が悪罵して、どうしてよい教育が行われよう。

現にここに紹介した「日高地方郷土史年表」は、こうした先生達が組織した日高地方社会科教育研究会の方々によって、多忙な児童教育の間に完成したものである。あらためて敬意を表したい。と同時に、引き続き編纂するという第二編の成功を心からお祈りする。

（昭和三八・五・五夜稿）

女郎蜘蛛

「紀州新聞」昭和三十八年六月三日掲載

昨年はどういう加減か女郎蜘蛛が馬鹿におゝかった。蜜柑畑を一まわりすると、どの木にも大たい女郎蜘蛛が網をかけて威張っていた。

数十年ぶりといわれたこの寒さで、他の虫類は大部分参ったようだと聞いたが、女郎蜘蛛は相かわらず健在でいた。もうあちこちにこの蜘蛛独特の美しい網を張りめぐらして、ぬかりなく獲物を待ちうけているのを見かける。

田舎育ちで科学にうとい私は、女郎蜘蛛についての生物学的知識をまったく欠くが、畑仕事などでひよつくりこの蜘蛛を見かけると、久しぶりで幼な友達にでも出逢ったような懐かしさで、思わず「よう元気か」と声をかけてやりたくなる。実際、気のきいた遊び道具も、娯楽設備の一つもなかった私どもの少年時代は、女郎蜘蛛にかぎらず山や野の昆虫や植物が、あるときは大事な玩具であり、ある時は仲のよい遊び仲間でもあった。五月の空が紺青に晴れわたり、日高川原の野茨の花が蒸せるような強い香を、あたり一ぱいにまきちらす季節になると、村の悪童どもは学校の終わるのを待ちかねて、どつとばかり山や野に、女郎蜘蛛をさがしに出たものである。思わぬところで誰よりも大きな奴を、こつそり見つけた時の胸のときめきは、五十年近い歳月をへた今も忘れがたい。

こうして手に入れた蜘蛛は、すぐその場で棒きれに移して喧嘩をさせたり、あるいは持ち帰って屋敷内へ放し飼いをした。朝、眼をさますと真っ先に蜘蛛をみにゆく。女郎蜘蛛はかねて見当をつけておいたあたりに、大きな巣をつくって中央に、でんとかまえている。座のところだけが丁寧に、幾重にも糸をひいているので、下から見るとあたかもローマ字を書いたようである。私達はこれを英語を書いているとよるこんだものである。早速、小虫を捕らえてきて網へ投げてやる。蜘蛛は勇んで獲物を幾重にも糸で巻く。黄色と黒の美しい縞模様の胴が、日ごとに大きくなって艶をます。ある日ものかげに卵をうんでいる蜘蛛を見出して「あっ！」と歓声をあげる。いま時の少年たちにもこうした爽やかなよろこびがあるのだろうか。

森彦太郎先生の名著「南紀土俗資料」男児の遊技の部をみると、

「蜘蛛の喧嘩」として

女郎蜘蛛とて最も闘争性に富める蜘蛛を用ふ。この蜘蛛、形甚だ美なるが故、児輩、捕らえ来たりて邸内に放飼し、随時仕合をなす。細い棒片の両端より伝はしめ、両雄相接するや組んづ纏れつ秘術を尽くすを見て楽しむ。げに残酷なる児戯。

と記されている。

私は本書をよみかえして、ここにいたるごとくに、五十年前の日高の悪童どもの生活を思いうかべ、この子供たちも似たような遊びをした物だと愉快になり、森先生らしい行文のたまじめさにも、ついおかしさがこみあげてくるのである。

蜘蛛でもい出すことがもう一つある。

俗に大殿様でとおっている紀州八代の藩主、徳川重倫侯は、若いときは気性の荒い殿様であった。十二文の足袋をはいた位で体も大きかった。常に朝鮮人参や生姜、葱の白根を好んで、七五三にたゞきお粥の中へ入れて食べた。この重倫侯は蜘蛛の巣が大嫌い、と云って誰にしても不意に顔かかる蜘蛛の網を好む者はあるまいが、とに角大殿様がお出かけになると、近侍の士が大竹箒を十文字に振りまわして、蜘蛛の巣をはらいながら、下に下にと下知しつゝ進んだという。何とものどかな話である。

蜘蛛の巣に朝露まろく日を宿す

私の旧作である。

読者の郷愁誘う

清水氏の女郎蜘蛛

「紀州新聞」昭和三十八年六月十日掲載

清水長一郎氏の月曜随想“女郎蜘蛛”は痛く読者の共鳴を詠んだが、その代表的なもの、一、二を紹介すれば大要次の通り。

○由良町大引 西端 吉兵衛氏

清水先生は史家で郷土研究に深い御造詣を持たれている。その御令名にいつも敬服している一人であり、時折は御坊市で先生をお見かけしたりすると、あの方が――と心密かに敬愛の誠を捧げている私です。

さて女郎蜘蛛の文学的名文を読ませて頂いて、ことの外に悪童だった私も、五十数年前を追想して、その頃の情景に浸りました。こんなことはどうであろうともよろしいのですけど、私の方も不的確ですが、今山野に巣をかけているのは「こがねくも」と違うでしょうか。先生の仰る「じよろくも」は土用あけから発生、無論空家の軒などにも出ます、あれが女郎といわれています。それと体型、殊に腹部円筒形（女郎）、背面前端（截形）、黄金蜘蛛のように思うのです。これが今我が世の春を謳歌して草間に網を張っているやに存じます。失礼とは存じましたが、今後も名文を御投稿の上、御指導ください。

○御坊市野口 林松二氏

女郎ぐもの記事、面白く拝読いたしました。私も少年時代は女郎ぐもマニアで、毎春桜の咲く頃から田植頃まで毎日の様に学校から帰宅するや、カバンを投げ出す様にしてにおいて女郎ぐも狩りにかけ出したものでした。家の軒も植木の枝もくもだらけで、友達のそれとくらべ合っては自慢のし合いをした者でした。少年時代は今の田辺市に居ったので、あの田鶴の梅林がかせぎ場でした。懐かしい思い出です。

片山隆三氏の追憶

「紀州新聞」昭和三十八年六月十七日掲載

六月十日の夕食後、私は前々から頼まれていた原稿を書いた。床についたのは十一時を大分まわった時刻であつた。

ふだんは寝つきの早い方なのだが、その晩は妙に寝苦しかった。それでもいつしかウトウトとした、私は夢をみていた。片山隆三氏が夫人に扶けられながら私の方へ歩いてくるのだ。片山氏は昨冬来ずっと病臥中で、昨今は殆んど食事も摂らぬと聞いていただけに、おかしいと思つたら目がさめた。

私は、ひよっとすると片山氏が、お亡くなりになつたのではないかという気がしたが、そのまままた眠りつづけた。

翌日、私は、そんなことをすっかりと忘れていた。十一時ごろ日高新報の藤田草宇氏が、電話で片山氏の畧歴を問い合わせてきた。私は片山氏が亡くなられたのではないかと聞くと、昨夜十一時過ぎ長逝されたと答えた。私が片山氏の夢をみた時刻である。

私が片山氏に初めてお逢いしたのは、氏が川辺町鐘巻の裏手の高台にあつた借家にお住まいの頃であつた。多分、昭和^{一九四九}二十四^{五十年}、五年頃であつたと記憶する。その後、南紀郷土学会ができてからは、度々お話も伺つたし、一緒に史跡めぐりもした。

私は氏のお若い時分のことをほとんど知らぬ。ただ氏が旧稲原村南谷の旧家の出であること、紀北農林学校卒業後、中央大学経済専門部に学ばれたこと、青年時代は一かどの文学青年で、島崎藤村に私淑したこと、古く御坊で発行していた紀南新聞に、片山翠波のペンネームを以て、盛んに活躍したこと。はげしい革新思想の持ち主であつたこと。せつ子夫人が明治の文豪、長谷川^{二葉亭四迷}二葉亭の長女であること等々を、おぼろ気に承知していたに過ぎぬ。

氏は長く朝鮮の某農場の技師をつとめられたが、わが国の敗戦で着のみ着の儘、日高へ引きあげられた。後、常磐義塾の教諭となり、同校の廃校で一時稲原中学校の教諭もされたが、その後本県農業改良普及員となり、一昨年春であつたか高令退職をされ、以来、御坊市日の出町で悠々老を養つておられた。

氏は南紀郷土学会が結成されると、いち早く参加された。会員は十数名であつたが、一癖も二癖もある人士がそろつていた。中でも片山氏はその錚々たるものであつた。孤高にして気骨稜々、安易な妥協を好まず、博学にして何にでも一家の識見をもつておられた。氏が本県農業改良普及員の資格試験に応募された時のことである。

大根、人參、牛蒡、葱、その他いろいろの種子をみせて、その名称を書かせる試験問題が出た。片山氏は「こんな子供だましのような試験をするとは、俺を馬鹿にするにも程がある」と、片っ端から南瓜、南瓜、南瓜と答案を書いた。つづいて口頭試験の時間になった。氏の順番がきて別室に入ったまま、いつまでたつても出て来ない。後の者が気が気でなく、「片山さんのことだ。何をしているか知れたものでない」と、こつそり覗いてみると、氏は試験官の前で、とうとう和歌山県の農業政策をぶちまくり、県の農業技師は小さくなって謹聴していた。

片山氏はこの時の試験で見事に落第した。「よし、見ておれ」氏は今度は和歌山県より数倍も競争のはげしい京都府で受験して、トップで合格したという。

戦後の人手不足が解消すると、老サラリーマンに対する風当たりが次第に強くなった。片山氏も後には南部へ転勤させられたり、あちこち回されて大分いじめられた。しかし氏はなかなか辞められなかった。立派な御令息をお持ちであつたが、「仿けるうちは子供に迷惑をかけぬ」と、御令息に頼るのをいさぎよしとされなかったのである。何かといえば子供に頼りたがる老人にはめずらしい。

片山氏がなかなか辞めぬのに業を煮やしたのであろう、県は氏を高野山に転勤させた。氏は「ああ高野には面白い植物も多いし、夏は涼しいし、別天地だよ」と、さっさと赴任した。氏が高野へ発たれる数日前、私たちは二、三人で西町の野田三郎氏の宅において、ささやかな送別会をしたが、ひどくよるこんでくれたものだ。

「やめましたよ」ある日片山氏は公社へ見えて、しばらく遊んで帰られた。気むずかしい方であつたが、妙に私を可愛がつてくれた。私は時々氏をお訪ねして、お話を承つたり、朝鮮から持つてこられた仏像や書画や陶器を見せてもらつたり、酒を飲んだりした。氏は酒を愛された。

「そんなにお過ごしになつては」と、せつ子夫人にたしなめながらも、なかなか盃をおかれようとしなかつた。

氏は南紀郷土学会から「つゝぢ」・「松の美的価値」、その他、おおくの研究報告を出された。また日高新報紙上へも、しばしば特徴のある文章をよせられた。最早、数年にもなろうか、暖地りんごの栽培に関して、誰かと論争されたことがあったが、実に立派な所論であったと今におぼえている。

退職後の昭和^{一九六一年}三十八年八月、氏は南紀郷土学会から「昔話し故郷の風色」を出し、同年十月さらにその続編を出された。私は深く感動し、今後この種のを続々お書きになるようお願いしたことであったが、ついに第三集は発刊を見ずに終わった。

そのころから氏の生命をうばった脳軟化症が、少しずつ進行していたのである。

私が最後に片山氏にお逢いしたのは、確か昨年の十月ごろではなかったかと思う。しばらく縁側で話し込んだが、もともと口の重い方であったのだが、一層、言葉が少なくなり、動作が緩慢で往年の鋭さが見られなかった。ちょうど夫人が外出中で、コーヒーを入れてやると御自身で台所へ立たれたが、コーヒー茶碗が見つからぬと、長い間さがした上、やつと茶呑茶碗へコーヒーを入れられた。

その後も二、三回お訪ねしたが、その時はもう床についておられ、お目にかかれなかった。

五月十一日、到来物の洋菓子をもってお見舞いした。もう人の見分けもつきにくく、食事もほんの少量しか摂られないとのことであった。片山氏は生来お元気な方であっただけに、老人に似ず健啖であった。それがそんな具合では、最早あまり長いのではないかと、暗い気持ちで帰った。それから、ちょうど一カ月、六月十日の午后十一時すぎ、氏は夫人に見まもれながら、しずかに七十四年の生涯を閉じられた。

(昭和三八・六・一一夜誌)

「余滴」

「紀州新聞 昭和三十八年六月二十日掲載」

清水長一郎氏が片山隆三氏の追憶(十七日付本紙掲載)で、ふだんは寝付きの早い方なのだが、その晩は妙に寝苦しかった。それでもいつしかウトウトしていた私は夢を見ていた。

▽片山隆三氏が夫人に扶けられながら、私の方へ歩いてくるのだ。片山氏は昨冬来ずっと病臥中で、昨今は殆んど食事も摂らぬと聞いていただけに、おかしいと思ったら目がさめた。私はひよつとすると片山氏がお亡くなりになったのではないかという気がしたが、そのまゝまた眠りつづけた。

▽翌日、私は、そんなことをすっかり忘れていた。十一時ごろ日高新報の藤田草宇氏が、電話で片山氏の畧歴を問い合わせてきた。私は、片山氏が亡くなられたのではないかと聞くと、昨夜十一時すぎ長逝されたとされたと答えた。私が片山氏の夢を見た時刻である――と述べていたが、不思議なことがあればあるものである。

▽片山氏が臨終の時刻と清水氏が夢をみた時刻がぴったり一致するのだ。これを偶然といって片付けてしまつてよいものかどうか、清水氏の原稿に目を通した時から何か心に引っかかるものがあるのをどうしようもなかった。

▽大体夢は心の何処かにひそんでいることが、とりとめもなく現れて出てくるものだ。清水氏が片山氏を案じているから夢をみたのに違いなかるうが、それが亡くなられた時刻と一致するということは、片山氏もまた清水氏を忘れ難く、昇天の際、その霊が清水氏の許に飛んだのではなかるうか。そうすれば片山氏の意志も仿いていたことになる。

▽そういえば私にも未だに解しかねる体験がある。それは第一回の応召で北支山西に転戦したとき、生命に危険が迫ると必ずと言ってよいほど亡父の夢をみたことだ。弾の下をくぐる都度、父がつきまとい、いど戦争に弱い私を庇護し続けてくれたような気がしてならない。

▽今でこそ打ち明けるが、私は周囲の二、三の反対を押しきつての猛烈な恋愛結婚であつた。そして三カ月も暮らさない間の赤紙である。妻の黒髪を巻こんだ千人針の腹巻きの下に、しっかりと妻の写真を抱きしめての転戦で、一寸でも暇があるとその写真を見て、短く甘かつた新婚生活の思い出にふけた。

▽それに私は死んだものは仕方がない。孝行するのであれば残つた母に、父と二人分の孝行しようと心に決め、なるべく父のことを忘れ、妻と母のことばかり考えようと努めているのに、その夢は滅多にみず、みる夢もみる夢も殆んどすべて父の夢ばかりであつた。

▽神も仏も信ずる人の心の中に住む――と当時から一種の悟りを開いていた私ではあるが、この父が夢枕に立つてくれたことは靈魂不滅の現れであらうか。そんなことある筈がないと否定しながらも、一方では肯定せざるを得ないのである。

和訳仏説阿彌陀經

「紀州新聞」昭和三十八年七月三日掲載

自分のことから書くが許されたい。

私の家の宗旨は古くから浄土真宗である。特に昭和三年^(一九二八年)に死んだ私の祖母は真宗にふかく帰依していた。読み書きはまったくできなかったが、正信偈をよくそらんじた。

もはや五十年ちかい昔になる。当時、村の寺では毎月「お講」というものがあつた。本来は信者たちがあまつて、和尚から仏法を講じてもらったのであろうが、そのころは主に老人ばかりが寄りあつて、和尚の読経のあとで、各自が持参した昼食をともにしながら世間話をする。いわば爺さん婆さんたちの、一種の社交の場になつていた。

子供の私はお経の後で出る食事が楽しみで、いつも祖母の腰巾着になつて寺まわりをした。

また寺では春さきになると永代経があり、冬には報恩講がつとめられたが、このほかにも随時に説教僧がまわつてきた。祖母はその都度わたしをつれて寺へ出かけた。幼い私は祖母の膝に、ちよこなんと抱かれながら説教を聞いた。「食めば食め、殺さば殺せ」高座の上で身ぶりをまじえて説教師が説いた。「吉崎の肉付の面」の話など、つい昨日のこのように思い出す。

私が小学三、四年生のころ、村の住職が日曜学校を作つて、子供達に正信偈の読誦を教えた。寺にちかい私は毎日曜日に出席して、ほめてもらつた。

やがて私は青年になつた。当時隣村に碁の強い和尚がいた。私はその和尚から囲碁の手ほどきをうけた。寺には姉妹の娘があつた。夜になると大勢の青年があつまつて、クラブのような賑やかさであつた。和尚はその青年達に碁をおしえ、経文の読誦を教えた。私はここで浄土日用謹行式と書いたうすい一冊の読み方をおぼえた。

倉田百三の「出家とその弟子」が読書界を風靡し、嘆異抄をわからぬなりに読んだのもその時分であつた。こうして私は子供の時から、割合宗教的な環境の中で育ち、仏教のもつ幽玄な世界にひかれてきたのだが、年とともにひねくれた青年になつた。深いことは何一つ知るはずもない癖に、仏教―仏教ばかりでなく宗教全般に対し、懐疑的になりそれが今につづいている。

私が谷本重清師―中津村高津尾、浄土宗西山派、淘汰寺住職から師が訳した「和訳仏説阿弥陀経」一巻をいただいた。蓋し谷本師とはかつて日高中学校(現日高々校)で、ほんの暫くであるが同窓生であつたよしみによるものである。

あるとき、釈迦牟尼世尊、中印度、舍衛城の祇園精舎に、多くの弟子らと共にましましき

谷本師が和訳した仏説阿弥陀經は、この美しい文章ではじまる。つづいて

その時、世尊はおもむろにみ口を開き、長老舍利弗に告げていわく、これより西の方、諸仏の国々を遙かに、また、遙かに過ぎゆけば、一つの世界あり、名づけて極樂という。

と、お釈迦さまが高弟の舍利弗に、極樂の結構をお説きになるくだりになる。原文では

「爾時仏告、長老舍利弗、從是西方、過十萬億仏土、有世界、名曰極樂」

とあるところである。

谷本師がこの和訳をなすにあたっては、単に一般人にわかりやすく訳するというだけでなく、仏前で読誦するに相応しいものにと、骨をおったといわれるが、そうなるという難しい制約ができてくる。第一快適な一定のリズムが必要である。簡潔でしかも俗耳に入りやすい言葉をえらばねばならぬ。經典である以上、古典的な莊嚴さを失ってはならぬ。谷本師はその困難をみごとに克服された。

素人中の素人である私が仏典についてあれこれいうのは、まったく噴飯ふんはんものだが、盲人蛇に怖じずの類で、あえて妄言を許してもらえば、前掲「爾時仏告」を「そのとき、世尊おもむろにみ口をひらき」と訳し、さらに、「從是西方、十萬億仏土」を「諸仏の国を遙かに、また遙かに過ぎゆけば」と表現したのは、まったくうまいものだと思ひ、師の苦心の程がしのばれるのである。

いったい私は經典のことはよくわからないが、阿弥陀經などは幼少のころから、聞きなれているし、經文も比較的理解しやすいのではないかと思っている。

そして、それは主として当時の人間が描いた最高の理想郷の結構を説いたものではないかと考えている。したがってその表現はすこぶる美しい。いわば仏典のうちの詩篇のようなものではないかという気がするのである。

どちらを見ても濁ったことのおおい昨今、わたしは時々、谷本師訳の阿弥陀經を読誦して、その俗腸を洗おうと思う。

あとがき

一、清水長一郎遺文集（4）は昭和^{一九六〇年}三十五年八月より三十八年七月まで、「紀州新聞」を中心に地方紙に投稿し、スクラップブックに保存していたものをデジタル化したものである。

一、巻頭から巻尾のあいだに、南紀史蹟研究会員物故者の思い出が二、三書かれ、日高地方の郷土誌研究の先輩が亡くなっている。

一、東京オリンピックをひかえ高度成長期である。史蹟顕彰会の史蹟探訪は、相変わらず国鉄、路線バスを利用して移動しているが、一方別の紀行記には、御坊の旦那連中と自家用車を連ねたドライブに便乗したことや、反面、整備工が同行したらこそ無事日帰りできたという紀行文もあり、発展途中の国産自動車業界の品質もわかる。

一、遺文集（4）の大半は随想だが、その文中には市町村史誌に収録されていない、里伝、習慣、俗習、開発で失われた遺蹟等、各地の後世に伝えておきたいことが随所に出ている。

一、引き続き遺文集（5）に取り組みたい。

平成二十五（二〇一三）年一月十一日（金）

清水 章博